忍法秘巻

早乙女貢

徳間文庫

徳間文庫

早乙女 貢 作品

おれが天一坊《全二冊》
見習い同心獄門帳
残映
新選組銘々伝
八丈流人帖
忍法かげろう斬り《全三冊》
血刃街道
忍法秘巻

カバーイラスト＝西のぼる
カバーデザイン＝池田雄一
カバー印刷＝真生印刷㈱

さ
7-11
500

忍法秘巻

早乙女 貢

徳間文庫

9784195776469

ISBN4-19-577646-5

C0193 P500E (0)

1910193005005

定価500円(本体485円)

師・楯岡ノ道順の女と契った伊賀忍者・石川文吾は、やむなく道順を斬り、京へ出奔した。時あたかも秀吉が天下の覇権を握ったころ。

秀吉の好色から美貌の後家・お牧を救ったことで、隠れ栖む文吾らへの追及は峻厳を極めた。紅蜥蜴の密告で捕らわれたお牧は自害、復讐に燃える文吾は大坂城に潜入し、無垢の姫・茶々を襲った……。紅蜥蜴の正体は？　秀吉との宿命の対決は!?　時代長篇。

徳間文庫

忍法秘巻

早乙女 貢

1926年
ハルビン生まれ

徳間文庫

忍法秘巻

早乙女貢

徳間書店

早乙女貢　徳間文庫

徳間文庫

忍法秘巻

早乙女貢

徳間書店

目次

霧の中の忍者 5
炎の城 25
ささやく闇 59
紅蜥蜴（べにとかげ） 67
夜ごとの肌 102
風盗 133
黒ゆり姫 157
影法師 182
梟の山河 201

野点て忍法　222
忍者の血　243
三条河原　259
解説　清原康正　275

霧の中の忍者

一

南伊賀の盆地を灌漑する長流名張川はその源を大和山塊宇陀郷に発する。天に連なる倶留尊山を母胎とした流れと、兜嶽より滴って伊賀見より箕曲をえぐり流れ青蓮寺をへて漸く盆地に至って合するそれと、いま一つ大和伊賀を結ぶ山街道に添った室生川とから成っている。

三つの流れは盆地で合して名張川の傲然たる面目を整えるのであるが、そのもっとも急にして最も渓谷の美をあらわしているのが青蓮寺川上流である。大和から伊賀へ入るあたり、急湍を阻むような九十九折の渓谷は左右の断崖に奇岩怪石を突出させて天下の奇勝をなしている。

称して香落渓という。

この急湍の咆哮と激怒の様相を足下に見る山中を、風のように走る二つの影があった。

天正十一年春浅い夜。

一人は女か、黒髪がおどろに風にひるがえり、矢羽のように尾を引いている。

速い。

人かけものか見違うばかり——

このあたりに棲む者といえば、まず常の者ではない。木樵りも近寄らぬ山中である。それに奇妙な走り方であった。横向きになったまま風に乗ってゆく。あるいは忍びの者か。

忍者は夜目が利き、道なき道を風の如くに走る。からだを横にし、身をななめにかたむけて、足を交叉しての横走り。一見難しいように見えるが、馴れると意外な速度が出る。風の抵抗がもっとも少なく、せまい道でもくぐれる。熟練した忍者は一日に四十里を走る。

二つの影が前後して走る、数町うしろからさらに一つの影が走ってくる。迫ってくるのだ。

「——来たわ！」

女の熱い息が耳たぶにふれる。

「来たか」

走りをやめずに、文吾は言った。

「誰だ？」

「喜八よ」

「ふん。一人か？」

風のように走りながらの対話だ。

追跡者は一人と聞いて文吾は無言にかえり走りつづけること尚、三丁。ツガやモミの原生林を出はずれたところで、

「——二人目、弥兵次」

女が低くささやく。

「へだたりは？」

「喜八は二十間、弥兵次は一丁」

「うむ……殺るぞ」

走りながら、一尺ほどななめ前へ、さながら突風が襟あしをなでるように髪をなびかせて女はすぐうしろを走りぬける。と、文吾はふたたび直線上へ退く——

前後を入れかわったのだ。

とたんに、文吾はしゅッと肩を掠める刃風を感じた。

手裡剣だ。

「ぬッ」

矢声ともつかぬ含み気合い。文吾の手裡からひゅッと風を切ってとんだのは十字手裡剣。

と――

ううッ、闇が呻いた。断末魔の呻きに耐える苦悶の影を文吾は闇のかなたに見た。

一分後に追いついた第二の影、弥兵次は丸くなってもがく同輩にはっとする。その蹴つまずいたような一瞬の遅疑を、文吾は見のがさぬ。

二つ目の十字手裡剣も弥兵次の胸へ――

ぶすっ。たしかな手ごたえ。心ノ臓を貫く鈍い音を忍者の耳はとらえている。会心の笑みを唇にのぼらせて、文吾は次の瞬間黒いつむじ風となっていた。

またたく間に女に追いつく。

「喜八は？」

走りながら女が聞く。

「死んだ」

「弥兵次は？」

「死んだ」

感傷はない。二人の恋を阻む影は抹殺するだけだ。

月の出まえの春の空には、星が無数に、だが頼りないまたたきをくりかえしているだけ。

二人がなおも走るのをやめないのは、さらに執拗な追跡の影を背後に感じているからであった。兇暴な男の影を。

――来る！　追って来る、かならず追って来る！

燐光をはなつ目、憤怒に水を吹く口、おどろにそそけ立つ髪、岩をも砕く拳――そして伊賀に忍者多しと雖も、右に出る者がないその変幻自在の忍法の恐ろしさ。

その恐怖が、かよわい女の足を駆りたてる。

だが、すでにひた走ること三里あまり。女の足に疲れが見えた。その吐く息も荒く、歩調がみだれた。

女は忍者とはいえない。忍法習練してまだ一年たらずなのだ。無理もなかった。

恐怖の影は――無言。足音も聞こえず姿も見えない。が、文吾にはわかる。怒気にふくれあがった形相が、火の息が、半丁の近きに迫ったことを。

二

影に追われて、千年杉の斜面を転がるように走りおりた二人は、

「ああ、これは！」

うめいてたたらを踏んだ。

そこは三丈ばかりのきりぎしで、はるか下のほうに白い波がしら。岩を噛む激流が囂々と吼えながら流れている。

背後に、その影は迫っていた。ふりかえらなくともわかる。寸秒のゆとりもない。悪いことにこのとき月が、かなたの連峰の肩にぽっかり顔を出した。

「ああ、どうしよう」

絶望的な女の声を搏つように、

「飛べ」

「ここから？」

「飛ぶぞ」

言下に、文吾のからだは、むささびのように宙へ——

曳かれるように、女もまた。ぱっと黒髪が箒草のように逆立つ。

三丈下の岩肌から下は、さらに水面まで五丈あまり。奇岩怪石の斜面だ。月下に見る乱立の岩頭はまるで大入道小入道が傲然とうそぶきうずくまっているようであった。

柵で一呼吸した二人が、たったっと岩頭づたいに降りる。

と、その半ばで、

「待てい、お志貴」

ずうん、と腹にひびくような嗄れ声が頭上でした。それはさながら夜の山の精が叫んだかのようであった。それは二人の足を不安定なまま不動金縛りにした。

——しもうた、解けぬ！

文吾は呻いた。崖上から投げられた緊縛ノ術は容易に解き難い。四肢が痺れ、唇も痺れてもがきはいたずらに瞳を転々させるばかり。

その瞳に崖上の人影が見えた。下弦の月を満身に浴びて不倫の男女を見おろしているのは文吾の師匠であり、お志貴の夫である楯岡ノ道順その人。

みごとな白髭が怒りにわなないているさまも見えた。

「文吾、汝は師に背いたゆえ、死をくれる」

「……」

「が、お志貴、汝は女子の身じゃで、文吾に圧えられたとあれば許しようもある。前非を悔いてもどるなら、許しもしよう。許してとらせる。戻れ」

「……」

「否むか？」

「……」

「否むか？」

重ねて問うたとき、道順の手はかたわらの大岩にかかった。ぐらり、動いた。頭上である。

ひえッというような悲鳴が、お志貴ののどからもれた。

「どうじゃ！」

忍者と忍者。いわんや、上なるものはすべてにたけた師だ。文吾がいかにもがいても、この

窮地を脱せんことは不可能であった。巨岩の落下に抗すべき術は、持たぬ。

「――どうじゃ！」

促す道順。

文吾がこの師の高名を慕ってきたのは五年前である。

道順の忍法達者たることすでに名高かった。

伊賀の乱を記した「伊乱記」という古書には、

「――上代より伊賀の遺風として其のいにしえの御色多由也より諜の術を伝えて、楯岡ノ道順、伊賀ノ太郎兵衛、高山ノ次郎太郎、小串、大串、城戸なんどと言える名器のもの国中に充満して其の流れ、今に至るまでしのびの通力を伝え如何なる堅城要害と雖も忍び入らずということなし。他国にても伊賀忍とてこれを重宝せり――」

また、忍術秘伝書「万川集悔」には、

「――永禄年間、伊賀甲賀ニ出シ忍ビノ上手十一ヲ数ウ、野村ノ孫太夫、楯岡ノ道順、音羽ノ城戸、柘植ノ木猿、柘植ノ小猿、高山ノ太郎次郎、上野ノ左、甲賀ノ太郎左衛門、神戸ノ小南、新堂ノ小太郎、山田ノ八右衛門ガソレ也」

と、ある。

文吾は道順の高名を慕ってきたのである。そのときすでに半蔵、弥兵次、喜八の兄弟子がいた。後者二人は下忍だが、半蔵は上忍であった。上野服部ノ庄の名流で伊賀忍びのあいだでは

知られていたが、さらにワザを磨くためにこの香落渓に来た。

半蔵が伊賀忍びの掟を破って徳川家康に臣従したのは二年まえである。道順はその背反を責め、半蔵を破門にするとともに、かれの女を奪い服部ノ庄より拉致してきた。

これがお志貴である。もと京の桂女（遊女）だったお志貴は、貞節という言葉を母の胎内に忘れてきた女だった。

道順は老齢である。それでも一年、道順に仕えたのは珍しい。女の心は若者へ移った。

それだけである。文吾にはしかし恋だった。二人が不倫におちたいきさつを詳述する必要はあるまい。若い者同士だ。女は賀茂の流れで垢ぬけた遊女。文吾は目鼻だちもよく二十歳そこそこで六尺になんなんとする美丈夫で、才知のきらめきが女を魅了した。

三

――お志貴を殺したくない……

と、道順には未練があった。が、その一方、

――文吾めは生かしておけぬ！

師の恩を仇でかえす憎さ。道順の胸は煮えたぎっている。

その腹裡を知りながら、しかし文吾はお志貴をふりかえって言った。

「そなたの……胸一つだ」

月の光りに女のおもては蒼い。唇がわななき、歯がカチカチ鳴っていた。ためらいのいろが去来する。生への執着は強い。文吾は若かった。女のおもてに迷いの色を見ると、慚愧にかられた。

「おれは……そなたを殺したくない」

「――でも」

「もどりなさい、おん師のもとへ」

「――ええ」

救われたようにお志貴はのぼり道を探してそばを離れた。しなやかなからだの線、黒い長い髪は濡れたように、つややかに光っている。

突然、頭上の巨岩が、ぐゎッと吼えた。小石をはねとばし、岩角を欠けとばして凄まじい勢いで文吾の頭に転落してきたではないか。

いかに術にはたけても、その心情は陋劣にして、女を奪った若者へ憎悪を叩きつけたのだ。お志貴は恐怖にうちのめされたように、岩のくぼみに小さくなってうち伏す――一瞬、信ずべからざることがおこった。

絶叫が岩棚の上で噴いた。

巨岩は轟然と谷こだまを呼んで川中に凄まじいしぶきをあげている。そして、あたかもその巨岩のあとを追うが如く、道順の痩軀がもんどりうって落ちてきたのである。

岩棚の上には、脇差をだらりと下げた文吾の姿があった。

「まあ!?」

お志貴は目を疑った。

巨岩の落下をどうしてさけたか。道順は師である。文吾のワザのすべてを知っている。十八遁法さらに五十四変身遁法の可能性ありとはいえ、そのワザを封じての落下であった。

阿吽の気をはかって落とした岩。右も左もさけ得ない。眼前三尺に落下してきたとき、かれはすべての気力を跳躍にかけた。

天狗、猿飛、飛燕――この三つの跳びワザをもって、むかった。宙へとび、瞬後に転落し来たった巨岩の上に触れた爪先が、さらに岩棚への飛躍台の役目をしたのである。

おどろきの目が刃物の光りにくらみ、天下に知られた楯岡ノ道順はさながら木偶のように真向唐竹割りにされて果てたのであった。

呆然たるお志貴のまえに、文吾はたたたッととびおりてきて、

「お志貴どの、殺ってしまったぞ、師匠を」

「あ、あたしは、……強いひとが好きッ」

女は夢うつつに叫んですがりついてきた。いま示したばかりの利己的な行動など誰のことだというように。

文吾もまたそれを咎めるには若く純粋だった。女の豹変を怒るよりも、ふたたび胸に戻った女体の柔らかさがすべてだった。

どちらからとなくはげしく抱きあい、口を吸いあった。

「行こう」

「行きましょ」

「京へ」

目をキラキラさせてお志貴はいった。

「京には楽しいことが沢山あるもの」

月が翳った。月のおもてを蔽って雲が流れてゆく、東から西へ。

二人のからだも夜風がさらった。

四

京へ出た二人は、七条西ノ洞院に家を借りた。家というより小屋というほうがいい。牛飼町のはずれだった。

饐えたような臭気が一年中たちこめている細民街だったが、若い二人には苦にならない。ことに文吾は、浮世の享楽をすべて絶った五年間の反動のように、はじめて知った恋の美酒に酔い痴れた。多くの男を手玉にとって来たお志貴のからだも技巧もすばらしく、文吾は有頂天になった。

毎日がただ夢。めくるめくばかりの恍惚のうちに日のたつのもしらず、春色の爛けてゆくのも知らなかった。

時は天正十一年。叛逆児明智光秀を討って、織田信長の版図をそっくり手に入れた秀吉は天下統一の野望に燃えて、まず美濃を制し、次いで伊勢に平定の駒を進めている。

まだ地方には群雄割拠し、猿面冠者何者ぞと抗戦の旗も尠なくなかったが、五畿内と隣接数カ国は勢威に服し、ことに京は平穏無事の春を愛でていた。

戦乱に枯れきった人心は、娯楽や慰安に飢えている。地方で戦さがあっていようとも、じぶんたちの周囲に平安があれば、それでよかった。この春日に浮かれた人々は、水ぬるむ加茂川に、花の山に、神社仏閣に行楽の杖を曳く者が多かった。

その花の盛りもすぎて八重になってゆく毎日を、文吾とお志貴は冬ごもりのもぐらのように外へ出ようとせず、痴楽にふけっている。だが、若さも体力も好奇心にも、限度がある。

愛慾荒淫も、ひと月ふた月たつと、さすがに倦怠と疲労がおとずれてくる。そうして、それと軌を一にしたように財布も軽くなってくる。お志貴はぬけ目なく道順の銀をぬすんできていたのだ。

「――腹がへったな」

寝ころんで筵編みのあげ蔀を足でなぶりながら、文吾はいった。
「何かないか」
「何もないよ」
「餅でいい、稗餅を買うてきてくれ」
「銭がないよ」
「もう、なくなったか」
「ああ、誰かさんが大ぐらいだからね」
お志貴はつっけんどんにいう。いらいらしている。もう愛の口説ものうく、倦怠のあとには焦燥感がはげしかった。
こうした女は派手な生活でなければ、喜びが見出せないのだ。華やかな衣裳に、髪のもの、化粧の品々。堺で売っている唐わたりの白粉や燕脂がなければ女の価値がおちると思い、それが一層腹だたしくなるらしかった。
くわえて、気を滅入らすような雨、雨、雨。
「もう梅雨に入ったのかねえ、まだ早いようだけど」
昨日からいやなシトシト降りで小屋のなかは所在ないままの淫らな臭いで蒸れかえっている。
「——どうするつもり？」
「どうって……当てがないのだ、おれは」

「へえ、あたしに銭を作ってこいというのかえ」
「いや、そんな意味では」
「男のくせに何もしないで寝転んでいたってしようがない。天から降るのは雨ばかりさ」
「……」
「銭は降っちゃこないってさ」
腹は立つが、われながら情けない。
「——ちょっと、行ってくる」
どこへ、とも聞かず、
「頼みますよ、こんなじめじめしたなりではおもてへも出られないからね。男とは違うのよ、女は」
「くどい！」
ぷいと文吾は外へ出た。雨はやまない。傘も蓑もない。竹ノ皮の笠をかぶっただけで濡れて行く。
紙漉き小屋から杵の音が重苦しく単調にひびいてくる。軒先の反古の墨ぬきをしている筵の小屋から異様な臭いが立ちのぼっている道だった。
——おれに出来ることといえば……
反問して苦々しく吐きだした。
——盗人だけだ……

忍者は大名や土豪などに雇われて生業とする。が、いずれも由緒をたどって依頼があるので伊賀と縁を切った文吾に残された道は、忍者のもっとも戒めとされた、その誇りのない暗い道だけだった。

小半刻のちに、文吾の影はある屋敷の泉殿の縁下にあった。

――一度だけだ、一度だけ……

心に弁解した。

五

中納言か大納言の住居と思われる豪奢な屋敷である。乱れし世を幸いと賄賂をとりこんでいるのであろう。

戦国期は武将の天下で、公卿の勢力は衰微したといわれるが、藤原氏のころと変わらず、官位をもとめるには金品が要る。

地侍から成り上がる者が多ければ多いほど、かれらの門前もまた賑う。卑賤な者ほど官位を買うためには莫大な費えを惜しまない。

公卿屋敷はだだっ広いわりに家司など少ないから、入ってしまえば、易々と仕事が出来る。忍法達者の文吾には、朝飯前である。

什器調度は目ざめるばかりの、金銀螺鈿珊瑚など、贅を尽したものだった。ものうく琴の音が聞こえている日中だ。

四半刻たたぬうちに揉烏帽子に水干をまとった白丁の恰好で平然と出てきた。

誰も咎める者はいなかった。

懐中には五百匁ほどの砂金の包み、かさばるのは修内司の青磁香炉とギヤマンの盃、あとは翡翠、琅玕、紫珊瑚等々の宝玉。

――これだけあれば……

と、文吾は雨あがりのうす陽に目をほそめてお志貴の悦び顔を思った。

――半年や一年、楽に二人で暮らせよう……

その期待はむざんに裏切られた。

家にもどってみると、意外にも男女の笑い興じる声が裂け部からもれていた。

さては？　若くてもぴんときた。勝手知った家である。忍び入るのは易い。破れ屏風のかげに文吾が身をひそめたとは知らず、

「ホホホホ、仰有るまでもないわえ」

あでやかにかん高く嬌声をあげて、お志貴が男の膝にしなだれかかっている。

「初もの食いは寿命がのびるそうな。ただそれだけのことなのよ」

「色の道は男も女も年増ぶりがよいのは知れたこと」

色男面で女を片手抱きにしているのは髭の剛い壮漢、帷子の片肌ぬぎで、
「したが、ほんとうによいのか、ソロソロ帰ってはこぬかの」
「まだ、さ」
「忍者は始末が悪い。いつの間にやら、そこらに立ち戻っていたりすると」
「ホホホホ、忍者といったって、まだ青いのさ。帰ってくるには素手ではもどれない。それだけの甲斐性があるぐらいなら」
「一度は惚れたくせに。女はこれじゃから信用ならんて」
「あれ、それが御当世じゃなくて？　金の切れ目が縁の切れ目とは平安の昔からきまっているわえ」
「賀茂のお志貴とて聞こえたそなたは、金銀で磨くほど美女ぶりがあがる女だ」
「うれしいッ」
「したが、よくこの身を覚えていてくれたの」
「あたしが忘れても、この肌が」
襟もはだけ、裾もみだして、女はしがみつく。
「この肌が承知しませぬえ」
「口説は昔から上手さ、それで何人だました」
「あれ、いやな殿。これこのように……」

男の手を乳房へいざない、われから臙肉の唇を突きだして目をとじる。
——うぬ！　よくもよくも！……
かっと血管がふくらむ。文吾は目まいすらおぼえた。
屏風を蹴倒して闖入しなかったのはとめどなく燃えあがった二人が、からみあったまま倒れて、あられもなくとち狂いはじめたからである。
目の前で官能の呻きをあげて、もだえ狂うお志貴の肌が、あまりにも淫らで、浅ましく、ふうっと、かれの熱を冷やした。
——おれは、こんな女のために道をあやまったのか……
若者の胸の裡を、うそ寒い風が吹きぬけた。
とは知らず、情慾のとりことなった二人は、船はよし船頭また巧みとばかり、上げ潮引き潮の怒濤の中に溺れている。そのお志貴の耳に、突然、何やらけたたましくものの割れる音が
「あれ！」
うつろな目にもはっきりとわかった。
蔀もれの斜陽にキラキラ光る、金の唐草でふちどりした玻璃の破片。おそらく日本中でも何人しか持っていないはずのギヤマンの盃ではないか。
「まあ、どうしてここに……」

二人は顔を見合わした。

熱が冷えてゆくようだ。狐につままれた顔だったが、ふとわれにかえった武士が頬髭をぶるっとふるわせて、

「屏風じゃ、屏風を」

いつの間にか、破れ屏風が逆さまになっていた。

さかさ屏風。死人の枕辺にたてるならわしなのだ。

「不吉な！」

お志貴はぞっとした。

髭侍があわてて太刀をつかむや叩き倒した。もとより、そこらに文吾の形も残っていない。

炎の城

一

二月ほど後——

文吾の姿は、越前北ノ庄の城内に見られた。

忍者としてではない。単に陣場借りした牢人にすぎなかった。足軽より自由だが、足軽の扶持も貰えない。手柄を立てて、頭角をあらわすしかない身分だ。

石川文吾は、武士になる気はなかった。

忍者なかまの掟を破り、女にも背かれ、この乱世でかれの若さが生きる場所を考えると、戦

場しかなかった。

どちらが勝っても負けても問うところではない。ただ、熾烈な戦火の中で、力のかぎり戦ってみたいと思っただけである。

こういう人間が、味方にいることは、確かに幸運はもたらさない。

文吾のせいでもあるまいが、味方は緒戦から敗色が濃かった。

それを、歴然とさせたのは、世に名高い江北賤ヶ岳の一戦であった。

去年、逆臣明智光秀を誅滅した軍功第一を誇る羽柴秀吉は、勢威ますます強大で、主君信長の子神戸信孝を岐阜に攻め、目の上の瘤である柴田勝家を討ち滅ぼすべく、近江に軍を進めてきた。

軍の強弱をいうなら、成り上がり者の猿面冠者秀吉は老巧強豪の勝家の敵ではない。

だが、人間の運というものは、力の強弱では左右されないものだ。

光秀を討つくらい、柴田勝家でも徳川家康でもできたはずだ。中国の高松攻めから急遽引きかえした弔い合戦が、秀吉の開運のきっかけだった。時の流れが、秀吉の勝利を願い、導いた。

鬼柴田に呼応した前田利家父子、金森家近、勝家の甥佐久間盛政らの強軍も、この運命の前には屈伏せざるを得ない。賤ヶ岳に一敗地にまみれた勝家は近臣八騎、足軽三十余人に守られて越前に敗走したのである。

この前線に文吾も出ていたが、敗走となると、忍者だけにお手のものだった。

敗北の口惜しさは人並に感じるが、身の危険がないだけ、敵愾心も湧かぬ。

北ノ庄城には、留守の守りに残した二百人ほどの士卒がいた。これと君側と合わしただけが、いまは、鬼柴田のすべてだった。

「猿面冠者何するものぞ」

と、意気揚々と近江に出陣したときの盛大な馬揃えのときは将士二万騎、卒三万を数えた大軍だった。ために城の内外、地面が見えぬほどであったのに。

北ノ庄城の守りを固める間もおかせず、勝ちに乗じた秀吉の軍勢は椽木峠を越えて追撃してきた。

今宵、秀吉は城の西南一キロの足羽山に陣を構えて指揮している。

北ノ庄城はびっしりと囲まれて蟻の這い出る隙間もない。

敗軍の将は沈潜し、兵またふるわず、たちまち外部を破られ、本丸と二ノ丸だけになっている。

この勢いでもって総攻めすれば、落城は半刻の間であろう。

だが、秀吉には何か思惑があるのか、攻撃を熄めさせたのである。

いま——

城中、本丸の天守閣では、鬼柴田の威名も賤ヶ岳に捨て去った修理亮勝家が、近臣に取り巻

かれて静かに盃を傾けていた。

奥ではお市ノ方が連れ子の三女とともに、双六遊びをして、故意に笑い興じていた。

落城を目前にしての狂態かと疑われた。が、そうではない。残り少なくなった今生の時間を、母娘のむつみに過ごそうとしている。

織田信長の妹に生まれ、その身分と絶世の美貌のために犠牲となったお市ノ方は、悲しみの翳を漂よわせまいとして、かん高い声で笑い興じている。

——はかないものだ、これがかつての覇者の姿か……

天守閣の梁のかげから、憐れむように文吾は見守っていた。

——お志貴のような下劣な女と、綸子しかまとったことのない高貴なお市ノ方と……どっちが倖せだろうか……

若い文吾の胸に浮かんだ、素朴な疑問であった。かれは答えを知らぬ。

男から男へ、好き勝手に渡り歩いて、自堕落な暮らしの中で奔放に人生を楽しんでいるお志貴は、下劣この上もないが、しかし、一箇の人間として見たら、このほうが悔いがないように思われた。

先に兄の命で浅井長政に嫁し三女を生んだお市ノ方は、その夫は兄の手で討ち滅ぼされ、こんどは甥の信孝によって同盟のためであるが勝家に与えられた。生涯に二度の夫を持ち、その二度とも意味は違えども政略の犠牲に変わりはない。

落城の悲歎のなかで、彼女は笑うしかなかったろう。

笑わねば、あまりにも哀れな自分に涙がこぼれるばかりだから。

二

盃からふと眼をあげて、勝家はお市ノ方を呼んだ。

たとえ信孝のほうでは政略のつもりでも鬼柴田は愛でお市ノ方を迎えている。浅井の血をひいた三人の連れ子をわずらわしいともせず面倒見たのも、お市ノ方への愛があればこそだ。

お市ノ方もまた、鬼柴田の愛にはひかされている。

たとえ三女はおとしても、じぶんは夫と死出の旅の供をするつもりだった。

「——やがて時刻もうつる」

と、勝家は慈しみの眼をむけて言った。

「別れを惜しむがよい」

「はい……」

お市ノ方の朧たけたおもてに一瞬、淋しい翳がおちた。

娘たちのところへもどると、

「いかい垢づいた様子じゃ、母が湯浴みして進ぜましょう」

「まあ、うれしい」

下の二人の妹は無邪気に喜んだが、長女のお茶々は、母によく似た顔を冷たくひきしめて、何もいわずに母を見つめている。

お茶々はもう十四歳だから、母の気持も、落城の中の運命も、およそ理解している。

それでも、涙をこらえて湯殿へやってきた。

豪華な檜の香のする湯殿には、今宵かぎりとも思えぬ豊かな湯気がこもっていた。

蒸し風呂ではない。

死出の旅立ちに身をきよめるためもあった。

湯気の中に、仄白い裸身菩薩を見たとき、さすがに、文吾も、うっと息がつまるほどだった。

何という美しさであろう。神々しいといいたいほど、その裸身には、お志貴によって知らされた女の、あの動物的生々しさは、かけらもなかった。

胸もゆかたで、腰の張りにも、男を欲情させずにはいない。だが、その情念はあくまでも、尊く、美しく、その白いからだとひとつになったとき、男はそのまま菩薩に抱かれて入寂するような極楽を感じるのではなかろうか。

——惜しい、このまま死なせるのは……

明り窓に、逆にぶら下がるように目だけをだしてのぞき見ている石川文吾が、こらえきれず、切ない吐息を、ほッと洩らしたことであった。

お市ノ方のその玲瓏玉のような美しい肌と均整のとれた姿体から見れば、少女たちはただの童女というにすぎない。

お茶々も、すらりとしているが、深窓の育ちのせいもあろうか、まだ色香がなく、胸も平板だし腰もまだ小さい。乳首がほの赤く春先の木ノ芽のような愛らしさを見せているだけである。

お志津とお江与の二人は、滅多に母と入浴したことがないだけに、嬉しくてたまらないらしい。

そんな娘たちが、一層、愛しくなって、糠袋をつかう手が、思わず抱きしめてしまうのだった。

そんな愁歎場が、しかし、文吾にはたまらなかった。

湯殿から離れて歩きだした。

と、

——あれは？……

御殿から人目をさけるように、そっと出て来た女性の姿が見えたのである。

色文目は定かではないが、被衣におもてを隠した上臈——

いま城内に息をひそめている女たちは多いが、若く、気品のあるたおやめ、つづいて出てきた侍女とも見える女に何やら囁いて、一人で足早に出てゆく。

文吾は後をつけはじめた。何か、そのうしろ姿に尋常でないものを感じたのだ。

本丸のあちこちに、敗残の将士が、あるいは横たわり、あるいは酒を呷り、あるいは最後の博奕に不安を忘れようとしていた。

篝火が多すぎるくらいに、炎を噴き、火の粉が地上の闇を払っていたが、奇妙に沈鬱な闇がおおいかぶさっているようであった。

持ち場見回りの足軽も、鉄砲や槍を重げに曳きずっている。そのだらけた、無気力な音が、さらに城の余命のはかなさを思わせる。

そうしたなかで、その上臈姫の姿だけが、生気に満ちて、溌剌と見えたのである。

尾行しはじめた文吾の耳に、ぐたりと寝そべって足の繃帯をとりかえていた男が、

「お万阿さまじゃ」

と、なかまに顎をしゃくって言うのが聞こえた。

「いまごろ、どこへお出でになるのか」

「ふむ。城脱けかな」

「まさか……じゃが、主君も寛大なものよの、前田利家の背反を許すなどのう」

「人質なら人質らしく、はたもの（磔刑）にでもして見せしめればよいのだ」

やけっぱちらしく、一人が言った。

「勿体ないな」と、別の男がおどけた。

「あれほどの姫、はたものにかける前に、抱かして貰いたいの」

「聞こゆるぞ」

「誰に」

「十蔵どのに」

三人は首をすくめ、それから陰微な笑いを洩らした。みんな、疲れていた。

三

——お出でになるかしら……

糒蔵のわきの暗がりにひそんで、お万阿はお天守に、凝った視線をむけた。

——お知らせしたはずだけれど、わかって下さったかしら……

明日ないいのちと思えば、深窓に育てられた姫でも、思いのたけにしたいことがある。

十三歳にしてはがらが大きく、十四、五に見えるほど発育の良さもあってか、お万阿にはもう童女の影はなかった。

初潮も見たし、胸のはずかしいふくらみも、女を自覚させていた。

——ああ、十蔵さま、早く来て下さいまし、もう、あたしたちのいのちは、二刻とないのに……

呼吸する一つ一つが、これほど貴重に思われたことはない。

お万阿は胸のふくらみをそっとおさえ、悲しい目を空に投げた。
内外の篝火にうす赤く映えた天守が、くっきりと夜空に浮かんでいる。
北国の越前北ノ庄ではあったが陰暦四月下旬、すでに空は星屑を吝しみなくちりばめた初夏の明るい夜空であった。
お万阿は前田利家の娘として、北ノ庄に人質に来た。
利家は又左衛門といった昔から木下藤吉郎と親交あった仲である。
利家は温厚にして狡智——その打算は綿密であった。勝家に誘われたのも、秀吉と比べて段ちがいに勝家が名家で声望あり、織田家の老臣だったからである。勝家は秀吉に腰を揉ませたことすらある。
この戦さは勝家が勝つと見た。
精鋭を比べてみて、そう思ったのだ。両者をよく知りすぎた利家の誤りは、かれの家がらの良さが、浮浪児あがりの秀吉にツイた幸運に目をそらしていたからであろう。
勝家の乞いで、利家は末娘のお万阿を差し出した。
これは当時としては、きわめて常識的な習慣だ。背反常なき乱世がひねり出した知恵である。
この場合勝家にとっては、右腕にひとしい利家との盟約の裏付けだから、人質とはいっても二ユアンスが大分違う。
勝家が、わが子よりも愛した佐久間玄蕃允盛政の末弟十蔵と近い将来娶合わす、という約束

が成立している。これを見ても、敗北など夢にも思っていなかったことがわかる。
十七歳の少年と十三歳の少女は、たちまち仲良くなった。
十蔵は長兄に似てすぐれた骨格の凛々しい少年だ。お万阿が、かれに抱いた感情は、立派に大人のものだった。緊迫した情勢も二人の接近を早めた。
十蔵は勝家の小姓として出陣したが、賤ケ岳では命令をきかずに斬りこんだりして、すんでのことに討死するほどの働きをした。
揚げた兜首は二つ。
遠望していた勝家が、
「七八人斃したようじゃが、余の首は何とした」
と、聞くと、
「重いので、捨てました」
けろりとして答えている。
北ノ庄で勝報を待っていた女たちの目の前に、硝煙でくすぶり蒼ざめた勝家を守って戻ってきたたった八騎の姿は、唖然とさせた。
が、その中に十蔵の緋縅姿を発見したとき、お万阿の頬につるつると涙が二条したたった。
恋するおとめには、勝敗よりも何よりも、その男さえあればよかった。
いま——

夜明けにはさけるべからざる落城を目前にして、お万阿は、十蔵と二人きりの世界をつくりたかった。

他の目をぬすんで、誘った。恋は女をどんなにでも大胆にする。はしたなくさえする。深窓に育った姫でも。

篝火の明りをさけて、木陰に身をひそめた石川文吾は、呆れるような、感心するような気持で、見まもっている。

四

人目をさけて、若い男女のあいびきが、どんな具体的な行為をもとめてのことか。

姫のほうから誘ったらしいことは、その待ち焦がれる動作だけでも、疑いを容れなかった。

夜霧が頭上の梢の葉に露をむすび、肩におちた。

——何をしていらっしゃるのかしら……

のびあがったとき、漸く、それらしい影が見えた。

「——姫！」

かすれた声がした。

十蔵の声か。戦場で怒号をつづけて咽喉をつぶしたのか。

「——ここよ、十蔵さま！」

「お。待たせたな」

つかつかと近寄ると、お万阿を掬いあげるようにかき抱いた。

待ち焦がれた唇は燃えている。とろりと甘い舌がからみ、心のたけを伝えて、あえいだ。

呼吸が苦しくなるほどの口づけである。

お万阿はよろめき、下半身が萎えしびれるばかりの幸福感に陶然となって、崩れそうになるからだで、ひしとすがりついていた。

——未だだな、二人は……

十三という年齢は、今日の感覚で思うとかなり違っている。これくらいで嫁になるのは少なくない。唐詩にも、十三で君の婦となり、と詠じてある。だが、文吾の見たところ、お万阿は処女らしい。

そうだ。事実、まだ最後のものを許していなかった。いや、出陣前に、かれに与えようと思ったのだが、羽柴勢の進撃が急で、そのひまがなかったのである。

こうして、熱く苦しいまでの口づけをしながら、お万阿は、おとめが女になる瞬間のよろこびも、このような、目くるめくばかりの恍惚だろうと思った。

やがて、二人は唇を離し、頬ずりしながら、草に坐った。

お万阿のからだが痺れ、膝ががくがくして立っておれなかったのである。

「――待たせて済まなんだな」
と、また十蔵は言った。
「評定が決まらなかったのだ。あくまで籠城して討死するか、夜あけを待たでいさぎよく腹を切るか」
「……」
「――殿は、筑前めの憐れみを受くるまえに、城に火を放って死のうと仰せられている。そうときまれば、われらも時を移さず、追い腹切るつもりだ」
「姫も！」
とびつくように、お万阿はさけぶ。
「姫も一緒に」
「おお……一緒に死んでくれるか」
「よろこんで！」
お万阿の眼は、濡れ濡れとかがやいた。瞳に小さく篝火が写っている。
死の恐怖はおとめの胸にないようであった。
いや、死の実体をさえ、おとめの燃える胸は甘美な恍惚感にスリ代えてしまうのだ。
その濡れて輝く瞳には強い意志がある。幸福への希求。刹那の倖せが、永遠につながるものと信じ疑わない強さであった。

「――十蔵さま」
胸から噴きあげる情火を圧えきれぬように、お万阿はあえいだ。唇はみるみるかわいて、炎を噴くようであった。
胸が波うち、濡れた瞳は虚ろになっている。
それは女のいのちの囁きだった。
――姫のすべてを奪って！
そう囁いている。少女は、女になることを希っている。十蔵のからだをもとめているのだ。
二人の間をさえぎる何者もない。
城は明日の太陽の下で灰燼に帰すだろう。将士のむくろも一片の骨灰と化すだろう――
「――姫！」
「お万阿と呼んで」
「お万阿！」
十蔵も燃えた。
骨もへし折れるばかりに抱きしめると、巨きな手が荒々しく乳房へのびた。
そのときである。どこかで呼ぶ声がした。
「佐久間どの、佐久間どのはいずれじゃ、お召しでござるぞ」
松明をかかげて使い番が、声を張りあげている。

十蔵の手がとまった。二人は、眼を見合わせた。
これきり、離れ離れになろうとは、そのとき、予感もしなかったのである。
「――行かねばならぬ」
お召しを黙殺するには、二人は若すぎた。
「なに、すぐ、御用済みとなろう」
未練を残して、つと十蔵は立った。
「――佐久間十蔵、只今参上」
呼ばわりながら、駆け去ってゆく後ろ姿へ追いすがるような眼を投げて、お万阿は哀しく草むらに突っ伏した。
男の手が這った乳房が、どきどきと、破れるばかりに息づき、なおももとめているのだった。

五

勝家は待っていた。
そばで、お市ノ方が泣き腫らした眼を伏せて、末の二人の女――お志津とお江与の幼な児をひしと両の腕に抱きよせている。

お茶々は、きちんと端座し、つんととがった顎をそらし気味に精一杯に涙を耐えていた。
「――十蔵、姫の供をせい」
重い声で勝家は命じた。
「はあ」
「三人とも故右大臣のお血を引いておられる。いかに下剋上の鬼畜たれ、筑前も粗略な扱いはいたすまじ。供して足羽山へ送り届けよ」
「は、かしこまりました」
いたいけな童女を炎ノ城から脱けさせる役目だ。
何がなし、ほっとして十蔵はお市ノ方をふり仰いだ。
勝家はその視線に気づくと、苦しげに顔を歪めて、
「奥は……わしの供をすると申して、聞かぬでのう」
その涙だったのか。
母の膝から離れたがらぬ妹たちを、気丈にお茶々が叱って引き離した。
落城の悲哀はお茶々はすでに二度目である。
十一年前、小谷落城のとき彼女は四歳だった。これが女の運命かと幼な心に諦観に似たものが形づくられていたようだ。
「――故右大臣姫御三方、筑前殿本陣へ罷り越す、案内頼み参らす」

大音声に叫んで、佐久間十蔵は大手門から堂々と出て行った。
気勢に押されて、道をあけるのを、足軽十人とともに、三方を守って足羽山へ——秀吉の本陣へ送り届けたのである。
秀吉にしてみれば主筋にちがいないし、ことにお市ノ方へはぞっこん思いをかけていた。
勝家打倒に熱中したのも、一つには、遺恨霽らしと、お市ノ方を奪う気持が流れていた。
お市ノ方が死を選んだのも、勝家に操を立てるというより、土民上がりの秀吉を毛虫のように嫌いだったから、という見方が多い。降伏すれば、こんどこそ秀吉の手でけがされる。
それくらいなら——と死を選んだのもわかる。
秀吉が三女を丁重に仮屋に案内させたのを見とどけると、
「てまえはこれで……」
と、辞去しようとした十蔵へ、
「若いが面だましいなかなかに見どころがある。余に仕えぬか」
「あいにくでござった」
きっぱりとはねつけた。
「てまえは生涯に主人は一人しか持ちませねば」
「若い。若いな、それが気に入ったぞ」
「お嫌いくだされても結構、てまえ、殿のお供をいたす存念にござれば、御免」

十蔵は陣所を退出した。
うしろ姿を見送って、
「彼奴！」と、吐きだすように秀吉は言った。
「佐久間玄蕃の弟じゃな」
「御意」
「かえすな」
「は……」
「捕えろ、城へ戻すな」
とは知らぬ十蔵。
足軽を引具して、岡を下ってくると、一ノ木戸のところに馬をつないである。
勝家から拝領の愛馬「松風」である。ひらりとまたがる。
と、隻眼の足軽頭が、にやにや笑いながら馬の轡をつかんで、
「あいや、いま一度、御前へお戻り下されい」
「なんと！」
馬上で眉をひそめるのへ、
「帰城はまかりならぬとの仰せじゃ、下馬されよ」
「たわけが、退けい」

重籐の鞭で、ぴしっと、面上を打った。足軽頭は、あわてて手を離す。
そのまま、馬の尻を打って走り出そうとしたのを、
「やらぬ」
薙刀の石突きが、かっと松風の後脚を殴った。
怒りの嘶きを噴き上げて、松風は棒立ちになった。十蔵のからだは、あっと思ったとき宙に浮いていた。
馬に馴れぬ少年ではない。足で馭して大身の槍を疾走する馬上でふるう十蔵が——どうっと、大地に叩きつけられていた。
哄笑が渦巻いた。先まわりしてきた一人が鞍の腹帯を切っていたのである。
これではいかなる馬の巧者もたまらぬ。
「おのれ、計ったな」
太刀抜きざまにはね起きようとしたところに、どっと、足軽が数人いちどに折り重なってきた。
まさかこんな卑怯な手があろうとは知らなかった。油断だ。二、三人はねとばしたが、剛力の者が次から次とのしかかってきて、手をとられ、足を押さえられ、もがき暴れる五体に、ぎりぎりと縄が食い込んだ。

六

見張り番の話では、供の十人の半ばは斬られ、半ばは城へ逃げこんだらしいという。
「斬れ！　おれも斬れ！」
十蔵は叫び、縛られたまま暴れたが、見張り番の者は、殴りもせずに、
「あばれるな、見っともないぞ、それでも佐久間十蔵か、鬼玄蕃の弟か」
と、嘲笑するだけだ。
なぜ、秀吉が捕えしめたのか、理由がわからなかった。仮屋もない野陣である。巨松の幹に手足がらみに縛りつけられ、四囲を楯でかこって視界を蔽った。見張りは三人もつけられた。
血気さかんな若者には、こんな生かしも殺しもせぬ生温かいじわじわ攻めが、一番やりきれないのだ。
——舌を噛み切って死のうか……
それも、武士たる者が恥だ。
「くそ！　筑前に逢わせろ、筑前に申したいことがある、筑前に取り次げ」
「うるさい」
髭面の足軽が噛みつくような顔をぬっと突き出して、

「尻の青い餓鬼が、大口たたくまい、捕われ人は捕われ人らしく、観念するものじゃ」
「何を、卑怯な手を用いたやつが……」
「卑怯もくそもあるか、瞞されたのが、汝の損、汝が莫迦だったというだけじゃ」
「こいつ！」
かっと首を伸ばして、鼻の頭に嚙みついた。
「うわあっ、山犬め……」
足軽は鼻の頭をおさえて飛びのいた。指の間から血が流れている。
楯囲いの外回りをしていた足軽も飛んできた。
「ぶっ喰らわしてやれ、じゃが、傷をつけてはならん」
「くそたれめ、いまいましい」
「近寄るな。見張っておればよい」
篝火を近づけ、距離を置いて見張ることにする。
「こんなやつを、なぜ生かして置くのかいな」
「鬼玄蕃の舎弟じゃからな。首を斬るのを一緒になさるおつもりではないか」
兄の玄蕃允盛政は賤ケ岳で中川瀬兵衛を討ち取り、威名をさらにあげたが、大勢には抗するすべもなく、すぐの弟で勝家の義子になっていた権六郎勝敏と二人、迂回して北ノ庄へ走る途中、郎党の裏切りにあい痺れ薬を飲まされて土民に捕われたのであった。

佐久間三兄弟を捕えた秀吉の喜びは少なくない。
こうやって別々に離し、見張りを厳重にしていた。
常人に近寄り難い陣中もしかし、忍者だけは阻むことができなかったようだ。
巨松の梢に、鳥が舞いおりたほどの、動きがあった。
松葉が、一、二本、十蔵の額を掠めておちた。
十蔵ははげしく首をふった。
と、その耳に、微かに声が聞こえた。
〈おぬしを助けてやりたい……〉
「なんと！……」
〈声を出すな〉
「……」
〈声を出さずに、唇を動かせ、こちらにはそれでわかる〉
すぐには意味がわかりかねたことである。
唐突だったし、そうした助けなど夢にも思わなかったところだ。狐につままれたような気持で、十蔵はあたりを見まわし、頭上を見上げた。
〈平静にしているがいい、気取られてはならぬ……〉
十蔵の耳のわきに、蜘蛛のようなものが、一筋糸を引いて下がってきている。声はそこから

聞こえるようであった。

〈おぬしを助けてやりたい……〉

忝けない——誰ともしれぬ影へ、十蔵は唇で礼を言った。声は出さぬ。

今日いうところの読唇術であろう。

闇はそれを聞いた、否、読んだのか。

〈だが、助けてやれぬ……〉

無情に突っ放された。

〈時間がない。城に火をかけるかもしれぬ。おぬし、万阿姫が焼け死んでもよいか〉

(死なせたくない、姫だけ助けてやりたい)

〈よし、おれが助けてくれよう〉

(できるか、おぬしに)

〈やってみてのことだ、では、急ぐ……〉

(あ、待て。おぬしの名前は?)

〈要らぬことだ、惚れた女のことだけ考えておれい……〉

それきり、声は闇に消えた。

足軽が気味悪そうに、首を突んだして見まもっていた。無理もない。魚のようにぱくぱく唇だけ開閉しているのである。

十蔵はにやりと笑うと、思いきり大きなあくびをした。

七

石川文吾が、万阿姫を助けてやろうと思ったのは、この若い男女の恋に好意を感じていたせいもある。

おのれの初めての恋がみじめであっただけに、死を前にして、美しく咲こうとする初心な男女の心映えが、好ましく映った。

具体的なかたちをとったのは、足羽山の秀吉の陣に忍びこんで、そこに前田利家の姿を見たからにほかならない。

——利家がここに?……

目を疑った。

勝家に同盟したはずの利家が——いつ寝返ったのか。

秀吉の左右に居並んだ麾下の武将のなかにそのうすい泥鰌髭の生えた顔があった。

これは、昨日、いやもう三更をまわったから一昨日になるが、敗北の北軍を追って椽木峠を越えて越前に進攻した秀吉が、今庄から府中に至り、ただ一僕を従えたのみで前田利家を訪い、降ろしたのであった。

茂山で敗れた利家は、自決をする、と見得をきったが、秀吉はおしとどめた。

「御辺とは年来の親しみなれば、たとえ一時敵となり味方となるも、武士の習い時の成行きにこそ候え、御辺われに遺恨は候まじ、以来頼み候わん、北ノ庄へ案内せられ」

と、寛大に許すという劇的な一幕があり、利家は感泣し、先手を申し出て、昨日までの味方北ノ庄へ進撃してきたのであった。

足羽山の旺盛な士気に比べて、城内には死色が満ちていた。

天守閣では勝家が近臣を集めて最後の酒を酌みかわしていた。

某書に言う。

男女席に列なり、主従席を同じゅうす、美女酒を将えば壮士起って舞う。面にこそ笑みを浮かぶれ、などか心に泣かざらん。宴は酣なれども興湧かず、深夜に至りて一座散ず。勝家夫妻、黯然起って房中に入る。鵑声、夢を破りて人も血を吐く——。

と。

お市ノ方は微笑した。

「ほととぎすが」

と、つぶやいた。

「鳥の世界には、人の世の修羅はないものか。われらを憐れんでくれるのか」

そんな夫妻の姿を凝っと見まもる目が天井の一角にあった。

もどってきた文吾である。

そんな眼があるとは知らず、夫妻の姿は静かだった。すでに諦観を得て勝家の顔にもこの日ごろの苦悩の翳が拭われたように消えていた。

「——もうそろそろよいであろう」

月の位置を眺めていた勝家は重い鎧を脱ぎ、白小袖となって、鎧通しをとりあげた。

お市ノ方は、遠い眼で、辞世を案じていたが、

さらぬだにうちぬるほども夏の夜を
わかれを誘うほととぎすかな

と、詠じた。

勝家もふと手をとめて、暫し目を閉じていたが、

夏の夜の夢路はかなきあとの名を
雲井にあげよ山ほととぎす

と、和して、ぎらりと鎧通しを抜き放った。

「殿！」

中村文荷斎が梯子の口に姿をあらわした。

あらかじめ介錯を頼んでいた志臣である。天守閣の下に草や枯れ木を積み、火を放つ用意を整えてきたのであった。

「待て、声をかけるまで」
静かに襟をおしくつろげ、暫く刃先を灯に照らして眺め入っていたが、ふっと息を呑むと、ぷっつり左の脇腹に刃先を突き刺した。
きりきりっと右へひきまわしながら、
「ううむ、猿め、この身骨灰となろうとも魂魄はとどまりて、怨み霽らさでは置かぬぞ」
血を吐くばかりの叫びで、右脇からはねあげた尖先、心ノ臓をぐッと突いた。
「討て」
「御免！」
長檠の灯を吸って刃が流れた。鬼柴田の首は凄まじい噴血で、飛んだ。
同時に、お市ノ方も乳の下をつらぬいて前へのめった。
文荷斎は梯子から下をのぞいて、
「火を放て」
と、命じると、おのれも血の中にどっかりと胡坐をかいた。
「おあとを慕いまする」
枯草に火が点じられた。
城主夫妻の自決を知った将士は、
「殿におくれまじ」

と、大広間で腹かっさばき、あるいは刺し違えて殉死を急いだ。その数三十余名。
火の手があがると、
「それ、落城ぞ」
「城主の首を」
「この手に掻きとって名を挙げよ」
寄手は軍功を争って、どっと八方から乱入してきた。
「生きて辱しめを受けまい」
女たちも懐剣を抜き放った。
お万阿も志津三郎の冷たく冴えた剣先を、おのが咽喉へそっと擬したとき、
「死ぬことはない」
力強い声とともに、刀を叩き落とされた。
「あっ、何をなさいます」
「死に急ぎすな」
言葉短かに制すると、ぐいと横抱きにした。
「あれえ」
その声もかき消す喊声と矢弾のひびきである。火は目前まで迫り、火ノ粉が黒煙のなかに乱舞し、血と呻きと叫びと——地獄図絵そのままの中に、お万阿の被衣が走った。

劫掠と強姦と殺戮との酸鼻な混乱の中を巧みにくぐり抜けて、真っ直ぐに前田利家の陣へ駆けこむと、

「万阿姫をお連れ申した。早くお手当てを」

恐怖で失神している万阿姫を受けとった武将の青山将監は、御前へ申し上げようと思ったときは、その男の姿が消えていたので、と後に述懐している。

八

捕われの身の佐久間十蔵が逃亡したのは混乱の中である。

足軽三人の死体が後に残されていただけで、十蔵はそのまま乱戦の中で戦死したか、逃亡したか、すべて不明だった。

お万阿は父利家に乞うて、あげられた首級や、逃亡の途中土民に打ち殺された者なども手を尽くして死傷者を調べて貰ったが、十蔵に似た者もいなかった。

傷心のお万阿は北ノ庄平定の後金沢に向かった。

前田利家は加賀に於て石川、河北両郡を加増され、金沢に在って北陸を鎮ずべしと封じられたからである。

盟友勝家に殉じなかったことは、武士としての背信であり、卑怯のそしりは免かれないが、（たとえ勝家が寛大に降伏を奨めたとしても）人間的に見ると、その弱さが得をしたとはいえる。

得失を論じては士道の存在価値が無になるが、このとき秀吉に降伏していなければ、後々前田百万石の家は存立しなかった。

子孫の繁栄のために利家は背信の謗りに甘んじている。小ずるく、ぬらりくらり生きるのが、当世風と心得たのが前田家の家風かもしれない。二代目の利長などは徳川家康に睨まれないために、鼻毛を長くのばして阿呆の真似をして、百万石を安泰ならしめたといわれる。

さて、金沢に移り住んだお万阿が、十蔵の消息を聞いたのは、その悲惨な月も超えて五月十二日。先に捕われた佐久間盛政の処刑の場であった。

鬼玄蕃と恐れられた盛政だけに、その最後の日まで顔貌いささかも変わるところがなかった。

五月十二日早朝、洛中を引き回しの上、六条河原で斬首と決まると、

「大紋、紅裏つけたる大広袖の白帷子に香を焚きこめて賜わり給え、一生の終わりに風流を尽くさんずるにこそ」

毫も死を恐れぬ盛政。洛中を裸馬で引き回される間も、精悍なおもてに微笑が消えなかった。

十蔵が現われたのはこの時である。

行列に鉄砲を撃ち、単身斬りこんできたのだ。

もとよりこうした襲撃に備えて鉄砲組弓組が前後を守っていた。襲撃者が一人と見るやどっと押し包んできた。

「兄者！　兄者！」

狂ったように叫ぶ十蔵に足軽らが、殺到した。

もとより弓鉄砲は、近距離と混乱の中ではものの役に立たない。

十蔵の三尺余の剛刀が一閃するところ血がしぶき絶叫がほとばしった。

こうした群集の中ではかえって一人のほうが活躍できる。手当たり次第に斬ればいいのだ。

相手は同志討ちの危険を慮って、刀槍づかいにひるみがある。

踏みこみ踏みこみ、斬った。だが、この俊敏さが体力の限界に突き当たったときが、十蔵の最後になる。

何人斬ったか、どれくらい経ったかもわからぬ。全身返り血で真っ赤になった十蔵が、どっと五体の萎えるような疲労を感じたとき、

「痴れ者め！」

怒号とともに、ひゅうッと、早朝の風を薙いでおちた眉尖刀が腿を掠めた。

辛うじて飛びのいたが、右の腿にざくっと入った。

たまらずよろめく。

「それ、捕えろ」

腐肉にひしめく餓狼さながらであった。

どどっと真っ黒になって折り重なった。

ところが、そのとき不思議が起こったのである。かれらが蹴立てる砂塵が、灰色から黄褐色になり、黒く濃密な煙塵となって界隈を包みこんだのだ。

一瞬の間に天日を蔽って、夕立雲が頭上にひろがるときの不気味さだった。

それはしかし、また愕然と人々がどよめいた数弾子の後に、一陣の風に吹き払われて、さわやかな夏の朝をとりもどしてきた。

一瞬の悪夢を見たようであった。

足軽たちのあいだから、狼狽の声が起こった。

「や、いない？」

「狼藉者はどこじゃ!?」

かれらが折り重なって縛り上げたのは、宰領の足軽頭だった。

「目くらましにかかったぞ」

「佐久間十蔵が幻妖の術をつかうか」

狐につままれたような気持で、護送の士卒も呆然としていた。ただ、せめてもは玄蕃允盛政を奪取されなかったのがめっけものだった。

「――十蔵よ」

馬上から盛政は、宙にむかってその影を見るように呼びかけた。

「いまわのきわに面白いものを見せてくれたな。そちの兄を思う気持は尽未来忘れまい。そちの働き、盛政には又となき死土産じゃ」

莞爾として六条河原へ曳かれてゆくのであった。別手、鹿野左源太足軽組三百人が、佐久間十蔵詮議に血眼になったが、十蔵の行方は杳として知れなかった。

天正十一年五月十二日の旭光が、東山の肩にのぞいたとき、盛政の不逞な首は、凄い笑みを唇にきざんだまま、河原口に血をふり撒いておちた。

ささやく闇

一

羽柴秀吉が、この夏、従四位参議に叙されたのは、いうまでもなく、越前平定の功によってである。

力がすべての戦国の世は、力が正義であった。強い者が栄爵を賜わる——いな、弓矢の威力は堂上方に媚態を装わせるものだ。秀吉はまたその拠点とすべく、大坂城の修築に力を入れていた。

もともとこの地は本願寺の址で、戦国のならいで本願寺も武力抗争の渦中にあること数十年、

ついに信長と和してこの地を明け渡した。当時、寺院ながら城がまえの妙は「石山城」とうたわれ、秀吉も随分手こずったものだ。かれがここを本拠にしようとしたのは、地の利といい、城がまえの卓抜さといい、木石の豊富さなど——城郭構築に申し分なかったからである。

山城と違い平城であることも、社交好きの秀吉の好みにあっていた。すでに、山城の意義は失われつつある。城と城下町の発展の期待がかれの空想をふくらませていた。

こうして天下唯一、難攻不落の名城が竣工したのは十月の末。（後世の規模を有するには尚数年を要したのであるが）城だけではない。京、堺から商人を招いて土地を与え、城下町の形成を許し、発展の恩恵を約した。

竣工の賀は三日間もよおされた。庶民に三ノ丸の参観を許し、能舞台を設け、酒食をふるまうという、人気とりも忘れない秀吉であった。

その三日の賀もつつがなく終わり、後片付けに急がしい翌日のことである。

文吾は高麗橋に近い居酒屋にいた。

忍者は白昼に酒を飲む。夜陰に至れば梟ノ目を瞠らねばならぬ。それに、こうしたところでは口さがない職人らのお饒舌りが聞ける。大坂城の間取り配置など、耳にとめておく用意もあった。

おもてではげしく罵る声がしたと思うと十数人の足軽がやってきた。

「あ、来やがった」

小者がひょいと縄のれんからのぞいて、

「だから言わねえこっちゃねえ、繻緞がよすぎるからなあ……」

足軽らが訪れたのは、居酒屋の向かいにある小さな見世だ。

舶来の品を並べている、近ごろはやりの唐物屋だが、間口はせまく、使用人も中年の女が一人いるだけの見世棚で、美人の寡婦がいるとかで、居酒屋までそのおかげで繁昌すると笑いあっていたほどだ。

足軽小頭が、

「お牧というのは当家の女あるじだな」

「はい、左様でございますが、何か御用で」

「呼べ」

天下の名城の威勢をかりて、足軽まで居丈高だ。

こちらでは消息通がうすい唇をぺらぺらさせて、

「唐物屋の後家さんもお城見物に行ったんじゃろ、なんでも御城主さまはぼるつがるわたりの遠目鏡とかで美女を見つけて、お城に召されているそうな。お牧さんもえらい災難だわな」

そのお牧は、後家といってもまだ二十三歳、当時としては若年増で、四歳の女ノ子がある。おふりという。亭主に死に別れ、堺からこちらへ移って来て、夫の商売を引き継いでいるのだった。

後世の史家は一口に、家康は後家好きで秀吉は上臈姫を好んだというが、それは正史に名をとどめた者の範囲で評するからにすぎない。

もっともお牧は色がぬけるように白く、豊満な肉体は水々しく、さらに堺育ちらしい怜悧な眼鼻立ちで、後家とは思えない。

お牧が倉皇と出てくると、

「お城にお召し出しにあいなる。支度いたすよう」

藪から棒、寝耳に水の沙汰だった。

お城へのお召し、それが何を意味するか。威光燦然たる参議秀吉の命令は、この城下にあっては絶対である。お牧母娘の目に、足軽らは地獄の使者のように見えた。

二

否めばおそらくは生命はあるまい。お牧が泣く泣く支度して出ようとするのを、

「いや、母さま、いっちゃいや！」

がんぜない童女にも、危険はわかるのか、泣きすがる。

「寄るな、こりゃ！」

足軽が引き離そうとする。一人が肩をつかみ、一人が槍の柄をこじ入れた。童女は、はね飛ばされてわッと転がるのを、

「あ、乱暴なさらないで」

お牧は身をなげるようにして、娘をかばった。

「母さま！」

「おふり、けがはなかったかえ……可哀想に」

抱きしめて、はげしく頬ずりするお牧の目からも、はらはらと玉の滴がふりおちた。

支度に手間どったから、往来には人だかりがしてきたし、時雨でもくるのか雲が低く垂れてきた。

「ひどいことをなさる」

「いくら後家だからというてのう」

「あんまりじゃ。誰か、止める者はないのか」

そういう群集たちが後難を恐れているのだ。

「ええい、退け、退け」

足軽が威嚇して、道をあけたところを、お牧はしずしずと歩いてゆく。罪人とは違うから、足軽らも気をつかっている。

橋の近くに来たとき、

〈――あきらめることはない〉

声がした。
「え？……」
耳もとで囁かれたように思いお牧は顔をあげた。
〈――助けてやろう、わしの言う通りにするがよい〉
「……」
お牧の足がとまった。
おずおずと見まわした。が、そばには誰もいない。通行人も弥次馬も、抜身と鉄砲で威嚇されて遠巻きにしている。同情はしてもそば杖喰いたくないのが人情だ。
足軽は前に三人、うしろに三人。一間ほどの距離をおいてついてくる。
「……」
そら耳かと思った。
と、また、聞こえた。
〈――濠へ、飛びこめ〉
「あ!?」
思わず、うわずった返事をしてしまった。
足軽がぎょろりと眼を光らせた。
お牧ははっとした。表情を隠した。頬の線が蒼くかたくなっているのはしかたがない。目を

伏せて歩きだすと、その声は、どこからともなく、また言った。
〈――よいか、濠へとびこむのだ〉
でも――と、ためらいの色を表情に浮かべると、
〈泳げなくともいい、助けてやる、安心して飛びこむがいい〉
声は、奇妙な、この世のものとも思えない含み声。力強く頼母しいひびきがある。
はい、と、お牧は見えぬ影へうなずいた。
〈――よいか、自殺のフリをするのだ〉
お牧は、つつーッと欄干へ近よると合掌した。
「や、何をする!?」
息のとまるほど仰天した足軽たちが、わらわらと追いすがった。欄干は二尺ほどの低さだ。足をかけた。
「待て！」
袖にのばした手を虚しく泳がせて、お牧のからだは一丈したの濠へ――
すさまじい水しぶきに顔をうたれて、足軽たちは地団駄ふんでわめいた。
「しまった！」
「舟を早く」
「飛びこむんだ、早く！」

暗い水面に桔梗ちらしの小袖と檜垣綸子の帯がチラと浮かび、すーッとひきこまれるように沈んでしまった。

ただちに城内へ報じられ、捜索の人数がくりだされたが、濠の底はもとより、天満川、木津川一円、厳重執拗な捜索にも拘らず、お牧の死体は見当たらなかった。

あの美女が水練の達者などとは考えもつかぬことである。

唐物屋に役人たちがむかったとき、童女のおふりも使用人も、見世棚の金目の品々とともに消えていた。

紅蜥蜴

一

一年経った。天正は十二年を閲した。

その間、文吾の消息はない。

ただ、相つぐ諸国の兵燹に乗じ、京堺を中心に跳梁をほしいままにする怪盗のことが噂にのぼった。

夜盗の横行常ならぬ動乱の時代であったが、その盗賊は風のごとく現われ、風のごとく消える。金目のものしか狙わず、進退のあざやかさは、

「風盗」

と、呼ばれ、恐れとそして、一部からは讃辞さえ呈されるほどであった。

その「風盗」が殊に世人の耳目をそばだたしめたのは、大きな三つの特徴があったからでもある。

一つには大名富豪ばかりを狙う。一つにはいかなる厳重な屋形、土蔵にも容易に侵入する。そしていま一つは、その大胆不敵、変幻出没のわざを裏づけるがごとく、いまだに誰もその風盗の顔を見た者がない。

これほどの変幻ぶりは、むろん忍法の心得がなければ出来ぬわざだ。それもなまなかなものではない。

「忍者であろう。おそらく世に知られた者にちがいない」

とさえ、囁かれた。

さて、その風盗かどうか。

晩秋十月の声を聞いたばかりの、うそ寒い風の中を走り来たって、易々と陰渡しに濠を渡り、漆黒の帳を垂れた大坂城本丸に忍びこんだ者があった。

三十余カ国の城造り人夫三万人を動員駆使して、遂に成ったというだけあって、その宏壮な規模、豪快雄大な櫓は、城郭を見るに馴れた荒武者どもを瞠目させた。

本丸天守閣は六層八重。その最上部の天守には朱塗り勾欄の回廊をめぐらし、四面には青黛

朱金銀をもって華麗な鶴と虎の壁画が描かれて、地上を威圧していた。

その華麗な姿もしかし、暗天に溶けて、ただまばらな星かげによって、巨大な輪郭をそれと示しているだけである。

その忍びの者は——

細心の注意と、そして大胆な行動力を持っていた。

すでに案内知ったものの如く、闇の底を地走りすると、本丸の御殿にすべりこんだのである。

ついひと昔ほど前までは、天守閣は望楼であった前身を物語るように、矢を射、鉄砲でもって狙撃する用もなし、したがって内外を威嚇し、堅牢な構築を持つにしたがって城主の居館を兼ねるようになっていたが、近ごろでは居館は別にゆったりと生活を楽しむ場として作られ、平時には常に屋形作りのほうで起居している。

その御殿、屋形作りを模した御殿の回廊の縁下には用心の金網が張ってある。これをスカリ、と切った。忍法七具、小クナイと呼ばれる道具である。金網だけではない。床下をもぐら走りに進むと、位置を案じするどい尖端を突きさして、ぐるっとひきまわす。円の大きさは拇指を中心にして、四指で円を描いたひろさ。これは頭のぬける広さである。

忍者は手足の指はもとより、肩肘の関節を簡単にはずす。どんな狭隘なところでも、こうして楽々と脱けるのである。頭だけは如何ともならぬ。したがって、頭の大きさだけの穴があ

れば、忍者の脱けた道と見てよい。

その忍者が開けた穴は床下の地板と呼ばれる部分である。床は二重になっている。上床のみがき板は、端の止め釘をぬいてすぽりとはずす。

忍び頭巾の眼がキラリと光った。

豪奢な室内の調度である。几帳、壁代の金襴や衣桁、御厨子棚などの螺鈿が惜しみない短檠の灯をはじいて眩ゆく光り、この閨房を一段と花やかなものに見せている。

上げ畳の厚い褥の上では小さく凋んだような初老の男が、若い娘の肌を舐めまわしていた。

「ふふふ、ふふふ、そう羞ずかしがらぬでもよいて」

「でも、灯が……」

「消さぬぞ、消してたもれと泣いても消さぬぞ、そちの肌が見えなくなるでの」

「……」

「これ、そうこちこちに固くなることはない。もそっと柔らかに、柔らかに……ふふふ、まあよいわさ、そのうちには柔らかくなるわな、いやでも柔らかくなるわな、天下とりのこの秀吉、女人を喜ばせることでも天下一だぞよ」

この老人こそ、羽柴筑前守秀吉にほかならなかった。

二

秀吉は、娘を、茶々、と呼んだ。

まだ十七。後世の美女とうたわれた母お市に似て、すんなりと癖のない鼻すじ、花びらそのものの唇、秀麗なひたいにむら雲のかかったような生えぎわの神秘的な翳りといい、男心をそそらずにはいない、冷たい美しさは花のさかりの馥郁たる肌の香りさえ匂うようであった。

秀吉はこの若い蕾の肌をひらくのに、無上の喜びを感じていた。

昔、藤吉郎といったころから主君信長の妹たるお市ノ方に恋慕していた秀吉である。

乱世の奔流は猿面冠者の恋をむざんに踏みにじり、再三の機会も虚しく、お市ノ方は落城の中に自殺してしまった。

その母に生き写しの茶々姫。

この二十年の長きにわたる恋を、この夜についに得るかと思うと、女体を扱うには馴れた指先も、歓喜にふるえおののく。

その骨ばった指は、お茶々のおもてを撫で、首すじの痛々しいほそさに哀れを知り、かたい蕾の胸の小さなふくらみを楽しみ、ほのかに萌え出でた若草の丘をまさぐって、唇をよせるのだ。

卑賤に生まれ、兵燹に迫われて壁土や死馬の肉までムシリ食いした赤黒い唇が、ぬめりに黒光りして、処女の秘所を舐めようとする。

覚悟はしているものの、あまりの屈辱と羞恥に身をふるわして、お茶々はおもてを蔽ってしまった。

「ははは、ねんねじゃのう、そちゃ何も知るまいが、男と女がかようにするのは、神代の昔からの決めごとじゃ。目をあけるがよい、羞じることはない、わしとそなた二人きりの世界じゃ」

その語尾を、しかし秀吉は、口のなかで嚙み殺している。

そのうつつになった目が、異様なものを見たのである。

あろうことか——

頭からすぽりと頭巾をかぶった男なのだ。筒袖たっつけの活動的な装束は漆黒。つかの長い脇差一本。

はじめ、秀吉の目にうつったのは、革足袋であった。禁色の濃紫に染められた革足袋がしなやかな皺を見せて、すーっと、床をすべるように、あらわれて、ぎょっとなった。

目のあたりにしながら、秀吉は幻覚のような気がした。

この警戒きびしい大坂城本丸奥御殿に、胡乱の者が侵入してこようなどとは、考えもおよばないことだった。

「……」

ぽかんと口をあけた秀吉の虚ろな眼のまえで、その影はむずと、刀をつかんだ。

秀吉の佩刀である。刀立てに柄を下に立てた黄金作りの鞘巻きの太刀。関孫六兼元の名刀だ。

あるいは、幻覚と思ったのも、目くらましをかけられていたのかもしれぬ。

刀をつかんだとき、はっと、秀吉は醒めた。

「うッ、何者じゃ」

「……」

頭巾がふりむいた。猫目頭巾であった。鷹のような鋭い目。

秀吉は、うっと声を呑んだ。

「——刀を貰いに来た」

その眼はいった。

「さわぐことはない、害はせぬ」

「……」

「その肌。北ノ庄の焼ける臭いがするの」

「ぬ！」

秀吉は身を起こそうとした。

が、腰が萎えたように痺れ、膝がいうことを聞かない。

怒りと屈辱でわなわなしているうちに、影はすーっと、すべるように部屋の隅へ。床をあげて下へ——その動作もしかし、あまりの敏捷さと仄暗さで、秀吉の目には、かき消すようにしか見えなかったことである。

灯も暗くなっていた。

動顚した秀吉は枕元の鈴を振ろうとした。鈴は錆びついたように音を失っている。かっとなって叩きつけようとした手が、宙に固着した。

「う、う……こりゃなんと」

もがく耳に、静かに囁く声が聞こえた。

〈——ものの用にも立たぬ者を、呼ぶ要はござるまい……〉

三

秀吉は蒼白になっていた。

これも幻聴ではない。誰かが、居る。黄金作りの太刀を盗んだ者のほかに、まだ居た——この驚愕が、声を奪った。

〈いまの盗人をからめ捕りたいでござろう〉

「う……む」

〈むだでござろうな〉

と、その声は揶揄するように、

〈忍法心得ある者には、いかなる剛ノ者でも追うは無駄骨〉

「じゃが、城を荒らされて、筑前の面目が立たぬわ」

〈それがしが承る〉

「う……そちは」

〈いささか忍法を心得たる者〉

どうしてこの男も御殿内に潜入しているのか、不審を覚えぬでもなかったが、それよりも太刀盗人への怒りが大きかった。

「追え」

〈承りました。して、彼奴を突きとめたあかつきには報賞はいかほど〉

「催促か、こやつ無礼な」

〈お怒りなされな。血が頭に上れば早死する。天下をその御手に握る前にな、地獄からお迎えが来よう〉

「へらず口を叩く、無礼であろう、無礼……」

〈これはしたり、それがしは羽柴筑前の家臣にあらず、無礼咎めはお門ちがいじゃ〉

むっ、と詰まった。

「何でもやる、望みのものをとらせる、追え」

〈承った〉

「つべこべと……間に合うか、いまから」

〈御懸念なく。手下が追うておりまする〉

すーっと、遠去かって行く声を追うように、

「刀盗人の目くらましに、汝は、勝てるか」

返事はなかった。が、ふいに五体の痺れが始まり、はげしい弛緩におそわれて、秀吉の痩軀はがくんと前へのめった。

それが影なき影、の返事だったのである。

ふっと、お茶々も目をあけた。不思議そうに瞳を動かしている。やはり術をかけられて仮眠状態にあったようである。

秀吉は、その裸身へふたたび手をのばそうとしたが、胸を波立たせた憤怒の炎は消えそうもなかった。

かれは好色だ。だが、生まれも育ちもあまりにも悲惨であるためか、ロマンチストの面もある。ことに女性に関し、上臈姫に想いを寄せるのもそれであり、老年に至るまで、なるべく人を殺さない方針で来たこともそれだ。この点信長の鬼畜にまさる殺人狂ぶりとはあまりに相違

している。

この夜。

二十年の恋のお市ノ方のイメージを抱いて想いをとげようとして、邪魔を入れられると、このまま不快な気持で、お茶々の処女肌をひらくのが惜しい気がした。

——明日にしよう、明夜あらためて……

と、思った。

かれは、鈴を振った。

こんどは、冴えた音で鳴った。遠くで応えがあり、衣ずれの音が簀ノ子に近づいてきた。

入口のところで平伏する侍女に、

「湯浴みの用意をさせい」

と、命じた。

そしてお茶々に、

「退がって休むがよいぞ」

と、優しく言った。

秀吉は風呂が好きである。城に在るときは四六時中、湯を沸かさせてある。痩せているので、蒸し風呂は好まぬ。すい風呂とそのころ称った、沸かし湯に入る。釜で沸かした湯を、樋で浴室の槽へ注ぐのである。

したがって、支度の整うのも早い。

侍女二人が襦袢に腰布で世話をする。浴室は十坪ほどの広さで、洗い場の板の間、簀ノ子に囲まれて一坪半ほどの湯槽。

その湯の中で楽々と手足を伸ばしたときである。どこかで含み声が聞こえた。

〈筑前どの……〉

四

ふりむいた。入口の羽目を背に侍女二人は伏し目で控えている。女の声ではない。横柄な呼びかけをする無礼者は？——あ、と気がついた。

〈刀盗人を、突き止めてまいった……〉

と、声は言った。

湯の中から聞こえているようだ。が、むろん透明な美しい湯の中に人が潜んでいるはずもなかった。浴室の四囲の壁に掛けられた灯はかなり明るく、洗い場の板目をくっきり見せている。

どこにいるのかわからないのは、うす気味悪い。浴室という条件も、秀吉を焦立たせた。

「ど、どこじゃ……」

〈堺でござる〉

あ、さっきの太刀盗人のことか。あわてて秀吉は言った、見えぬ影へ、

「堺、堺のどこじゃ。あやつの住居か」

〈いかにも〉

「突きとめて、何故ひっ捕えぬ、何故斬ってこぬ」

〈左様な約束は致さなんだ……〉

「たわけな！」

どなりつけて、はっとした。影の声は苦々しく変わって、

〈たわけは筑前どのだな、堺と教えてしもうたのはこちらの失敗じゃが、まあよい、ずい分と念入りに探せば見つかるかもしれぬ、堺は広いでな、では……〉

「あ、待て、待て、余が悪かった、許せ、堺の何処か申せ、礼金をとらせる」

〈望みのものをくれるという約束じゃ〉

「う、うむ……しかたがない、何を望む」

〈大したことはない。働きだけのものしか望まぬ。白銀十枚で居所を教える〉

「高い！　う、うむ、よいわ、とらせる」

〈信用ならぬな……〉

と、嘲るように、

〈これへ持って来て貰おう、話はそれからじゃ〉

「ええい、疑いぶかいやつめ……こりゃ、市松を呼べ」

侍女はさっきから、顔を見合わせておろおろしていた。彼女たちには、忍者の声は聞こえぬ。秀吉だけが、一人で饒舌っている。

気が狂ったようにも見える。

市松と聞いて、あわてて二人は腰をあげた。

福島市松は秀吉麾下荒小姓の一人である。今宵宿直で別間に控えている。

市松が飛んでくると、

「手文庫をこれへ持て」

湯の中から命じる。

さっきから浸りすぎて、ゆで蛸のようになっているが、まるで足でも引っ張られているかのように出るに出られない気持だった。

手文庫からろくに数えもせず白銀をつかみ出して小桶の中に入れると、

〈三枚たりぬな〉

と、言う。

どこに目があるのか。なるほど三枚たりない。秀吉は蒼くなったり赤くなったりして、

「こ、これでよいか、さあ、申せ」

〈堺の納屋町ムカデ小路だ。無花果の木がある。家人は女房と炊事女と子が二人。上なるは五歳にして女児、下なるは当歳の男児〉

「な、名は？」

〈白銀二枚、増やすなら〉

「チッ、ぬけ目のないやつめ、ソレ二枚入れるぞ。さ、申せ」

〈本人が名乗りおる名は……石川文吾〉

「石川？……よし。では白銀十二枚とらせる、文吾とその家族、ぜんぶ捕えてまいれ」

〈御免蒙る、この役目は家来にさせることだな、では……〉

「あ、待てい、余の命にそむくか」

〈筑前どの、おれを怒らせぬことだ。上手に使えば、ずいぶんと役に立つぞ……〉

堺のその家に間違いなければ、確かに役に立つ男。人使いは上手な秀吉である。すぐに反省した。

「わかった、わかった、余がせっかち過ぎたようじゃ。が、さて、忍ノ者、そちに所用あるときは何としよう、どこに使いを遣ればよいぞ」

〈巣は教えられぬ……〉

「それでは、しかし……」

〈――わしのほうから、参上する……〉

「そちの、名は？」

〈本名は申せぬ。アダ名も申せぬ。ただ、わしに代わるものは……〉

ぽとり——

天井から、何か落ちてきた。湯気のしずくではない。赤いもの——秀吉の尖った肩にぽとりと貼りついたものは、赤い蜥蜴。

げッと、秀吉ははらいのけた。湯の中へ。

ぱっと赤みが水面に散りひろがった。蜥蜴は、ばたばたともがいた。生きていたのだ。が、湯の中でぐにゃりと腹を見せた。赤い色がけむりのようにひろがった。

秀吉は肩についたその赤いいろを指に嗅いだ。

「血？……」

湯の汚れから、逃れて、漸く簀ノ子へ出た秀吉は、あっと、また息を呑んだ。

小桶の中の白銀十二枚が、消えていた。

五

「おもどりなされませ」

どこからともなく、影のにじむように室内に姿をあらわした夫に、美しい妻はつつましやか

に手をつかえて、

「御無事で」

と、見上げた。

「うむ……」

忍者ははじめて頭巾を脱いだ。

するどく、禍々しいほどの双眸にもかかわらず、眉や唇もとはむしろ穏やかに整った顔だち。

これは年余のあいだ逞しく変貌した石川文吾だったのである。

「——おふりは？」

「はい、お先に」

「寝たか。近ごろ寝つきがよくなかったが」

「さきほどまで父さまとお手玉するのじゃとむずかっておりましたが、漸く寝つきました」

「甘やかし過ぎたかな。ははは、だが、当分、夜歩きせいでもすむ」

「……」

「獲物はこの通りだ」

なめに背負った黄金作りの太刀をおろして、灯りのもとで鞘をはらった。

お牧は心得て燈芯を加え、油をかきたてる。ゆらりと炎のかげがゆれて明るさを増したなかに名刀が光りをはじいた。

いわゆる「三本杉乱れ」の、小乱れの焼刃がうっすりと浮かび、姿といい刀の匂いといい一点、非のうちどころのない名刀だ。

「納屋衆伊予良千殿がきつい執心でな。板金二十枚くれるそうな」

「大丈夫でござりましょうか」

「何が？」

「大坂城から盗まれた品とお布令が出ますれば、いかに伊予屋ほどのお方でも罪は免かれますまい」

「心配するな」と、文吾は男らしい微笑で、

「これは世間に洩れぬはずだ。まず、筑前どのは盗まれたことを隠す。おのれの恥、大坂城の恥だからな。次に蒐集癖のある者は、ことにあれほどの分限者になると、宝蔵をこしらえて、一人で悦に入っているのだ。世間に公表せぬ」

「すると、大坂城から伊予屋に移るだけのちがいでございますね」

「左様さ。その橋渡しをおれがした。手間賃が板金二十枚ということだ」

「何やら、こちらの勝手なこじつけのような気がいたします」

「どうせ世間とはこういうものだ。筑前もおのれが天下を握りたいくせに、口にすることは泰平の世とか、万人の倖せとかな、勝手なお題目を唱える。その実はおのれのためだ。大義名分が、しかし世間では通りがよいのだ、せいぜい都合のよい名目を探すことが世渡りの秘訣であろう。

おれも盗人にまで落ちぶれたくないとは思ったが、考えてみると、金は天下の回り持ちだ。筑前のものを盗るのは、おれは矛盾を感じない。侍は天下国家を盗む、忍者はそやつから黄金を盗む。大差はないわさ、むしろ、庶民はこれを知ると喝采するであろうわさ」

と、笑いながら、しかし、やはり自嘲の歪んだものが片頬を掠めるのを見ると、お牧の胸は、自責の痛みを感じるのだった。

——あたしたちが、この方を忍者から盗人にしたようなもの……

あれ以来——

去年の秋以来、お牧は文吾の妻となって仕えていた。たんに生命を救われたためではない。羽柴筑前守ほどの大名を敵にまわして縁もゆかりもない母娘を救ってくれた男らしさ。

そこに惹かれた。おふりという先夫の娘があったし、三歳年長も、しかし問題ではない。

先月、子が生まれた。

男の子であった。五介と、名づけた。

おふりは姉さま気取りで、この異父弟を可愛がっている。まだ口もきけないのに、何かと話しかけては、抱きあげようとしたりする。

他愛ない、そんな日常にも、ふと倖せを感じたりする今日此頃だったのだ。

文吾は一度、女に失敗しているだけに、お牧の心情には心から愛を傾けていた。むろん、お

志貴とお牧とでは、人間が月とすっぽんの違いだった。

お牧もまた先夫のことはすっかり忘れている。

文吾に愛を感じ、肉体的にも離れ難いものになっているだけに、お牧の自責は一入だった。

文吾はしかし、すぐと苦いものは忘れた。

誰の持ち物であれ、名刀の美しさ、魅力は、誰の目をも惹きつけ心を奪わずにはいない。

凝っと見ていると、魂を吸いとられるようであった。

と、ふと、文吾は顔をあげた。ある気配を聞いたのである。

六

秀吉が後に天下を掌握し得たのは、一に運、二に才、三に金である。かれは金の使いかたを知っていた。

猿、猿面冠者といわれるほど、かれは風采のあがらぬ小男だ。年とってから、その痩軀は如何とも大人物天下人にふさわしからず、侮蔑を免かれるため、諸将を引見するとき竹籠で恰幅をつくろい、その上に直衣などを着して威儀を張った、といわれている。

足軽小者から、ある地位まで昇るには、たしかに、猿のようにこちょこちょと走りまわり、主君のお覚えがめでたいほうが、出世を早くする。が、その出世の可能性には限度がある。あ

る程度で、止まる。それ以上になると、並はずれた才知か、徳望か、豪勇がなければならぬ。

秀吉には、そのどれもがなかった。かれはその欠点を補うのに、金を役だてている。

家康が名代の吝ん坊で、秀吉がさほどにいわれないのは、家康ほどの知恵がなかったともいえる。秀吉は、貧から出ているので、金が人間をいかに支配するかを充分に知っていた。

人気とりのため、公卿、諸将に（四、五年後のことになるが）小判大判を山と積んで無造作に摑んで与えたという。因みに、金銀貨幣のかたちを創始したのも、秀吉のいわゆる天正大判に始まる。それまでは、銭であり、銀は切違いの丁銀豆板銀で、金は砂金を重さで計って使っていたのだ。ついさきごろまでは、唐土の銭を混用してすらいた状態である。

金の使い方を知っている者は、無駄金を吝しむ。

白銀十二枚を、無駄金とするような秀吉ではなかった。

「ただちに堺奉行へ申しつけよ」

指令がとんだ。

堺は昔から自由港として発達し、海外貿易も行ない、細川、三好など代々管領の保護を受けて栄えてきた町で、富裕な納屋かし衆三十六人の合議制による自治をみとめているが、堺奉行を置いてある。

したがって、かれらの商売上不利になることならともかく、それ以外のことで敢て、秀吉の怒りを買おうとは思わない。商利に敏な納屋衆である。大坂城侵入の賊というだけで協力的に

なる。

奉行自ら陣頭指揮で、納屋町ムカデ小路を取り囲んだのは、早馬が着いてから、小半刻ほど後である――。

「……」

文吾はふと、耳を澄ました。

鋭い直感がとらえたのは、二丁の先にひたひたと捕吏が迫ったときである。

「来たぞ」

集団でもって四囲から押し包んでくる気配。遠隔にあっても、はっきり文吾の六感を搏った。

「青蠅がたかって来たわい」

女房をふりむいて苦笑した。

「え!?　それでは」

「支度せい」

それだけで充分だったのである。妻は一瞬さすがに顔色が変わったが、顎を引いてうなずいた。

イザという場合の心得は常々聞かせてある。

まさか、城内から忍者に尾行されていようとは知らなかった。千載の遺恨事だった。

「――裏へ」

家族を先へ逃がして、文吾は忍具を担いだ。

大小クナイ、水蜘蛛、鉤梯、シコロ、坪錐、忍熊手、などがすぼりと小さくおさまっている袋だ。これらを時に応じ使いわけて変化の術を具現する。撒き菱、発火道具などの小袋からとりだした小筒を部屋の中央に立てる。

火口を加減した。捕吏がこの家に闖入するまでの時間を計ったのだ。

「これでよし」

火を点じると、さっと裏へ。家族のあとを追った。

文吾の姿が消えたとたん、どこからか忽然と現われた影がある。

目も鼻もすぼりと黒い頭巾に蔽われた装束。つか長の尖り鐺の忍者刀をななめに背負い、つつーっと、火筒に馳せよった。

火口をついとつまむ。火が消えた。

「ふふふふ、百年待っても、爆発せぬわな」

眼も口も見えぬ。すぼりと頭巾に隠れて、黒い冬瓜のような頭が、嘲りを洩らした。

これは、城内の湯殿で秀吉を翻弄した紅蜥蜴の声にまぎれもなかった。

捕吏が踏みこんだとたんに爆発すれば、逃走の刻を稼げる。文吾のその火術は裏をかかれたのである。

捕吏たちは、衆を恃んでどっと雪崩れこんだが、

「居ない！」
「逃げたか？」
「まだ、遠くはゆくまい、赤児づれだ」
狼狽のさわぎに応えるような声が、そのときどこかでした。
〈遠くへはゆかぬ、南へ一丁……〉
奇妙な嗄れ声であった。
がやがやと騒ぐなかで、はっきりと聞こえた。
それが、誰か、詮索するより先に、功をあせる気持が、捕吏たちの足を浮かせた。どどッと先を争って走り出している。

七

お牧も召使いの女も忍法は知らぬ。二人の幼児を抱えての逃走は文吾の忍法にしても、楽ではない。捕吏の目をくらます方法に力点を置かねばならぬ。
火術の失敗は、すぐに悟った。
——どうしたことだ？
考えられぬことだ。忍ノ者の火術。雨や風にも消えぬはず。まして家屋の中で立ち消えするなど、あり得ぬ。
——誰かが、消したのだ！
としか思えなかった。誰かが？　見当もつかぬ。忍法心得ある者。はっとした。密告者と同一人ではないか。忍者を見破り得るのは忍者しかない。
——容易ならぬ！
影なき影へ、文吾は怒りを燃やした。
誰が、何のために？　誰の命令を受けてのことか。不審は秀吉の身辺に忍者を見なかったことである。城内の閨房まで侵入するには文吾も充分の目をくばっている。
忍者は配置してなかった。それははっきりといえる。
したがって秀吉直属でないことは確かだ。
だが、その〝影〟を詮索するにはかれは閑を持たなかった。家族を無事に逃がす方が先だ。
捕吏の足は半町の近くまで迫っている。多勢が、闇に目があるように、ためらいもなく、まっすぐに逃走の跡を追ってくるのも、忍者の手引きを物語っている。
「先へゆけ」
文吾は言った。
「おれが食い止める。万一のときは伊賀おとぎ峠で落ち合おう」
お牧は五介を抱き、召使いの粂がおふりの手を引いている。

「おとぎ峠？」

おふりが、おうむがえしに言い、にこりとした。

そのあどけない笑顔が、これ限り見おさめになろうとは、文吾は夢にも知らぬ。

革袋からつかみだした鉄菱――両尖の一寸釘を三本たがい違いに嚙み合わせたもので、はらりと撒けば必ずするどい先が上をむく。

文吾は一投げで路いっぱいに撒くや、さっと身を翻して、かたわらの家の屋根へ。

こけら葺きのやわな屋根だが、体重を支える個所を熟知している。棟木の上をつつーっと猫走りに――

意外にも文吾の影は追手のほうへむかってすべってゆく。

せまい小路いっぱいになって雪崩れてきた捕吏はもとより上を見る余裕はない。たとえ見ても文吾の影をとらえることはできなかったろう。

「あ、痛う！」

「痛ッ痛ッ、釘が……」

先頭の七八人が喚きを噴きあげて、ぶっ倒れた。先を競ってひた走っていたのだ。どどどッと、なかまに蹴躓いて屏風倒しに転がる。

轟ッ!!　すさまじい音響がこのときかれらの背後で起こっている。かっ、と真紅の閃光が闇を裂いて炸裂した。

「ややッうしろに」

「何んとして？　忍者にあざむかれまいぞ」

「用心しろ、忍者じゃ」

体勢を立て直そうとする足もとにしゅしゅしゅッ、白煙が渦巻き白竜の地を走るにも似て、かれらにまといつき、視界を濃密な白霧でとざした。

文吾はにやりと片笑いを洩らして、

〈伊賀忍法〝白竜陣〟を見たか……〉

屋根の上をふたたび猫走りでひきかえした文吾を愕然とさせたのは、地上に倒れた粂の姿だった。

その背中に、ふかぶかと手裡剣が刺さっている。

「やられたか、忍ノ者だな、みんなは？」

「は、早く、さらわれました……」

虫の息で北の方を指さすと、がっくり重く崩れた。

「うぬ！」

影なき影――その敵対する忍者が、一人でないことが始めて判然としたのである。

文吾も風を巻いて走った。

影三つ。

忽ちにして追いついた。忍者の影は見えぬ。風のなかを走る白衣——横抱きにされたお牧とおふりと、当歳の五介。遠目には三人の姿は宙を泳いでいるように見える。

「——やつらか！」

秀吉に密告し、剰え、火術の邪魔をし、三人をさらうとは。よほどの怨みを文吾に含む者でなければならなかった。

「待てい！」

勢いこんで追う。

が、なんと敵は三人にとどまらなかったのである。いま一息、と思った刹那、横合いから、しゅっと、からみ縄が飛来した。たッと、跳び超えて走る。その背に、礫が——一つ、二つ、三つ。

闇夜の礫はさけ難し、というが、これは闇のうえに、さらに背後から来た。むろん、振りむいて、これを見、これを躱すひまはない。背後の目。それは忍者としての鍛練から得た感覚に頼るしかない。

右、左、頭上——間一髪にさけつつ、文吾の手からも、十字手裡剣が一線をひいて夜を裂いた。

ぐっ、と手ごたえ。一人が突んのめった。小わきに抱えた白い包み——小袖にくるまれた五介のからだは、宙に投げ出されている。

はげしく地に叩きつけられる一瞬、文吾の手が抱きとめた。

と、同時に、手裡剣を受けて突んのめりながら抜き討った忍者刀が、文吾の胸に走った。のけぞった胸の襟を切って、白刃は半弧を描いて流れている。

むろん、それが最後の力だったのである。その忍者は、おのれの力にふりまわされるように一回転してどッと倒れ伏した。

右腕に五介を抱えて、文吾も忍者刀に手をかけた。

相手が忍者、それも多勢では目くらましは役に立たぬ。

闇からにじみ出るように、黒頭巾におもてをくるんだ忍者たちが四、五人行手を阻んでいる。お牧とおふりの姿は、そのあいだにも闇のかなたへ連れ去られてゆくのである。

「ちいッ、邪魔ひろぐか！」

さっと手をひるがえす。

右側から追った男が、うっと呻いて海老なりに崩れる。それを見かえりもせず、一跳躍して、前面の敵を抜き討ちに斬り伏せるや、まっしぐらに突っ走った。

と、その眼前に凄まじい硫黄の臭気とともに、もくもくと黄褐の濃煙がひろがり、前後左右、視界を全くとざしてしまった。

「お牧！　おふり！」

文吾のさけびは虚しく、濃霧の中でさまようばかり。五介も狂ったように泣きはじめている。

その声を目がけて、ぴゅぴゅッと、非情な手裡剣が襲ってくる。

不覚！

いまはもう、文吾は五介を抱いてこの包囲を脱出するだけが精一杯だった。

八

秀吉はまだ起きていた。

痩軀ながら、芯は丈夫な男である。不眠などということを知らぬ。草履とりの昔から、寸暇をぬすんで眠ることをおぼえた。一刻でも半刻でも、思いのままに眠り、起きる。主人の目のあるところで四六時中、緊張し、働きぶりを見せることができたのも、この必要から得た特技のせいであろう。

それがこの夜、どうしても吉左右を聞くまでは眠れない。

お茶々は退がらせたし、盃を手にする気にもなれぬ。

いらだちを鎮めるとき、秀吉は絵図を睨むことにしている。日本国全土の絵図である。むろん、測量以前数百年のことだから満足なものはない。

当時のゼスイット派の宣教師の手になったものでも、日本は全体の三分の一くらいのちぢこまったもぐらみたいな島で関東辺でたちきられている。

中央集権の行政の貧困さが辺境をほとんど問題にせずとも済んだからでもあるが、しかし、中心部の五畿内はもとより、部分的にはかなり正確に近いものが集められていた。

これは信長の代に甲賀者を使って集めさせたものである。

絵図を見ていると、秀吉の心は鎮まる。おのれの版図が拡がってゆくさまを想像出来るからだ。白駒と黒駒を配して河川山谷で山戦を考えるのは楽しみでもあった。

信長の地盤を得て中央を掌握し、他国の群雄に比べて地の利はよし、天下とりの分は最もある。だが、強敵もまた尠なくない。

秀吉にとって、最大の敵は東海の沃土を擁した徳川家康であった。

家康は信長の家来ではない。義兄弟の盃をなしている。あれほど暴虐にして肉親を政略の犠牲にして毫も悔いなかった男が家康だけは裏切っていない。

人間的信頼というより、家康が細心にして信長を怒らせなかったことと、信長にとっては一見温厚情誼的な家康は背後の備えに置いている恰好だったからでもある。家康が三河遠江にいなかったら、武田信玄、北条氏政らに背後をおびやかされて、あれだけの覇業は成し得なかっただろう。

それだけに、家康を厚遇していた。草履とりから成り上がった秀吉とはわけが違う。むしろ主筋に当たるといってもよい。秀吉のやり難い点はそこにあった。

主筋に当たる邪魔者はほかにも二人いた。

信長の次子で北畠家を継いだ信雄と三子で神戸を名乗る信孝である。が、反間の策が効を奏し信孝は信雄に攻められ、自殺して果てた。

信雄にはしかし、信望もなく、父ほどの豪勇もなく、勢力もない。これは秀吉にとっていつでも、その気になればヒネリ潰せる相手だ。

「――厄介なのは三河狸じゃて……」

駒を進めあぐねて長考に入ったとき、ぽとり――血が天井から落ちた。

血!? 血のかたまりかと見えたそれは、ひくっと動いて四肢を這わせた。

蜥蜴――紅蜥蜴だった。

「む……また現われおったか」

こんどはさすがに驚かぬ。大事な絵図面を血で汚されたことの不快感だけがあった。

その不興を慰撫するように、あの声が聞こえた。

〈――堺奉行の手並、児戯に類したものでござったわ〉

「う……なんと申す」

〈とり逃した〉

「鼠賊めをか」

〈鼠賊ではない。天下の名城の奥深く忍びこんだ大した忍者でござろうわい〉

「そ、その忍者なら、なおさら、とらえて糾明せねば」

〈まことに。せっかくお教えしたのにな〉と、影の声は揶揄するように、〈わしもそうそう手助けできぬ。ところで、わしのほうには獲物がある。幾らで買う?〉

「また、金か?」

〈幾らで買う、おてまえの好物……〉

「獲物と申したな」

〈左様、おてまえが色を楽しみ、石川めを火焙りにもできようものじゃ、金十枚でいかがであろう〉

「――女、か?」

秀吉はあたりを見まわした。

影はどこに居るのか。天井裏のようでもあり、床下のようでもあり、隣室のようにも聞こえる。

紅蜥蜴は、人間の血か鼠の血か、血の色を残しながら、部屋をななめに這ってゆく。

「女は……」と、秀吉はあえいで、「品物も見ずに銭を出すやつがあるか」

〈すでに御存知〉

「なに、鼠賊の女など、余が何として」

〈去年、お城の祝宴に見初めた女――見初めながら、手を触れ得なんだ女があったはず〉

「おお、あの……」

〈唐物屋のお牧〉

思わず秀吉は腰を浮かせて、

「まことか!?」

〈十金では安かったかな、ふふふふ〉

「く、くれてやる!」

秀吉はわななく手で、板金をつかんだ。

「どこじゃ」

〈あわてることはない〉と、かえって影の声は落ち着き払って、〈屏風のなかに投げるのだ〉

「屏風に……」

金屏風の裡に？　そこに潜んでいるのか。そういえば声はそこから聞こえてくるようであった。

中を見たい欲望にかられながら、秀吉は板金を投げこんだ。ちゃらっと散乱する音。

「女は、どこじゃ？」

性急な声に応えるように六双屏風がふわりと倒れてきた。

「おお……」

そこに、女が横たわっていた。

帯が解けかけて、衣紋は乱れ、胸も腿もはずかしげに白い肌をのぞかせている。

お牧だった。

そして、声の主の姿はなかった。投げ入れた板金十枚も、きれいに消えていた。散乱する音がしてほんのひと呼吸の間に、嘘のように消え失せていたのである。

夜ごとの肌

一

男と女が、一つになるとき——本能を剝きだしにしたとき、この社会で生存する必要から身についた虚飾のすべては剝落し、そこには四肢を持った、けものの姿だけがあらわれてくる。

恐怖と絶望のために、半ば死んだようなお牧の肉体に襲いかかった秀吉は、筑前守ではなかった。従四位下参議の衣冠もかなぐり捨てた下司下郎でしかない。

「あ……」

意味をなさぬ声を奔らせて、お牧のからだにかぶさっている。

ぐたりと四肢を投げだしたお牧とのとりあわせは小鳩か白兎を食い散らす餓狼のようにも見える。

——もっと手柔らかに出来ぬものか、残飯を食いあさっていたころの素性が出たな……

と、この浅ましい情痴図を天井の隅から見おろしてつぶやいた影がある。

その影は、こうした場面を見るのに飽きたように、梁を伝わって外へ出た。

梁をゆくあいだ、鼠がそばをゆっくりと通っていったが、この影の存在にも気がつかないらしい。影のほうでも一瞥もくれぬ。

御殿の外へ出ると、植え込みの陰をひろって歩きだした。

筒袖たっつけ袴の軽装に頭巾はれいの目なしである。布地が総体にうすいか、目鼻のところだけうすくなっているのであろう。

だが、仄明りのもとで面とむかうと無気味さはいうまでもない。忍者同士の場合、わずかに洩れる双眸だけでも特徴をつかむ。

影が本丸の糒蔵のところまで来たとき、それに吸いよせられるように、石垣の裾から、一つ影がこぼれて近寄った。

〈頭領……〉

なかまだけが解する、忍び声。

〈うむ、カナメか〉

〈は。娘は杉が連れ去りました〉
〈赤児はなんとした〉
〈それが……なんとしても、してやられましたわい〉
カナメと呼ばれた下忍はこう言った。
赤児を抱いた文吾は浜辺へ逃げた。堺の町は前に述べたように自治形態が発達し周囲に高塀をめぐらし、さらに濠を穿ってある。往来は二カ所の橋でする。これははね橋になっているし、橋袂には厳重な木戸も設けてある。忍法達者にしても幼児を抱いての、脱出は難しい。
街中をあちこちとまわって、しまいに海へ出ると、真直ぐ海へとびこんでしまった、という

――

〈逃げられたか！〉
〈さ、それが異なことでござる。赤児を抱えての水くぐり、何ほどのことはあるまじ、五人で追うたところ、何と、沖合五町がほどのところで、赤児を捨てたようで〉
〈赤児を!?……彼の子であろうが、いかに危険が迫ればとて、捨てるとは。誰が、見たかその子を〉
〈いや、追うそれがしのまえに、赤児をくるんでいた小袖が流れてきまして〉
〈――見なんだのだな〉
〈は、はあ……したが、左脇に抱えて、浜辺より海へ飛びこむのを、みなひとしく目撃してあ

れば〉
「たわけが！　目くらまされたわ」
苦々しく影は常の言葉を吐きだした。
〈逃げまわる間に、どこぞに赤児を隠したのであろう。赤児と見せかけて石か何か小袖にくるんでいたのであろう。それくらいのことが見ぬけざったか、阿呆め〉
〈……〉
下忍は言葉もなく、うなだれた。
〈それで、逃がしたというのじゃな〉
〈は。赤児を抱えていればともかく、身軽になられては、とても〉
〈かなわぬとか。たった一人のやつに手子ずりおって。まあよい、彼奴は生かしておいたほうが利用価値はある。それにしても修業がたりぬぞ、折りにふれ、励め〉
〈は……〉
と、また一揖したとき、どこからともなく、いま一つ、影がにじんで、
〈――頭領……〉
〈……十内か〉
〈は。文の字、ただいま三ノ丸に侵入してまいりました〉
要所に見張らせていたのである。

〈来たか。よし、さとられるな。おれが受ける〉

言下に、二つの影ははじかれたように飛びのき、闇に溶けた。

海上を遠く泳ぎ逃れた文吾は迂回して千多ケ崎に上がり城内に侵入してきたのである。

忍者の集団に怨まれるおぼえはない。秀吉の使嗾以外には考えられなかった。お牧を秀吉がもとめていたこと、そして、文吾との関係から見ても、秀吉に当たってみるのが一番早道であった。

二

本丸西の丸から先に急いだから、二ノ丸の一部と三ノ丸はまだ完成していない。角櫓の足場が組まれたままだったり、作事小屋が並んで、人足らの洗いものが、ひらひら夜風になぶられていた。

乱雑であるほど忍者の行動は楽になる。広大な三ノ丸を難なく通り抜けて二ノ丸へ入ったとき、

〈ぬ……来たな！〉

背後に迫る影を感じた。

執拗な敵。忍者は闇の浮塵子に似ている。前後左右、闇が呼吸をしていた。

不思議なことは、一定の距離を置いて追走してくるだけで、危害を加えてこないことだった。

――何故だ？……

群狼の意図は程なくわかった。

二ノ丸から本丸へ忍びこむとき、濠を渡る。三ノ丸外の空濠ではない。満々と水を湛えて、水中には二段に鳴子仕掛けが張りめぐらされている。

水練はもとより達者だが、忍者はできる限り、五体を濡らさぬ。後の活躍に支障を来たすからである。

対岸に樹があれば鉤梯を投げて、いわゆる〝陰渡し〟で水面を歩き渡るか、山羊のまたは兎の皮の浮袋、桐と竹でできた水蜘蛛と称される道具を穿く。雪国のカンジキ様のものである。

本丸の石垣は三丈ほどもそそり立っているから鉤梯はとどかぬ。水蜘蛛を用いて、すっすっと、水面に波紋を撒き散らして石垣にたどりつくと、けわしい勾配にとりついた。

巨岩の積み重ねられた石垣は、クナイをはざまに突き刺して足場にするまでもなかった。指のかかるだけの隙間か段落があれば忍者は垂直の壁でも攀じる。

するすると、渋滞なくのぼり切って、ひらりと身を躍らせんとした刹那、ひゅん！　夜気が哭いた。

ぱっと、目前で、燐光が閃いた。音はなかった。目もくらむばかりの白熱の閃光である。

四囲が、一瞬、真昼のように明るみ、文吾の姿をありありと浮き上がらせた。

なまなかの者なら、この閃光に目くらまされて、石垣から転落したであろう。文吾は辛うじて縋りとどまるや、余光を放ちつづける閃光弾を、たっと、忍具袋ではらいのける。

一跳して、位置を転じたのはいうまでもない。閃光弾は美しい人魂のように白光をふり撒き白煙の尾を引いて足下の濠に落ちてゆく。

「ははは、やりおる」

哄笑が起こった。

巨松の梢か。その声は紅蜥蜴にまぎれもなかった。

「小僧、何処へゆく？」

「……」

「御殿か」

「……」

「御殿であろう、ふむ、たしかに女房は御殿に居るぞ」

「うぬの仕業だな」

否とも応とも答えず、

「目をつけたのはよいが、少々遅かったようじゃな」

「なに！」

「筑前が一年前の想いを遂げているわい」

「ぬう!!」

かっと、激怒で全身が燃えた。

さっと飛びだそうとする面前で、カチッ!!　と火花が散った。手裡剣だった。

狙いは適確。打ち込むつもりなら心ノ臓か頸すじに打ち込まれたろう。故意に、鼻先を掠めて出鼻をくじくとは、恐るべき敵だ。

「あわてるな」

揶揄するような声が、

「もはや、遅い、お牧とやら、あの女は貞節じゃでの、もはや遅い」

「……」

「おそらく、筑前に弄ばれては、生きていまい」

「――ああ、お牧！」

「ふふふふ、泣け、泣け、泣け……」

冷酷無情の声は、腹の底から嬉しげに笑いながら、

「女を奪われた苦しみを、いまこそ、知ったであろうて、ふふふふ」

「え!?……」

三

愕然としたことであった。女の怨みを受けるおぼえはない。お牧のことも間接的な仲ではなかったか。もし、怨むとすれば、やはり半蔵しか思い当たらなかった。

さては、半蔵か。

声に記憶はしかし、無い。歳月と数奇な生活は、人間を骨格まで歪めてしまう。声も変わる。むろん、忍者は少なくとも二十通りの声を持つから、その声で判別しようとするのは難事なのだが。

女を奪われた——その一言が、愕然として文吾にお志貴のことを想い出させたのだ。

呻くように、文吾は、言った。

「半蔵か」

「……」

返事はなかった。

「半蔵だな。お志貴のことで怨んでか」

「……」

「半蔵、答えろ。いかにも、おれはお志貴に迷った。が、怨み、憎むとすれば、師匠ではない

か。おれは、おぬしに憎まれるいわれはない」

「……」

「そうではないか、半蔵」

はじめて、返事があった。

「半蔵とはどこの半蔵じゃ」

「おぬしは……」

「紅蜥蜴」

「なに！」

「もう一度申す、紅蜥蜴」

言下に、ぴゅっと、黒いものが飛んできた。

礫かと思い顔をひねったが、石垣に落ちてぴたりと貼りついた爬虫類、するするっと文吾の顔に近よってくる。蜥蜴だ。

むず、と摑んだ。ぬるりとした液状のものがねばっこく、掌から逃れようとするのを、握りつぶした。

「おぼえておけい、紅蜥蜴はおれの使い女じゃ」

「——半蔵ではないのか」

闇はふたたび沈黙した。

文吾は梟ノ目を光らした。周囲をとりまく忍者の気配は依然として地虫の呼吸をひそかに洩らしている。巨松の陰におぼろな人影が見えた。

ふっと、行手を阻む黒い霧の壁が弛んだ。

文吾は身をおどらせた。風を巻いて走り出そうとした前面に、ゆらりと白いものが、静かに横たえられた。

「あ……お牧！」

ぐたりと四肢を投げだした裸女――お牧にまぎれもない。両腕に抱えあげたとき、その唇から流れた血汐が赤い紐のように滴っているのが見えた。

かたく閉じられた双眸は、二度とおのれの屈辱の姿を見まいとするように、永遠にひらこうとはしなかった。

「お牧！」

ひしと抱きしめる文吾の眼から、潸然と涙がふりおちた。

「思うた通りであったな……」

紅蜥蜴の声がまたした。

「我れと我が舌を噛んだのじゃ、誰に殺られたのでもない」

「うぬ！　しらじらしいことを、汝と筑前を終生……」

「たわごとはよせ。おふりは、おれの手中にある」

勝ちほこったような笑いが、闇をゆるがして、

「ことわっておく。筑前の身に万一のことあらば、おふりは、死ぬ」

それが最後の言葉だった。

四囲の闇がふるえ、夜風が渦巻いた。数弾子ののちに闇はふたたび、もとの冷たい静寂にかえった。忍者が、去ったのだ。

――おふり！　彼奴らにとらえられているのか……

凝然として、文吾は石垣の上で、動かなかった。お牧のからだは夜露に濡れたように冷たくなっていた。

四

一人や二人の敵ならば、如何に術に巧拙あれ、いのちを賭けての勝負に五分の可能性はつかめよう。

逆に文吾が、もし天下一の忍法達者であったとしても、忍者数十人を向こうに回してはかなうすべはない。

紅蜥蜴ひとりではないのだ。恐るべき統率のとれた忍者数十人が手足の如く行動する。変幻きわまりない出没と、その常人ならざるわざを駆使されては、文吾にはとうてい歯が立たない。

だが、

——お牧の怨み霽らしてくれる！

その愛が深かったゆえに、筑前守秀吉のふるまいは許せなかった。

紅蜥蜴は何者か。服部ノ半蔵という確証はない。おふりが、その手に在るかどうかも疑問なのだ。

秀吉をまず、殺ろう。

翌日。お牧を葬ってから大坂に舞いもどってきた。

葬いといって、孤立無援、追われる身の文吾にどれほどのことが出来よう。生駒山中に埋葬し、名知れぬ白い花を供えただけであった。

その夜。

——殺る！　秀吉を殺る！

殺意に双眸をきらめかして、城内に乗り込んだ文吾は、しかし、秀吉の寝所に近づいたとき、手痛い妨害を受ける羽目になった。

秀吉の褥の真下から、刀を突き刺さんとした刹那、闇から飛来した手裡剣が、右腕にガッと食いこんだ。

「しまった！」

やはり伏兵はいた。

十字手裡剣が刺さったまま、文吾は逃走に移った。

本丸から西ノ丸へ逃れて、一息つく。追ってくる気配はなかった。が、用心せねばならぬ。御殿の床下へ潜入したのは夙に発見されていたのだ。秀吉刺殺——とはっきり目的をあらわしたとき、闇の敵は、かれを阻んだ。

そのゆとりある妨げかたも、一人や二人の連携ではない。

ふたたび、文吾は風に乗った、十字手裡剣を抜きとった。手裡剣には、蝶結びに文が結んである。

走り書きの達筆に、ただ一行。

〝おふりを死なせたいのか〟

左隅にぽとりと落としたような血の痕——蜥蜴のかたち、と見たとき、文吾は背筋が冷えるような戦慄におそわれた。

——やはり、おふりは彼奴らに……

秀吉の安全を計るために、おふりを人質にとったのか。昨夜の宣言はこけ威しでなかったのか。

走りながら、しかし一つの不審がどうしても脳裡にひっかかっていた。

——何のために？

もしも半蔵と紅蜥蜴が同一人ならば、お志貴の怨みを、お牧で霽らそうとするのも、筋ちが

いではあるが、わからぬでもない。

だが、それなら、なぜ、文吾を討たないのか。

お牧への愛を知って、生涯苦しめようというのか。おふりを奪って、じりじりと苦しみを与えようとするのか？

陰湿な忍者の性格としては、あり得ることだ。しかし、半蔵なら、主人たる徳川家康のためにも羽柴秀吉を討つのが筋ではないか。家康が命令を下さぬまでも、文吾が秀吉を討つのを阻む理由はない。

おふり、という切り札を使ってまで、秀吉を守るのは、解せないことだった。

まことに奇怪というしかない紅蜥蜴の思惟である。

闇の底を這って去る文吾を見送って、物陰から一つの影がにじみ出た。それを待っていたように周囲の闇が千切れ、三つ四つの影が膝をついた。

「――薬が利いたようだ」

紅蜥蜴は言った。

「これで筑前には手を出すまい」

「多分」

「だが、見張りを怠るな」

「は……」

「三州に行ってくる」

隣家に行くような口吻であった。紅蜥蜴は闇に消えた。

五

お茶々が、秀吉以外の男に犯されたのは、次の夜である。

秀吉はこの夜、あのままであったお茶々を慰むべく、まだ日のあるうちから伽を申しつけた。

秋の日はことわざにも言うごとく釣瓶おとしで、落ちはじめると早い。お茶々が侍女数人によって丹念に肌を洗われ、香水を浸した水をもって隅々まで――それこそ耳の穴から足の指まで拭い清められて寝所にともなわれたのは、崖を転がり落ちるように真赤な日輪が摩耶山の肩に沈んだ直後であった。

白絹の寝衣をまとって、ひそと屏風の端に坐った。

秀吉の御床入りを待つのが、こうした場合の伽の作法である。

すると、どこかで秀吉の声が聞こえた。

〈大儀じゃ、休め〉

「はい……」

うかと返事をして、お茶々は深く一礼すると、細腰をすべらせて褥に身を横たえた。

夜風が侵び入ったように、灯がまたたき、ふうっと仄暗くなった。羞恥に耐えぬおとめには幸いである。それでも、かたく目をつむり無意識にも緒を固く閉じていた足を、むずとつかまれた。

おとめを開くのは双の拇指が古来、決め手とされている。

いかに固く閉じてあろうとも、足の拇指を握り、手の拇指の腹を、いわゆる草陰と称する指のつけ根を圧すように開けば、どんな貞操でも容易に犯せるとある。田舎の風習として現代でも残存している夜這いに於ては、この方法が女の眠りを醒まさず、思いを遂げるコツとされている。

いま、お茶々の脚をこの方法で徐々にひらいてゆくのは、黒装束に全身を包んだ——文吾であった。

——復讐だ、秀吉に直接手を下せぬなら、彼奴の寵妃を！

掌中の玉といつくしみ、おとめを女にする喜びを数分後に控えた秀吉の鼻をあかすために、性懲りなく侵入してきた文吾であった。

かつて、落城前夜の北ノ庄城内で、お市ノ方との湯浴みを目撃したことがある、あのうすい胸、小さな腰——女になりきらぬ裸身を見て何の感興も催さなかったおとめが、いま、女そのものの裸身を横たえている。愛ではなく憎しみで、この女を犯すことになろうとは、夢にも思わなかったことである。

羞恥と恐怖と、好奇と期待と、不安と戦慄がお茶々の目をふさいでいる。

反射的に脚に力がこめられるのを、ひきはなすとき、さすがに文吾の眼は、濡れ濡れと妖しくかがやきを放った。

理性では復讐だと叫びながら、やはり若者の昂り易い感情が、男を熱くさせていたのは否めない。

羞恥の快感に似たものが、内股を走った。

あ、と半ば唇がひらき、戦慄した肌の上に男がかぶさり、二つの花片を合わせたような唇をおしわけて、舌がすべりこんだ。

同時に、お茶々の下腹には荒々しい手が這い、あえかな草むらをまさぐっていた。

お茶々は息づまるばかりの口づけのうちに、全身を兎がはねまわるような喜悦と昂奮に身もだえした。下腹部が熱く火照りを感じた。

「——はじめてだな、まことに……」

その感歎したような声は、お茶々の上気した耳には、遠い雲のかなたの天上の雅楽のように聞こえた。

次の瞬間、激痛が股を、切った。食道がつまるような、男性の侵入を許したのだ。疼痛が全身を貫いた。

呻きが——疼痛の呻きが、やがて快感に浸るそれと代わり、甘くうるんだような歓喜の声に

変化するのに、幾らもかからなかった。

平凡な若者は女に真の喜びを与えるまでに半年、一年もかかる者が多い。忍法「くノ一」の秘法にいう、〝色をかける〟情感に濡れさせるのも術である。

白い肌は見る見る仄赤く色づき、すんなりと長い下肢が宙を蹴り、文吾にこたえた。

両手が狂ったように、男の背をしめつけ爪を立てる。

秋の夜も知らず女の肌は汗ばんで、恍惚の呻きでもだえ、その烈しさは死ぬかと思われるばかりだった。

文吾が身を起こそうとすると、

「いや！」

と、しがみついてくる。

「はなさない」

「母御に似げない、好き者だな……あとは筑前が引き受けるわ」

「――だれ？　あなたさまは？」

ふっと迷夢からさめたように、女は眼をあけた。

「名乗るほどの者ではないわ、石川……」

言葉は切れた。

文吾のからだは宙にはね上がり、ぴたりと天井に吸いついた。

「ああ……」

お茶々は手をのばしたがそのままぐったりとなった。

天井に貼りついた文吾の眼から、赤い炎が吹いたように感じた。その炎は彼女をとらえ四肢に鉛の重しをつけたようなけだるさで褥に横たえた。お茶々は目がくらみ、朦朧として、ふたたび恍惚にひきこまれた。

回廊に足音がした。

湯から上がってきた秀吉である。機嫌よく小姓に何やら笑いとばしながら、部屋に入ってきた。

仄灯りの褥にすでに横わった女の肌が目を射た。

情慾に上気し、汗ばんで、うっとりと陶酔に浸っている裸女！　閨房の作法もとるにたらない。勃然として秀吉は情念に駆られた。

先夜のお牧で味わった苦い味が一瞬で吹きとんだ。お牧の美しいが冷えた死肢にすら、秀吉は挑んだのである。そして、女の操のかたさは、舌を嚙み切って死に瀕したとき、いかに強行に作用するかを識って愕然とした。

お牧の肌はその死を招いた意志の激しさで、おのれを閉じ、野獣の侵入を許さなかったのである。

いま――

しとどに濡れた女体を見、その秘部から発するような栗の花の芳香を嗅いで、秀吉は意味を

なさぬ声をもらした。がばっと蔽いかぶさっていった。

骨張った太い指が、すでにゆるんだ女の襞へするりと分け入ったとき、はっと醒めた。

城主のお成りを待つ間に、そこで何が起こったか。しとどに濡れた痕跡こそ、何よりも交媾を物語るものであったにもかかわらず、秀吉がそれを看過ごしたのは常識では考えられぬことだったからである。

深窓に大切に守り育てられた名花が、いま羞ずかしい蕾をひらいた直後だと知るには、秀吉はお市ノ方のイメージへあまりにも執着していた。

女体をあさることには人後におちぬ秀吉が、お茶々の処女膜の有無に気づかなかったとすれば、それは、無垢の若者にひとしい恋慕の情のゆえと解されよう。

温かい靄にくるまれた数弾子の、夢幻から醒めたお茶々の眼は、秀吉の尖った肩越しに天井に放心したように投げられた。

四季の花々を東西南北——春夏秋冬に当てはめて描いた華麗な格子天井の、どこにも彼女の最初の〝男〟の影はなかった。

六

文吾の跳梁はその夜を皮切りに始まった。大坂城内に頻々と侵入して、秀吉の寵妃を片っ

端から犯してまわったのである。

秀吉に手をふれることが出来ぬとすると、かれにも精神的苦痛をもって報いるほかはない。不思議なのは、文吾がいかに寵妃の控え御殿を荒らしまわっても、紅蜥蜴の一味が邪魔をしないことだった。

いないかと思えばそうでない。文吾が秀吉に近づこうとすると、闇はこれを阻む影と、武器を吐きだしてくる。

常に見張られているのだ。

紅蜥蜴の考えが、どこにあるのか、一向に不明ながら、かれの思うさまに大坂の夜を支配されているのがたまらぬ。

——くそ！　おふりを取り返さねば……

ただに秀吉への復讐を容易にするためばかりではない。

血こそつながっていないが、薄幸の少女への愛が文吾の胸を温めている。お牧が死んだいまは、さらにその思いが強かった。

当歳の五介は、安全な場所で育てている。

さすがに紅蜥蜴の推理は鮮やかに看破している。あの夜、逃亡の途中で寺の境内を突っ切ったが、本堂の床下に五介を置き、小袖には石をくるんで浜へ逃げたのである。

忍法ではもっとも初歩の目くらましにすぎない。紅蜥蜴の輩下忍らは、あまりに単純すぎ

て意表をつかれたのだ。

五介を抱いて、文吾はいったん故郷へもどった。

いや、伊賀はしかし、伊賀者の楽園ではなくなっている。その間の情勢に就いては後に説明する。

文吾が五介を負うて行ったのは、伊賀の南ざかい、竜ノ口、長坂山から南方の一里の地点、大和宇陀郷の室生寺であった。

ここに「火吹き」ノ黒兵衛がいた。もと文吾の家に三代にわたって仕えていた男である。石川の家は武家から入ったいわゆる「入り者」で三代を経ぬと「土地者」とは称されず上忍にはなり得ない。したがって下忍もいない。こうした忍ノ者の家がらを「中忍」とし、上忍衆からは一段下に見られていた。文吾は上忍たらんと志して楯岡ノ道順の弟子となった。お志貴との一件がなく、兄弟子に勝る腕を身につけて、道順から跡目を譲られて漸く、上忍の箔が纏える。

文吾の家に仕える黒兵衛はしたがって下忍ではない。文吾は〝爺〟と、呼んでいたのだが。

この黒兵衛が伊賀を襲った暴戻の血の旋風をさけて大和に入り縁故を頼って室生寺の寺男をしている。ここへ五介を預けたのである。

――五介のことは、まず安心。黒兵衛がきたえ育ててくれる。が、おふりは……おふりは、どこで泣いていることであろう……

紅蜥蜴の正体を突きとめねばならぬ。

おそろしいまでに統制のとれた忍者一党。

そのワザは、他流の長所も執り入れてはいるが、伊賀者にはまぎれもない。といって伊賀者の横の連絡からさぐるのは、文吾の場合不可能だった。師匠を殺し、その女を奪った文吾のことは、伊賀者すべてが知っている。

かれは伊賀者からも疎外者なのだ。紅蜥蜴の素性は聞きだせぬ。

かれ自身の手で捜るしかなかった。

むろん、こころみた。紅蜥蜴の手下を糾明するのだ。

十一月に入って、伊勢に軍を進めて北畠信雄と単独講話に成功した秀吉は帰京するや、従三位権大納言に昇った。その御礼に昇殿したのは月末二十八日。宿所は右大臣二条昭実邸。

霧の深い夜であった。屋形の内外にえんえんと焚かれた篝火が地上の霧を払い、警護の足軽らの具足をキラキラ光らせていた。

文吾の姿が飄然と二条屋形の外に浮かび出たのは戌ノ刻（八時）をまわったところであった。

屋形では歓迎の宴を張っているらしく笙ひちりきの音が洩れてくる。

小路の警護に当たっていた足軽が、目の前を通りすぎた影にはっとなって、

「誰だ」

槍をかまえなおした刹那、衝撃を腹に受けて、うっ！　とエビなりに崩れた。篝火が一基、はたりと消えた。呼吸にして、二つ三つ、再び燃えだしたとき、倒れていた足軽が起き上がって歩きだした。

変身の文吾であった。

築地の小門から悠々と入って行ったが咎める者はいない。車宿からお厩舎にまわる。暫くして出たとき、小路で騒ぎが起こった。

――見つけたな……

計算に入っていたことである。

騒ぎはたちまち門内へ伝わり、あわただしく足軽らが走り回りはじめた。

「御用心、用心、胡乱の者が立ち回りましたぞ」

「殿の御身を！」

「灯を増やせ、固めを厳重にいたせ」

その昂奮を一層煽るように、釣殿からぱっと火が噴きだした。

七

暴勇の信長の後継者と目された秀吉公お仮寝の夜の発火は、あるじ二条殿はじめ家司、護衛

の将士を混乱に陥れた。

文吾は、闇の中でにやりとうす笑いでお厩舎の屋根を見上げた。

闇におのれをとけこませ、邸内を右往左往する狼狽の人影を見まもっていたが、ぴっと蛍火を指ではじいた。

常人の目には火ノ粉が飛んできたくらいにしか見えなかったろう。が、忍者が近辺にひそんでいたなら、〝敵〟を感じるはずである。

――来た！

闇が、その部分、冷えた。

邸内の名状し難い混乱で熱気に蔽われたなかに、その部分だけ、異様な緊迫の呼気で冷え固まって感じられた。

――乗るか？　乗ってくるか？……

文吾は息をひそめ、仕掛けを思った。

釣殿を焼く火明りが対ノ屋の屋根を仄明るませている。その反対側、陰の部分に、にぶく、小さな光りが――それは闇を見るに馴れた梟ノ眼にしか判別出来ないかもしれないが――点滅して見える。

それは、夜鳥の眼か、人間の眼か。

闇が、はじけた。疑問を解く必要に迫られた忍者は、ぱっとこちらの屋上にとび上がろうと

した。

とたん、文吾の手が、ひら、とかえった。ぴしッ、夜気を切って飛ぶ手裡剣。ふりむく間も与えぬ。忍者が、まさに跳びあがらんとして、一ぱいに背が伸びきった瞬間をとらえたのである。

的確に、手裡剣は膝の裏を刺した。

「む……」

たまらずにもんどりうって転がるのへ、ぱっととびつくや、謂うところの「吊し柿」、二尺ばかりの縒り麻紐の中央が拳大の瘤になっている。舌圧えの用具だ。ぐいと口の中に突っこみ、くるくるっと頸を巻く。あざやかな一瞬の仕業で、忍者の声を奪う。

常人なら、術で仮死状態にもできるが、相手が忍者では手間がかかる。四囲すべて敵のこの場合、分秒の遅速が死生の別れ目になる。

四辺に配された他の忍者は、秀吉の身辺に集まっているにちがいない。文吾は、この獲物を小脇に抱えると、闇を縫って走りだした。

時ならぬ出火に周章した武士たちである。門はたしかに固めてあったが、侵入者の警戒の目はむけられて、出る者はろくに調べはせぬ。

「けが人だ」

一言、言い捨てて、忍者を抱えたまま、東洞院の通りから小路に走りこむ。

このあたり、京の中心部ではあったが、応仁の大乱以来、相次ぐ兵燹に焼失して、焼け残った屋形、崩れ築地、茂るにまかせた草の丈ふかく荒涼たる有様で、外へ出てしまえば身を隠す場所に困らぬ。

それでも、慎重を期して、七、八丁も走ったろうか。堀川に面した毘沙門堂裏まで来て、漸く走るをやめた。

「――骨を折らせたぞ」

どさりと草むらに投げだして、

「とっくり締め上げてくれる。きさまらの首領は誰だ、おれの娘おふりは何処へ隠している？場所を聞こう」

「……」

「もとより楽に聞きだせるとは思わぬ。が、容赦はせぬぞ、いたいけな子供を人質にとるとは鬼畜の所業だ、おれも鬼になる……きさまの生命と引き換えだ」

化石したように動かなかった忍者は、このとき、こっくりと頷いている。

目鼻のない黒布ですぽりと包まれているから表情はわからぬ。おふりの居場所を教えるというのか。

猿轡を解いてやると、はっと黒い頭は吐息して、

「娘御の居場所を知りたいか？」

「紅蜥蜴の素性もな」
「教えてもよいが……その前に、先ほどの、おれを誘うた〝眼〟は、何だ、おぬしの秘術か」
「聞いて何とする」
「忍ノ者のはしくれじゃ、死のうまでも納得したい」
「よかろう、魚鱗変眼ノ術だ」
「むう、魚鱗だったか……」
「おれの眼と見まごうたであろう、なまじっかの梟ノ目なればな、ははは、さ、観念して、話せ」
黒い頭はふたたび沈黙にかえった。
と、泣くような、笑うような声が、黒布をふるわして洩れてきた。
「――娘の居所、知りたいだろうが……出来ぬ相談」
「ぬ！　吐かぬか」
「遅かった。死人からは聞き出せまい」
「なに!?」
ぎょっとした。
嗚咽するような声が、とどめを刺すように言った。
「せっかくだったな……」

「きさま！」
「伊賀者のおぬしなれば、われらの根性、存じておろう」
それが最後だった。
がくっと、黒い頭が動いた。咽喉が鳴った。唾を嚥みこんだのだ。忍者はびびッと五体をふるわせて崩れた。
「しまった！」
舌を噛んだのか。
唇のあたりからべっとりと血がにじみ出ている。黒頭巾をむしりとってみた。見たこともない中年の男の顔が苦悶に歪んでいる。白眼を剝いたまま悶絶していた。
食いしばった歯をこじあけてみて、はっと瞠目した。舌に異常はない。血泡に満ちた口中に文吾は手をさしこんだ。
奥歯。
抜けたようにぐらぐらしていた。ぐいと抜きとって、
「――やはり……」
失望のつぶやきを洩らした。
これは獣骨でこしらえた入れ歯だった。中をくりぬいて毒薬を詰めてある。時には密書の持ち運びにも用いる。自ら死を選ぶ場合、舌の先端を使って蓋をこじあけ毒薬を嚥下する。文吾

の真摯さから、逃走の不可能を悟ったのであろう。

この恐るべき統制力を持つ男は誰か？　四十九流の一人であるのは疑いを容れない。

——半蔵か？　服部の……

確証はない。

文吾は暗然として空をふり仰いだ。霧は深く地上を浸して、暗い夜空に星が流れた。

「おふり！」

淡い星の尾に、かれはすがるようにさけんだ。

風盗

一

澄みきった空に夏のような千切れ雲が浮いていた。陽の柔らかさと、涼しい風は、しかしやはり初秋のものであった。尾根にさしかかると、急に道は胸突きになる。国境いの三方岳東方にうねって通っている杣道である。

峠に出ると、ふいに眺望がひらけ、眼下に湖水が満々としてひろがっていた。悠々たる雲の流れがうつって絵にしたいような佳景だった。風は熊笹の斜面をさかなでするように、吹き上げてくる。

山賤の薪とりにという恰好だったが、その男がちらりと見せたするどい目付は尋常ではない。

「――お、あれだな」

見まわした視線が止まった。

峠の道ばたには忘れられたように道祖神らしいものが立っている。半ば雑草に埋もれ、頭部は半欠けになって、かなりの年経た感じだが、その頭のところに、赤トンボが止まっていると見えた。

いや、赤トンボではない。

紅蜥蜴。

死んでいる。ぺたりと貼りついたように四肢を伸ばしている。その頭の向いた方角へ、山賤ていの男はつかつかと踏みこんだ。笹むらが繁茂して雑木林になっている。

十間ほど草をわけてゆくと、

「――来たか」

足音を聞いて、むっくり起き上がったのは、網代笠の法体。行脚の僧侶である。笠は被ったままであった。

「は……」

山賤は片膝ついた。

足もとに瓜の二つ割りが置いてある。昼寝の虫除けであろう。山賤に扮した手下はそれを遠

くへ抛った。ぱっと羽虫や藪蚊が舞い立った。

「――関白はどの辺まで来たか」

「木之本を過ぎまして、おっつけ余村に差しかかりましょう」

「ふむ。れいのやつは？」

「文の字でござりまするな。丈六と赤目がつかずはなれず、見張っておりまする。伊吹山辺にて山伏に変じました」

「放下師から山伏か、隠形には巧みじゃ、目くらまされるな、彼奴の眉目をもってせば、くノ一も容易であろう」

「合点しておりまする」

「安請け合いせぬことじゃ、汝ら一人や二人では彼奴の足もとにも及ばぬぞ」

紅蜥蜴は、こうきめつけて腰をあげた。

雑木林をぬけると羊歯がびっしりと生えた傾斜で青黒い奇岩が山頂から乗りだしている。

紅蜥蜴はその岩鼻から見おろした。

下は木之本から余呉川沿いに柳瀬を経て椽木峠を越えて越前に入る北国街道。おびただしい軍勢であった。街道を埋めつくした軍勢は先も後も見えない。文字通りえんえん長蛇の列だ。

秀吉の北国征伐の大軍であった。

「――大仰なことの好きな関白じゃ。あの、猿めが……ふむ、この手でほそ首ねじ切ってく

れると、ずんと気持がよいであろうが……」

手下は黙っている。上忍と下忍との関係は主従以上である。

「汝らも、そう思うであろうが」

「はア」

「それでは元も子も無うなる。忍者は忍ぶことじゃ、自らを耐え忍べ、福はやがてくる」

「――は」

「文の字もじゃ。なかまがあれだけ殺られて手出しもならぬとは歯がゆいであろうが、耐えろ、これ以上、犠牲を増やさぬことじゃ」

深く一揖するのへ、

「行け、抜かるな」

下忍は、つと膝を起こした。身を翻した。

姿は草に没したが、うすい埃りが一条、岩を転がしたかのように斜面に尾を引いてゆく。

紅蜥蜴は舌打ちして、

「未熟なやつめ」

黒衣が風をはらんだ。紅蜥蜴は逆の方角へ。南へ走った。

狙う者と、阻む者と――二組の忍者につきまとわれているとは、秀吉は知らぬ。

螺鈿銀金具の手輿の上で満足気な表情で四辺を見まわしながら、軍を進めてゆくのだった。

部将らが代わり代わり傍に馬を平行させて、指図を受けている。指図といっても、この北国征伐はもうなかば平定したも同然で、秀吉の北陸行は関白たる威光をしろしめすための示威といってもよかった。

すでに天正十三年の秋。鬼柴田を追って越前へ侵攻した感激の日から二年余月は、秀吉の躍進のもっとも目ざましい期間であった。

右大臣から左大臣に昇ったばかりの二条昭実を傀儡として、まず関白におしあげ、おのれは内大臣に進み、生母に大政所を、妻寧々に北政所の称を下賜されるというふうに、身辺からもがっちり堂上に食い入っていった。

もとより、金の使いかたもソツがない。荒廃した仙洞御所を造営し、莫大な金をばら撒いている。いかに、この工作がお手盛りの極であったかは、二条昭実が左大臣になったのが十二月二十五日、関白になったのが二月十二日で、二カ月足らずの昇進で、さらに、半歳にも足らぬ七月十一日、二条昭実を罷めさせて、秀吉が関白になり上がってしまったのである。

位人臣をきわめたこの僭上の沙汰も、浮浪児上がりなればこその強引さであった。飢餓感が骨のずいまで浸透した者は、満ち足りる、ということを知らない。どこまでいってもものたりないのだ。幾ら食っても、空腹感が残っている。

一武将にして、関白まで昇り得たのは、古今、秀吉のほかには無い。

それにしても、この昇位はあまりに強引すぎた。二条昭実を利用して、順次押し上げる軌道

に乗ったときは、右大臣、左大臣と進む心算だったのだろうが、もうそれも待てなくなったのか、一足飛びに内大臣から関白をふんだくってしまった。

これでは、八百長を暴露したようなものだ。

後に徳川家康が、あれほどの権勢を得ながら、官は信長と同じ右大臣にとどまり（半歳あまりで罷めている）征夷大将軍に任じ武門政治の基礎を敷いたのも、秀吉の愚挙を前車の轍としたのである。

むろん、箔をつけることが、天下統一の野望達成への早道という政策にもよろうが、しかし、秀吉の生い立ちと、時には無邪気なまでの上流へのあこがれを思うと、子供が金ピカをせがむような愚かしさを感ぜずにはいられない。

それはまた、前に述べたようにやんごとなき上臈姫君たちへの年甲斐もないあこがれと一脈通じている。

このたびの征旅も北陸路の平定のほかに、一輪の名花への思慕が含まれていたのである。

二年ぶりの北陸の山河は、目に懐しかった。

破竹の勢いで進撃したときの快感が、山々の姿、河川の音にも甦ってくる。

「――よい天気じゃの、三成」

明るい行手の空に遠い目を投げて、秀吉は終始機嫌がよかった。

「御意」と、三成は媚びるように、「御威光は北陸一円にあまねくひろがっております」

「追従申すな」

「恐れ入りまする。したが、これほどの秋晴れになろうとは、まことに日本晴れという以外に」

「まだ申しておる。治部少では不足か」

「滅相もござりませぬ」

「よい、よい、ははは、ははは」

石田三成は先月、治部少輔に任ぜられ、五奉行の一人に選ばれたばかりであった。

二

秀吉が戦場に出るに甲冑を鎧ったのは、春の紀伊征伐、いわゆる根来攻めで根来寺を焼き雑賀党を殲滅したのが最後だという。

内覧氏ノ長者にして牛車を許され、禁裏に参内するのに兵仗を賜わるという栄に浴してからは、殿上人に同化せんとして遂に甲冑を着ることがなかった。

いうなれば、平服で征駕を進めたこれが最初である。

八月六日に大坂を発し、十一日に越前府中、十八日、尾山に安着した秀吉を前田利家が出迎えた。

「御恙無き体拝し奉り、祝着至極に存じまする」
「大儀大儀」
「御威光をもちまして加能三越すでに兵燹鎮まりましてござります」
「佐々だけじゃな、小うるさいのは」
「左様で。なれど佐々成政も関白殿下の御姿を拝すれば、槍を折るものと存じまする。おそらく両三日のうちに降人たること明白かと」
「重畳、一日だけ待ってやろうかの。余が直々に采配すれば越中なんぞ半日で充分じゃ」
「御意」
「ところで……」
秀吉は金壺眼をぎょろりとさせて、
「姫の姿が見えぬようじゃが……」
「は、それが……先般来、お目もじを心楽しみに致して居りましたるが、昨日より風邪の気味にて……おん前にて卒爾なきよう控えさせております」
「ほ、病いか、それはいけぬの、お匙の者をつかわすほどに、せっかく養生なされや」
「恐懼……」
利家はふかぶかと頭を垂れた。
——忘れていなかったな、執念ぶかいお人だ……可哀想だがやはり観念して貰わねばなるま

い……
利家がそんなことを思っていると、秀吉のほうではまた、
——病気ではしかたがない、今宵はあの柔肌を抱けると思うたのにな……安養院をつかわして、早々治癒いたさせねばな、大坂へ連れて行けん……
と、思いめぐらしていた。
そのひとの名は、
「お万阿」
秀吉は戦術家ではない。乱世に於て成功したのは人情の機微に通じていたからだ。必要とあれば幾らでも頭を下げるし、説得力がある。刃に血ぬらずして版図を拡げ得た所以である。
前田利家も敵対の無駄を説いて服せしめた。麾下にする代わりに見返りも吝しまない。加賀石川、河北両郡を加増して北陸の圧えにし、城は尾山城、のちの金沢城に定めた。
炎の城を脱け出して、利家の陣へ送り届けられたお万阿の噂は秀吉の耳に入り、目通りを許したのである。
まだ幼な顔のぬけぬ十三歳のおとめ——
愁いを知り初めた表情の翳りが、含羞の花の艶めいた風情さえ匂わせて、秀吉の情念をそそり立てたのである。
「北ノ庄ではいかい苦労なことであったろう、大坂へ罷り越されぬか、京にも近く瀬戸ノ内海

は暖かくからだにもよろしい、堺なんども唐物屋が軒を並べて見飽きせぬほどにの」

利家はすぐには返事ができなかった。

人質にとられてもしかたのない立場でもある。だが十三歳のおとめ。実の父の目から見ても類なき美しい娘だけに、秀吉の気持がどこにあるか、欲目でなしにわかる。

秀吉の好色ぶりは、大名らの間でも恐慌を巻き起こしている。

「お言葉、姫ともども感泣のきわみにござりまするが、何分、心身の痛手少なからず、山坂越えての旅も気づかわれますゆえ、一年ほどは休養とらせたく存じますが」

と、遠回しに言葉をそらした。

秀吉にもその意味はわかる。ここで怒ってしまっては元も子もない。まだ十三のおとめだ。今日明日に急がなくてもと思い、

「なるほど、父御のもとのほうが安らぎにはなろう、ならば一両年のうちには、迎いに参るぞよ、美しゅうお待ちあれ」

念をおして凱陣していった。

二年のうちには秀吉は死ぬかもしれぬし、他の女にも心を移すだろう。お市さまのおもかげを移したお茶々などは、もっとも狙われるところだ。お万阿にはその安心があった。

色には執拗な男である。多忙な間にもお万阿のことは忘れず、折りふし小袖類や化粧道具などを贈ったり、利家の顔を見ると、お万阿の安否を訪ねたり、いっかな忘れる様子はなく、利

家ももうあきらめていた。

しかし、お万阿にしてみれば、そう簡単にはあきらめきれない。

あれから二年半、お万阿は前田家の菩提寺に十蔵を弔い、墓参を欠かさなかった。

瞼に残る角前髪の凛々しい十蔵と五十近い秀吉ではあまりに違いすぎた。秀吉は敵だ。十蔵をだまして捕えたことも聞いている。極楽と地獄の差であった。

政略のいけにえに供しようとする父への、当てつけもある。

――若いうちのことだ、すぐ忘れよう……

利家はたかをくくっていたが、この年月を経てなお、お万阿の気持は一向にあらたまる様子がない。

関白到着を迎えなかったのもむろん仮病である。秀吉が越中に赴いた夜、とうとう利家はお万阿に決意を強いた。

「――関白どのじゃぞ、女の身としてこれ以上の幸福はない、の、聞き分けてくれい。そなたさえ決心してくれたら、われらが一族、多くの家来どもも安堵する。そなた一人の肩に前田家の興廃がかかっているのじゃ……」

縷々として利家は口説いた。

お万阿は黙っていた。眉の毛ひとすじ動かさず、伏目になった視線は、何をとらえているのか、どこを見ても十歳のおもかげを描いているかのようであった。

ややあって、お万阿は顔をあげた。
依然として、遠くを見るような虚ろな眼で、
「わかりましたわ」
と言った。
その片頬には、大人びた自嘲の笑みさえきざんで、
「――お市さまもそうでした。どうせわたくしたち女子に生まれたからには、そうなるような運命でございますね……」
「お万阿、そちは！」
「わかりましたと、申し上げましたわ、父上」
「……」
「わたくし、関白殿下のお側へまいります」
丁寧に一礼して、お万阿は父の前を離れた。廊下へ出ると、待ちかねたように、涙が吹きこぼれた。
すると、奇妙な嗄れた声が聞えた。
〈泣くことはない〉
え!? と、お万阿は顔をあげた。泣き濡れた眼であたりを見まわした。広廊下には二間おきに灯がぼんやりとうつろな光輪を描いているだけで、人かげはない。

手燭をかかげて先へ立った侍女には、その声は聞こえなかったらしく、けげんな面持で姫を見上げた。
姫の耳に、その声はまた聞こえた。
〈佐久間十蔵が逢いにくるぞ〉
「え!? 十蔵さまが？……」
思わず口走った。
怪しの囁きは、しかし、それきりだった。広廊下には、秋の夜の冷気がたゆとうて深沈と静まりかえっていた。

三

秀吉はにこりと相好を崩して、
「ほう、病い癒えたと申すか」
「はい、軽微な気鬱胸塞にて、病いと申すほどのことではござりませなんだゆえ」
医師曲直瀬道三は謙虚にこう報告している。
越中からもどった秀吉を待っていた朗報である。
尾山着到の翌々日、加賀倶利伽羅峠を越えて八幡嶺に上り越中一国の形勢を観望し攻撃の策

を定め、翌日仮城を構築してこれに移ったが佐々成政はすでに戦意は喪失していた。剃髪染衣し北畠信雄にすがって降伏してきたのである。

すべては順調だった。日輪は秀吉を中心に回っているようであった。順風に帆をあげての北海行といおうか。秀吉は、大坂城でではなしに、異郷の宿で、お万阿の肌を識ることに北国平定にまさる喜びを感じていた。

加賀一向門徒衆の本拠であった尾山御坊の跡に築かれた、この城は佐久間盛政が改築して住んでいたところである。本丸新御殿が、秀吉の宿所に提供されていたが、さしもの広い城内もおびただしい近臣の軍勢であふれ、えんえんたる篝火は城の内外を、さながら白日のごとくに明るませていた。

南殿の前の能舞台では夕景から、絢爛たる申楽能が演じられることになり、秀吉麾下の面々には盃を賜わって酒宴が張られた。

地上ではほとんど感じられない風も、高みに昇ると、耳のそばを唸り梢を騒がせる。

無数の篝火の火の海の中に、突兀とそびえ浮かんだ尾山城を眼下に見下ろす卯辰山中腹に忽然黒影があらわれた。

二つ——

筒袖たっつけ袴に忍び刀。二人とも頭巾を手にしている。

「——こうして見おろすと、篝火もきれいなものよな」

「眼の法楽をしている場合ではないぞ」と、背の低いほうが、せかせかした口調で、「大事な今宵じゃ、れいのやつが近づいているというではないか」

「さればさ、城内にはわれらのなかまが十人も忍んでいるわい、かれらにまかせておけばよい。少々骨休み、せぬか」

「安心は禁物じゃ。外回りあってこそ内にての働きに疎漏なかるまじ」

「だが、文の字は常に一人じゃ、何ほどのことがあろう」

「万に一つということがある」

「彼奴になかまは居ぬて。師匠を斬って女をさらって逃げた奴、誰がなかま扱いするものかな」

「それにしても、たった一人の彼奴を、どうして打ち殺してはいけぬのかな。師匠の考えがとんと解せぬて」

「それさ、若造め一人に、われらはいつも引きずり回されているような按配だ。莫迦莫迦しゅうて話にならぬ」

「悪戯小僧のお供をしているようなものじゃ、打ち懲らしていけぬとなると、とんと扱い難いわい」

「師匠には師匠の深いお考えがあるそうな」

「そりゃそうであろう、われらの師匠じゃものな」

いつも、どんな疑問も、それで納得してしまう。下忍は上忍の手足にすぎない。納得とはかれらの場合、理解ではなかった。命令に従属することが存在の意義といえた。

「――舞台は始まったであろうかな」

小作りのほうが言う。二人は歩きだしていた。がっしりと上背のあるほうが、

「申楽か。翁が始まっていよう……トウトウ哆囉利々々囉、タラリ阿利迦囉々利止布、ははは、千理耶哆囉利々々……」

「叱っ！」

制すると同時に、さっと頭巾をかぶった。

多言は要しなかった。背高のほうも、ならった。頭巾をかぶると目も唇もすぼりと隠れてしまう。一塊の黒い固体となり、その固体も闇に沈むように溶けた。

千年杉の急坂を、転石かと見えて――矢のように駆けおりてくる黒影があったのである。

――何者？

――敵か、味方か？

二人は、頭巾のうちから、目を光らした。

目鼻の部分は紗になっていて、剝きだしに変わらぬ。否、闇を見透す梟ノ目をかれらはそなえているのだ。

四

その梟ノ目が見まもる怪しの影は、ただ一つ。速い。

常人の目には、まやかしか、物ノ怪にしか見えまい。それだけでしかしかれらには看過できぬ相手だった。

忍ノ術、坂落としの快速。

――何者か？

その黒影は、草の陰の目を知る由もなく、凄まじい速さで駆けおりてゆく。

「――見たか」

「見た」

背高はうなずいた。

「伊賀じゃ」

と、呻いた。

「まさしく……したが、何処へ？」

「きまっておる」

つと、身を起こすのへ、

「文の字のなかまか」
「そうとしか思えぬ」
「なかまがいたか？　いないはずだぞ」
「阿呆。問答しているところかえ、奴、遣るまいぞ」
むささびのように――
影が闇にはねた。虫の音がやんだ。木ノ間がくれに走り出した二人の目は、十数間のかなたに、〝怪しの影〟を見ている。
忍者の非情さは、目的のために感情を殺すところにある。紅蜥蜴――と称する首領が文吾を殺してはならぬと命じているのも、文吾のいのちを大切がる故ではない。文吾を生かしておくことが、かれにとってプラスであるからだ。
邪魔者は斬る！　それが、真に敵であるかどうかは、問題ではない。
味方でない、と見た以上、忍者の存在は許せなかった。
二人は走りながら、左右の手に手裡剣をつかみだしている。
影。走る影――その闇がふいに塗りこめたような漆黒に変じて、立ち木もその男の影もかき消してしまった。
「――気づいたぞ」
「黒霧じゃな」

「払え！」
頭巾の下半面をたくしあげると、ぶうっと烈しい呼気がすぼめた唇から吹きだされた。
黒霧――黒、ともいう、桐灰に粉墨など各種の混合粉末による一種の煙幕。ふり撒いたり、火薬と混じて炸裂させ、あるいは竹筒で吹き出すなど、方法は多様だが、黒い幕を張って目を晦ます目的は変わらない。
流派によって多少の差はある。これはしかし、伊賀の流れ。
矛の発明は盾を生んだ。刀槍は甲冑を創造した。秘具、秘術はまたそれを破る術を編みだす。
黒霧を払う、吹出しの息も練達の者は拇指ほどの枝を折るという。いま、二人の紅蜥蜴の輩下は、前面に張られた黒霧を――
――猪口才なわざよ……
忍者の目をくらますには、あまりに児戯に類している、とたかをくくって、自慢の息を吐いて霧の中を突走った。むろん、やみくもには走らぬ。忍者刀を鞘ごと抜くように前面に突きだして走るのだ。
術に応うるに術。だが、その影のわざが、初歩的な黒霧遁法と甘く見たのが大いなる誤算だった。
勢いこんだ小兵の足が、澱んだ霧の底に宙を踏んだ。
「あっ!?」

崖だ——

黒霧は崖を隠すための目くらましだったのだ。と、気がついたときは、小兵のからだは一回転して崖下に叩きつけられる——

さすがに忍者、熊笹の上であざやかに、とんぼ返りして立つ。刹那、熊笹にひそんだ影の手が、しゅっと忍者刀を抜きとった。抜きとると、そのまま胴薙ぎにするのとほとんど同時だった。

背高のほうは、なかまの転落を見て、崖鼻で辛くも踏みとどまる。

その胸に血ぬれた忍者刀が飛んだ。

さけた。ぱっと蝙蝠が舞うように飛びかかってきた。その手に、流れとんだ忍者刀を摑みとっていたのを見てもかなりの手練れとわかる。

が、その降下もかれの意志は半ばまでだった。途中でかれの息は絶えた。飛刀が奪われたと知るや、影のくり出した手裡剣が二つ——眉間と心ノ臓に刺さっていたのである。

「——もろいの」

その影は闇に白い歯を見せた。

すっかり息絶えた二人の頭巾を無造作に引き剝いだ——

五

発頭の「翁」が済んで脇能は神物の「相生松」が始まっていた。

〽抑これは九州肥後の国、阿蘇の宮の神主友成とは我がことなり、我未だ都を見ず候ほどに、此の度思い立ち都に上り候……

秀吉は盃を含みながら、

「京見物に肥後から来ては驚くであろうな」

へらへらと笑った。

「あんなに荒れているとは思うまいでの、ははは、花の都の昔にかえすよしもがな、か」

「御威光のもとに六十余州の平安を喪心から希って居ります」

前田利家はさも感じ入ったように追従した。

「左様、天下平安、京はもとより津々浦々、花を愛で楽しむような天下を作るのが余の望みじゃ、こなたにも、随分、力を貸して貰わねば覇業はなり難い」

秀吉は相手をおだてることも忘れない。

「恐懼」と、利家はまた頭を下げた。「粉骨砕身、関白殿下の手足となり得なばこの身の果報、これにまさることはござりませぬ」

「――待ち遠しいな……」

ふっと、秀吉はいった。

諸将のてまえ、申楽能を鑑賞しているが心はよそへ遊んでいる様子。天下平定の夢見ているようでそうではない。

お万阿の肌を愛撫しているのだ。右手の三間ほど離れたところにいるお万阿をちらちら眺めている。

関白ともあろう者がいかに想い焦がれたとはいえ寝所を急ぐこともできないのが残念だった。

――退屈じゃな、申楽能は。辻の放下師のこきりこ唄のほうがよっぽど面白い……

同じ申楽でも、狂言なら好きだが、世阿弥の創始した本格の立方で、五番物の順序がきまっている。この日の番組は、発頭の「翁」にはじまり脇能「相生松」、脇狂言の「末広」、二番目能は修羅物の「箙」、二番目狂言の「居杭」、三番目能「草紙洗」でこれは髪物――というふうで、相生松は後世では「高砂」と目題が変わっているが、いわゆる神事に属して面白味は少ない。今日でいうところの複式能だから中入りがある。住吉の尉がひっこんで住吉明神になって出てくる。後シテである。

この半世紀ほど前までは能舞台は背景の鏡板もなく、粗末な四方屋根の吹きぬけだったが、近ごろ後世のような豪華幽雅な方三間の舞台がもてはやされるようになっている。これにつづく橋懸りは初期のままのそり橋である。

能役者らの支度部屋は、橋懸りから廊下を通って突き当たりの小部屋。板敷きのつづき間であった。

いましも前シテの尉が、扮装を代えて、後シテで住吉明神になって出てくる――

控え部屋から橋懸りまでの廊下、仄暗い五間ほどのところを来かかったとき、ぱさっと、黒い煤が落ちるように落ちてきたものがある。

「う……」

能役者は一瞬、つーんと両眼に痛みを感じた。

眼に何か刺さったような痛みで、目がくらんだ。よろめいたところをはげしい当て身をくらい、声もなく崩れた。

そのからだを、ずるずると板戸のうちへ引きずりこんだ者がある。五間の廊下に沿ったほそ長い小部屋は弓矢が整然と並べられていた。城内五カ所の武具蔵のほかに、「御床几回り」、素破ッ大事の際に近臣が執る弓矢置場所であった。

「悪いが、眠っていて貰おう」

文吾はこういい黒装束の上に、手早く引き剝いだ能衣裳をつけはじめた。

忍法七方術、能役者になりきるのもあざやかなものだ。

「――今宵こそ、関白めを！」

舞台の上から、見所の秀吉を討つ。そのための火術も用意してある。

変装は完璧だし、なまなかの能役者以上の演技は見破る者がいない。

住吉明神の後シテと見るうちに、鼓に合わせ、笛に合わせ、火薬を投ずる隙をうかがっていた。

黒ゆり姫

一

見所の一段下がったところで、お万阿は御能を見まもっていた。

秀吉が何やら猥雑な表情で君側や父に囁いたり、ちらちらこちらを眺めたりするのは頬に痛いほど感じていた。

痛いというより、むず痒い。爬虫類が這いまわるような無気味な感触である。

——いやらしい……

どうせ人身御供にあがる身。もうからだを投げだすことについて覚悟はできていたが、その

〝殺戮〟の刻を忘れようとした。考えまいとした。

だが、広廊下で耳にした声――

〈佐久間十蔵が逢いにくるぞ……〉

その、異様な風の吹きぬけるような忍び声は、お万阿をぬけ殻のような虚脱状態からよみがえらせたのである。

あの声は幻聴だろうか。

幻聴とは思えない。誰かが、そっと告げてくれたような気がする。

神のお告げだろうか。

十蔵のその後は行方不明だ。武功といいあれほどのお方だから、生きていれば必ず名が出るはずとは思うが、秀吉の鼻息を窺う大名たちが召し抱えることはない。

遠国で士官してお出でになろう、と、思った。

すると、あの声は？

能舞台に目を向けていながら、心はとつおいつ十蔵のことを思い迷っている。

――十蔵さま、どこにいらっしゃるの！

あのお告げが事実なら、そこらに来ているはずだ。お万阿の処女肌は、もうあますところ、一刻とない――。

――来て下さったのなら、万阿を助けて！　連れて逃げて下さいまし……

二年半、信じ、そして虚しかったことを、お万阿は祈るような気持で思った。

こうやってぬけ殻のような身を生きているのも、あの日を命日として菩提を弔いながらもなお、生存を信じているからだった。

――十蔵さまは、あたしを残して、死んだりなさらない……

一途に信じている。

十蔵の死が、はっきりするまで、死ねない。誰かが、この目で見たといい、死水をとったと聞くまでは、死ねない。

落城寸前の北ノ庄城内の暗がりで、熱い抱擁と口づけを交した夜の記憶はまだ生々しい。

思いだすたびに、お万阿の肌はかっと熱くなり、心ノ臓が破れるかとばかり動悸がはげしくなる。

あの夜、お市ノ方の三姫を秀吉のもとへ送り届ける役目を命じられなかったら、二人のからだは一つになったはずだ。

こうした悔いは残らなかったろう。死ぬにしても生きるにしても、この世で初めて身も心もまかせきれる〝愛〟を感じあった二人が生木をひき裂かれるような別れかたをしたのだ。

悔恨は深かった。柴田勝家やお市ノ方までがうらめしい。いや、あの高慢ちきな茶々姫姉妹がうらめしい。

思った通りお茶々は、秀吉の愛妾になったという。

お茶々の生活ぶりは想像に難くはない。お万阿は侮蔑した。お茶々が、ほんとうの愛というものを知らず、老醜の秀吉に抱かれて処女を与えたであろうことを。

——あたしには、お薬があるわ……

お万阿はある秘薬を思い浮かべた。

おのれを忘れる秘薬であった。お万阿がそれを知ったのは、つい三月ほど前である。

侍女たちにせがまれて犀川で舟遊びした折り、偶然に、乳母に逢った。

乳母は彼女が乳離れすると、暇を出されて城を出た。何か利家の逆鱗にふれたことがあったらしい。豪家大名の家ではお血すじの乳母に上がった者は生涯扶持を受けて厚遇されるのが普通だったのである。

「ぜひともお話ししたいことがありまする」

侍女の目を盗んで乳母は言った。

「母さまの御遺言を」

その言葉がお万阿の心を動かした。父の譴責を受けた者と、ひそかに逢うことは許されなかったが、菩提寺にゆく日を教えた。

「ではその日に。お渡ししたいものがございます」

と、乳母は囁き、その日はさりげなく別れた。

菩提寺では休息の時を利用して逢ったとき、お万阿は母の意外な事実を知らされたのである。

二

驚かれますなと、乳母は前置きして、

「あなたさまは、実は殿さまのお血すじではありませぬ……」

「え!?」

「御不審ごもっとも。このことは、わたくしのほかは誰も知らぬこと。と申しますのは」

母が死ぬ間際に、彼女にだけ洩らして、万阿が成人した暁に、伝えておくれ、と言い遺したのだという。

乳母が語ったのは、およそ左のようなことである。

母は近江の浅井氏の遠縁に当たる地豪の娘だったが、織田信長の近江攻めの時、利家によって劫掠された。

宮中に仕えたことのある祖母を持ち、格式と厳しいしつけを身につけていた彼女が死を選ばなかったのは、討死した夫の子を妊っていたからであった。

——この子のために生きよう、この子を生まねば、亡夫に申し訳ない……

女は強い。

その決意が、利家の前にからだを投げさせた。

そのとき、母は家伝の煎薬を嚥んだ。

立山連峰、雪渓の秘境に人知れず群れ咲く黒い百合の花。

その根と南天燭の実に、繊草といま一つの名知れぬ木皮を併せ煎じたさまし汁に芥子の粉末を加えたものであった。

この併せかたの加減が難しい。家伝の秘薬だけに、処方は口伝でのみ、享けつがれている。

煮汁は五体を痺れさせ、意識を朦朧とさせる。

浅井家は近江の名門である。武門の常として、戦場での傷の治療には荒い方法がとられる。大けがを負って敗血症に至る前に、患部をえぐり、切断して生命をとりとめるために、この麻酔薬が発見されたということだ。

これはしかし、薬というより劇薬で、ある意味では毒であった。一合の水を三勺に煮つめて飲み、量を増やすと生命にかかわるという。

母は利家にからだをまかせる間、亡夫へ思いを馳せていた。

いまわしい小半刻の間を、母は放心して過ごした。弱い女の、なし得る復讐であった。薬の効目がうすれ、醒めたとき、屈辱の時間は去っていた。

こうして母は、彼女を生んだ。

三歳の時、母は歿った。利家の出陣中であった。母は、乳母に遺言したのである。

利家の子でないこと、黒百合の根が彼女の生涯に役立つであろうこと——

利家が大名としてのし上がるにつれて、お万阿の身にもやがてそれが必要となる運命を見ぬいていたのである。

お万阿は、乳母から色褪せた紙包みを貰った。名知れぬ唐渡りの木皮の干したものであった。黒百合も珍しい植物ではあるが、金沢で入手に難くはない。

そうして、とうとう、それが必要な刻が来たのであった。

十蔵が助けに来てくれることを念じながら、もし、あのお告げが幻聴だとしたら、黒百合秘薬によって、おのれを仮死させて秀吉の犠牲となるつもり。

落ち着いた横顔を秀吉に向けていられるのも、そうした、ひそかな復讐の処方があるからにほかならなかった。

舞台では神事の「相生松」が進んでいた。

見るつもりはなく、お義理で坐っているだけだから、心はそこにはなかったが、能役者たちの練れた所作と、主題の深さが、いつか、お万阿の心を摑み、舞台へ惹きこんでいた。

ストーリーは、神主の友成が肥後から京へ上る途次、「——又よきついでになければ播州高砂の浦をも一見せばやと存じ」浦に着くと松の木陰の落葉を掻く尉（老翁）と姥に会う。神主は尉に高砂の松とは何れの木かと問えば即ちこの松と教えられたが、摂津住ノ江の松と、かく地を隔てながら相生の松とは何故かと重ねて問えば、この尉は住吉の者、この姥は高砂の者、非情の松にも相生の名ある如く、尉と姥も所を隔てて住めど年久しく通い馴れて、松もろとも

に相生の夫婦であると語る。

尚、問われるままに尉は相生の松のめでたきいわれ、古今和漢の松の神秘などを語り、我らは相生の松の精なれば、また住吉で待とう、とて海人の小舟に乗って沖へ出る。

やがて、友成も小舟に乗って住吉へ渡れば松の精現われて夜の鼓の拍子を揃えて神かぐらあり、住吉の神も影向あって千秋万歳を祝う。

十蔵が尉でじぶんを姥に置いて、お万阿はその夫婦愛の美しさに感動と共感をおぼえていた。

――夫婦の姿はああなくてはかなわぬもの……

十蔵と夫婦になれば、共白髪、二生三生までも変わらぬ契りを、と思うほど、いつかその目にうすく涙がにじんでくる。

――万阿は生まれながらに、免れ難い宿命を背負うております。所詮、添いとげられぬものなら、この心だけでも、夫婦になりましょう。どこでお出でになろうとも、万阿の気持はあなたさまには通じるはず……

お万阿は十蔵のおもかげへ哀しく訴えるのだった。

三

〈……〉

ふっと、背後で声がしたように思った。秀吉は気がついた。あの声だ。

忍者の含み声。大坂城中に侵入した紅蜥蜴の囁くような脅かすような声。

あわてて、あたりを見まわした。が、紅蜥蜴は見当たらぬ。

――気の迷いか？

と、思ったとき、

〈……殿下〉

聞こえた。

〈御用心を……〉

「ん？……」

〈お静かに……声を出してはなりませぬ〉

無礼な！　と叱りつけようとしたが、唇が重く、咽喉がつまったように声が出なかった。

秀吉は盃を持ったまま、すーっとうしろへ引き倒されるような気がした。

――ぬッ、何をするか!?……

さけんだ。さけんだはずだが声にならなかった。

〈お静かに、殿下をお救いするのでござる〉

その声も、語尾は夢うつつに意識に霞がかかった。

見所は暗くはない。玉砂利を敷きつめたあたりの四方の篝火の余照も受けていたし、短檠の

灯も左右にある。白紙でかこった灯のゆらめきで影が揺れ、その微妙な暗影が、忍者のつけ目だった。

変幻仮姿の術も、所詮は時と場所の光と影を自家薬籠中のものとしての応用である。

仮姿はおのれのみならず、人にもかける。

この場合、他の者の目には、秀吉が動いたとは見えぬ。

影が、動いた。

あたかも、魂だけが体外へ飛び去り、ぬけ殻だけが鷹揚に胡坐して盃を手にしているように見える。

が、これは、秀吉ではなかった。

紅蜥蜴の輩下、某が、あたかもぬけ殻となって入れ代わっている——

文吾が後シテに変じたとき、その意図を察したのだ。とは知らぬ文吾の住吉明神は、ぱっと手を翻した。

黒い礫が飛んだ。

誰の目にも止まらぬ速さだ。かっと閃光が秀吉の膝前で炸裂した。轟然たる音響が御殿をゆさぶった。

四

幽玄の世界から一瞬に鼎の沸くが如き騒ぎになったなかに、

「御安心なされい、殿下は無事でござる」

誰のものともしれぬ声が、黄濁の煙の中から聞こえた。

「けが人はない、安心なされ」

つづいて、利家はじめ近臣らがほっとしながら叫んだ。

「鎮まれ、鎮まれ」

「殿下は御無事じゃ、それより狼藉者を」

「狼藉者を捕えろ！」

「能役者を捕えい」

「手にあまらば斬れ、逃がすな」

「そうだ、住吉明神じゃ、奴を！」

はっと、さむらいたちは我にかえった。肩衣をはねあげ、鯉口切って能舞台に殺到した。

が、すでに、そこには住吉明神の姿はなく、衣裳だけが虚しく脱ぎ捨てられていた。地上の騒ぎを冷然と見おろしている目が、天守の屋根にあった。

「――仕損じたか」

影は無念げに呟いた。

文吾である。

「まさか、変幻仮姿で秀吉のぬけ殻とは気づかなんだ……ちいッ、どこまで邪魔を入れるやつか」

あの紅蜥蜴であろう。秀吉に雇われてその身を守るようになったとしか思えぬ。戦勝の気の弛みを狙ったつもりだが――秀吉の気は弛んでも、警護の忍者の眼は光っていたのだ。

「ちぇッ……また出直しか……や？」

呟いた語尾を口の中で噛みころした。

夜気に濡れた屋根に、ふっと影が動いた。猫が横切るような――

思わず手裡剣をつかんで身を沈めたとき、

〈若よ……〉

影は言った。

〈わしじゃ〉

〈？……黒か〉

〈左様〉

するすると屋根の上を滑るように近寄ってきた。

〈――黒兵衛でござります〉

〈なんとして、これへ〉

〈案じられましたでな。来てみると案ノ定じゃ〉

ふふふふ、と語尾は奇妙な含み笑いになって、

〈おやりなされたな……〉

〈仕損じた〉

〈彼奴ら、なかなかの者どもでござる。住吉明神が舞いなかばに背をむけたときに、変幻仕った〉

〈なるほどな〉

〈ふふふふ、まあよろしいわな。てまえはお止めするつもりで参じましたじゃ。おっと、お怒りなされな。おふりさまとやらの身を考えてやらねば、哀れじゃで〉

〈うむ……関白にどうしても一矢むくいたい気持が、時折り、おれを夜叉にするのだ〉

〈無理もない、無理もない。したが、まず、紅蜥蜴とやらの始末が先でござりますがな。ホイ、てまえも広言できることじゃないて、これを……〉

懐中から摑みだした黒頭巾。袋ようの目穴もないやつ。

〈なんとして？〉

あの山で、と、顎をしゃくって、

〈二人、な。あやまって殺してしもうたわい、ま、これを持っていれば、役に立つこともござりましょうて〉

うなずいて文吾は頭巾を懐中にした。

黒兵衛はうれしそうに、またふふふと笑った。笑うとこの男の顔は能面の猿べしみそっくりになる。歯が欠けているので妙な声になるのだ。

年齢は五十すぎているはずだが、本人も嘘ではなく、正確な歳を知らない。

黒兵衛は地上を見おろした。

篝火は美しく点々と地上に火の渦巻き模様を描いて見えた。狼狽と不安のさめやらぬ、侍たちの呼び交う声が、うおーんと遠い潮騒のように上がってくる。

「さ、もどりましょうぞ」

黒兵衛はまともな口調になって、

「てまえが囮になって蜥蜴どもを北へ回すゆえ、若は南へ」

「若、はよせ」

「ふふふ、怒りなされな、怒ると術が甘くなる。若よ、わしにはいつまでも若じゃ。さ、関白がことはあきらめさっしゃれ、たまには五介の顔を見に戻って下され」

「わかった、去ね」

「行きますぞ」

黒兵衛のからだはするするっと、屋根瓦をすべった。

文吾も反対側へ——

だが、かれは、南方へ城外へ出るのではなかった。屋根から屋根へとムササビのように跳び渡ると、ふたたび御殿へ忍びこんだのである。

五

「殿下のおそばを」

「胡乱なやつを近づけるな」

近臣が刀の鯉口切って十重二十重に守り固める。

能役者の詮議、曲者の捜索、直臣、陪臣、利家の家中は一番仰天した。歓迎の予定はすっかり狂ってしまった。

お万阿には幸いだった。

——十蔵さま、どうぞ逃げて……

秀吉を狙うほどの者、佐久間十蔵にちがいないと、お万阿は思っている。

この騒ぎでは、秀吉も動顛して伽は申し付けないだろう。一日でも助かったようである。

父はもとより、上下あわてふためいた騒ぎのさまが、手にとるように聞こえてくる。お万阿

は、いい気味だと思った。

とろとろと眠りかけたとき、

〈姫……〉

と、呼ぶ声。

〈姫よ……〉

夢の中のようであった。うつろに、お万阿は、はい、と返事している。

〈姫よ、そなたに逢いとうてならなんだ……〉

「え？……」

〈おれだ、姫……〉

「あなたさまは……」

と、まだ夢うつつに、

「十蔵さま？」

〈そうだ、十蔵だ、そなたに逢いに来た……〉

「うれしい」

手を伸ばす。そこに固い男の腕があった。

細めた短檠の灯がゆらいだ。香を焚きこめた部屋の中は晩秋とも思えぬ、温かい夜気がこもっていた。夢うつつの境に、お万阿は花園をさまようような心持になっていた。

ひしと男の胸に抱きしめられたとき、彼女は、いつか、北ノ庄城内にその身があるような錯覚を起こしていた。

邸内のざわめきはそのまま落城前夜のざわめきとなってお万阿を包んだ。

うっとりとなって、花びらの唇を寄せてくるお万阿姫に、文吾はふと、ひるみをおぼえた。

佐久間十蔵に仮姿して、万阿姫を犯そうとしているおのれが、ふいに、うとましく汚らしいものに感じられたのである。

——秀吉への復讐のためだ！……

と、ひるむ心に叫ぶ。

——この女は、今宵秀吉のものとなる運命にある。秀吉が二年もの間待ちのぞんでいた処女肌をおれが奪うことは、秀吉への痛烈な復讐ではないか！

お茶々も奪った。この姫も。

二人とも北ノ庄城に在ったことを思えば奇しき因縁だが、そうした感傷に手をゆるめるには文吾の気持は荒んでいた。

ただ、お万阿があまりに、十蔵と信じていることが、かれの冷たい心をも、ゆるがしたのである。

文吾は、万阿姫のからだを突き放すようにして立ち上がった。

そのとき、変幻の術は消え、万阿姫はつぶらな瞳を大きく瞠った。

「おまえは？……」
「……」
「だれ……どうしてここに」
姫の無邪気なおどろきと不審が、文吾を苦笑させた。
黒装束ではない。どこで手に入れたか、派手な模様の平服で髪も前髪がある。袖には匂い袋、髪には香りのよい油。うすく化粧したおもても凛々しく見える。身を変えるには〝十蔵に髣髴させる〟ことが必要なのであろう。
「許せ」
と、かれは言った。
万阿姫の純心に負けた感じであった。
「十蔵ではない」
「……」
「十蔵ではない。わかるか」
「――あい」
「忍び、じゃ。許せ、そなたを犯そうとしたのだ。やめた」
淡白に言い捨てて、去ろうとする。
その背へ、

「あ……お待ち」
万阿姫は惹かれるように、声をかけていた。

六

侍女はあらかじめ術をかけられているのか、起きてくる気配もない。
「何か」
と、ふりかえった文吾へ、すがるような眼がひたと瞶めて、
「どこかで、逢うたことがあるような」
「北ノ庄城内だ」
「おお、思い出しました」
ぱっと素直に喜悦が頬にあふれて、
「姫が自害しようとするのを、止めて助けてくれたのは、おまえでした」
「十蔵に頼まれてのことだ」
おせっかいをした、と言いたげな文吾であった。
「あのとき、礼を申すひまもありませなんだ、あらためて礼を申します。それにしても十蔵どののこと、存じて居るのかえ」

「知らぬ。玄蕃允を助け損じたときにも手をかして逃がしてやったが、それだけだ。その後は、知らぬ」
「では、生きておいでかも」
「知らぬ」
お万阿にはまだ十蔵のおもかげを文吾の上に重ねたように、うっとりと目をうるませて、
「忍者どの」
「……」
「十蔵どのにゆかりあれば、もう一度、十蔵どのになっておくれ」
「もう一度？」
「そう……そうして」
ぼうっと白いおもてがまた紅に染まって、
「そうして……おねがい」
万阿姫は何を望んでいるのだ。おとめの複雑微妙な思考は忍者の透視の術をもってしても端倪すべからざるものだった。
忍者のかける術に、自ら浸ろうとして、半眼にほそめ、半息に可愛い唇を閉じ、両手を前に出している。
文吾はためらった。が、さっきとは違ったあらたな感情が男の胸にさざなみを立てていたのも事実である。

変幻仮姿——その術を意識するまえに、この薄幸の少女に、不憫の思いがしとどにこみあげるのを、圧えようがなかった。
「十蔵さま……」
朱唇があえいだ。
「これに……」
何が、そう応えさせていたろう。文吾はつつーっと滑るようにもどり、万阿姫の手をつかんだ。
と、引かれたかのように、少女のからだは胸へ崩れてきた。
「ああ……十蔵さま」
「……」
「待ちかねましたえ」
「姫！」
「早く……あなたさまのために、大切に大切に守ってきましたの、早くあげたい。姫のこの身は、十蔵さまのもの」
「姫！」
愛しい。心から感じた。さほどまでに思うているのなら十蔵になろう。今夜だけ、この四半

刻の時間を、十蔵になりきって、歓を尽そう。
文吾は、十蔵の心を得た。十蔵になった。
「――姫、この身も、そもじに逢いたかった、いま、この場を、北ノ庄城内とこそ思うて下されい」
「あい……早く、お召しのないうちに」
「おお！」
文吾の、いな十蔵の手は、感激にふるえながら、おとめの扉をひらいてゆくのだった――
ほとんど、苦痛はなかった。
すでにして、濡れていた。女の扉は、年ごろ、思いのままにひらく。自然のいとなみは耐えられぬほどの苦痛はもたらさない。
待ちに待った夜の、あふれるばかりの情感が、灼熱した十蔵をしっとりと受け入れて、身内から噴きあげる歓喜が、羞ずかしい声をほとばしらせてしまう。
おちてのち――
その生涯の情熱のすべてをこの初のちぎりに燃焼し尽してしまったように、晴れやかな表情で、お万阿は言った。
「これでいいの、これで……十蔵さま、今宵のこの喜びは、万阿は一生忘れませぬ」
「姫！」

文吾も感激のあまり、仮姿の立場も忍者の身も忘れてさけんでしまう。
「姫、拙者とともに逃げよう。これから、すぐに」
「――いいえ」
お万阿は静かにかぶりをふる。
そのおもては、女になった喜びの紅潮を残して、運命に従順であろうとする、おだやかな笑みさえただよわせていた。
「万阿の気持は、十蔵さまと生涯をともにしたいと思いまする。さきほどのお能を見ているあいだも、それを夢に描いていました。でも、こうした喜びは、一度だけでいいのです。一度だけだから、生涯忘れない」
「……」
「どこに行っても、誰に抱かれても、万阿の心の夫は、あなたさまだけ……」
「おれも、そなたを妻と思いたい」
文吾は、おのれの名を口にしたい気持を必死に耐えていた。
「十蔵さまだけ。あたしたちの住ノ江の松と高砂の松のようにへだてられていても、心は通じあいます。これでいいの」
「……」
「運命に逆らうのは恐ろしい。あたしたちの想いが神さまに通じて逢瀬ができたのなら、一度

きりしか倖せはありますまい。二度、三度の喜びを望むと、きっと、罰が当たります……」

「し、しかし」

「万阿は、運命にしたがいます」

「――お市さまのようにか」

「お市さまのように」

口うつしに呟いて、お万阿は遠くを見る目になった。

蔀たけて静かに美しいお市ノ方の生涯が絵巻物のように瞼の裡にくりひろげられる。

次の間をへだてて、廊下を小急ぎにくる衣ずれの音が聞こえた。

お召しだと、伝える声が聞こえた。侍女は漸く眼ざめたようである。応対している声が聞こえ、ふたたび衣ずれが去ってゆく。侍女がもどってきて唐紙のむこうで、秀吉のお召しを伝えた。

「支度します」

はっきりした声で、万阿姫は言った。

「薬湯を煮ますように」

「はい」

万阿姫は、にこりとして文吾を見た。

「――百合ですの」

「黒百合？」

「今夜の十蔵さまのことを一生忘れぬための、お薬ですわ」

悲壮な表情は消え、むしろ楽しいもののような口調になっていた。

「おれも――」と、文吾は真のおのれにもどった声で、「そなたのことは忘れまい。それだけはおぼえていてくれい」

忍者は、消えた。

やがて黒百合の苦い煎薬を嚥みおえたお万阿は、ぬけ殻のようなからだを、秀吉の寝所へ運んでゆくのだった。かつての彼女の母のように。

影法師

一

蜥蜴が跳ねた。

「ふむ……」

半蔵はにやりと片笑いをした。

床に腹這いになっていた。足の裏に陽があたっている。片腕で顎をささえ、片手は蜥蜴を弄んでいる。

京の東山、四条のはずれ真葛ケ原に近い荒れ屋敷である。外目には公卿の別墅か隠宅とも見えるが、広い庭内は、蓬々たる雑草の生えるにまかせた荒れようで、軒は傾き、根太の腐った床は、ところどころ穴があいている。

兵燹で荒廃した無人の屋形かと誰でも思うが、破れ蔀の内にまたたく灯は、かえってうす気味悪く、近在の住人も近よろうとしない。

不思議は、誰もその屋形に出入りする姿を見た者がないにも拘らず、いつも誰か、居た。

小人数かと思えば、二、三十人いることもあった。

いずれも男ばかりなのも、近寄り難い。

前田玄以が京都所司代となり、洛中洛外の治安に乗り出したとき、下役が武装した足軽十数人とあらために来たが、

「牢人でござる。主人はない」

と、一人が答えた。

子供のように小作りで妙に顔色の蒼い男であった。名前は何がしと名乗り、生まれは伊勢、これまで仕えた主人は多い。多すぎて一々おぼえていない。みんな忘れたといい、どこぞ主取りの気持はいまもあるが、酒を喰らうと戦場でも眠ってしまう悪癖のために、思うにまかせぬ、といい、かたかたと奇妙な笑いかたをした。

ほかにも大勢いるようだが、やはり酒喰らいか、と皮肉に尋ねると、酒好き女好きで、戦さは怖いという。大の男がだらしない話だが血を見るのが怖いゆえに戦場に出られない者ばかり、

便宜上集まっている。

「それなら百姓をすることじゃ」

「土地がないわ」

ああいえばこう、それもへらへらした顔の目をしょぼつかせての応答で、役人は問答を打ち切るしかなかった。

まさか、この荒れ屋敷が、伊賀上野服部ノ庄の上忍半蔵とその下忍どもの隠れ家であろうとは、窺い知るを得ない。

一見して、孤狸の棲家と見まごうばかりだが、要所要所には、からくり仕掛けがあり、侵入したら、二度と外へ出ることはできない。

雑草の庭には陥穽や罠が仕掛けてあるし、ある場所から屋内に踏みこめば、天井が落ちる。板敷きがぽかりと割れる。厠と見えたところに地下蔵への隠し梯子があり、平家建てにもかかわらず、内部構造は巧妙な造作で、二階があり、さらに三階まで隠されていた。三階からは屋根へ出て、忍び鎖で、地上へおりる。

この奇怪な屋敷も、おだやかな初冬の陽の下では、ただ荒れた物哀しさを見せているだけであった。

それに比べ、悠々と寝そべった半蔵は、まことに半日の閑暇を楽しんでいるように見える。日ごろは、禍々しく光る右眼も、蜥蜴の動きを追いながら、わが子でも眺めるような、温かみがある。

その温かみは、その場かぎりでは、たしかに慈愛に似ていた。人間を見るに、善と悪とにわけることが困難なように、忍者を評するに冷酷無惨非情のかたまりと言い切ってしまうのは誤りである。

忍者とて、血がある。時に、女色に溺れ、美味に舌つづみを打つ。小判をつかむときの喜びも知る。

ただ、忍者として、完璧かそうでないかは、その仕事の場によって、忍者に徹し得るかどうかにかかっている。

武士にたとえれば、後世泰平に生まれた武士が、真の武士か如何は〝いかに死を近きに置くか〟にかかっていた。書を読み、女に溺れ、酒楽遊楽の間にあっても、主君が死を給えば従容として、その座に就く。その心映えがなければ、大事のさいに狼狽して醜をさらすのである。

武道初心が、腰に大小たばさんでも、

「刀を抜くは一生に一度なり、抜けば必ず斬る。斬りて後、おのれも処す」

と、教えているのは、一度の死を全うするために、日ごろの心懸けを戒めているのだ。

忍者が仕事に向かったとき、どこまでも非情になれるのは、時間的切り変えが迅速で完全だからである。

こうしているとき、あの冷酷な紅蜥蜴の影は微塵も感じさせない。

板敷きの上や壁や柱や天井や——そこら中を這いまわる蜥蜴を見なければ。

三十匹、五十匹、いやどれくらいいるかわからない。この無気味な爬虫類も、半蔵の眼には可愛く見えるらしい。

どの蜥蜴も、同じにしか見えないが、かれに言わせれば、一匹一匹、個性があり、顔やかたちも違うという。したがって、愛らしさも違うという。

「次郎」

と、呼ぶ。

柱の中途にいた一匹が、向きをかえ、するすると近づいてくる。

「三河」

と、呼ぶ。

床板の破れ目にいた小さいのが、よちよちとやってくる。

半蔵はそいつを掌に乗せた。ふっと息を吹きかけると、かっと口をあいて、チロチロと紅絹糸のような舌を出す。この闘争性が、半蔵の興をかきたてる。

指で口先をはじいてさっと手をあげると、尾がぴたっと掌を打って跳躍する。飛びつこうとするのだ。

その瞬間の足の屈伸を、半蔵の目はとらえる。一瞬、するどく光る。四足が這ったまま尾の一はねで跳ねる。その跳ね方は、忍者にも至難なわざであった。

掌の蜥蜴を手鞠を弄ぶように、跳ねさせて、甲をかえして受けとめる。子供をあやしているような、柔和な表情にもどっている半蔵だ。

蜥蜴は、あやまってひっくりかえると、手の甲の上でもがいた。淡黄褐色の腹を仰むけてもがいている。その腹のぬめりとした丸みは、幼児のそれを思わせた。

「ふふふふ、寝がえりうてぬか？」

と、眼を細めたとき、背後に近づいてきた者がある。

二

足の裏が、翳った。

雑草のなかを、その男は別段、足音をぬすんで忍び寄ったわけではない。が、ひそとも足音がたたなかった。ふわりと空を歩むような動きは、革足袋の下で踏みひしがれた草の幹も花も呼吸をやめていた。

蜥蜴の子を弄びながら、半蔵は言った。

「——杉か」

「は……」

「よけろ、陽が当たらぬ」

振りかえりもせずに、半蔵は下忍の杉と知っていた。

杉は、出鼻をくじかれたように、ちょっと鼻白んで、頭領の足の裏を見た。そこには錦蛇のような斑紋があった。きびしい修業で足の裏を皮革の強靱さに高めようとした、痕跡であった。

杉は、目をそらした。

報告をしようと口を動かしかけたとき、半蔵がまたかぶせるように言った。

「入洛してか、三河は」

「は……御安着」

「これ、お前が着いたそうな」

半蔵は、小さい蜥蜴にこう言い、

「道中は」

「何事も。小荷駄の馬一頭暴れませぬ」

「おまえのてがらではない」

半蔵は鼻に皺をよせて、

「配置は？」

と、重ねて問う。

「御座所近辺に四人。すなわち、伝鬼、多惣、クグリ、洞――以上四人がとどまり、草には南に嘉平次ほか十人――以上にござる」

「よかろう」

半蔵は身を起こした。

「この可愛い餓鬼どもを腹一杯にしてやれ」

半蔵の手から子蜥蜴がこぼれた。三河であった。

三河――

いうまでもなく徳川家康のことだ。半蔵が家康の扶持を受けていることは前に述べた。伊賀者の掟を破って、密接な関係になっている。

そのくせ、秀吉の身辺を警護するという不可解なことをやっている。この二股かけた狡知を知る者は誰もいない。もとより、知者をもって任ずる徳川家康自身が、最大の偽瞞を受けていたわけである。

蜥蜴の子に〝三河〟と命名したりして弄んでいるのも、豪族大名たる家康への隠微な忍者らしい嘲りだった。

それから間もなく、服部半蔵の姿は、忽然と家康の前に現われていた。

家康は休息をとっているところだった。

休息はまた思案の時でもある。

家康の上洛は長考の上なされたことではあったが、しかし考えて考えすぎるということはな

い。このたびの上洛は、ある意味では家康の生涯に於て、屈指の危機でもあった。

さきに北畠信雄や信孝と組んで秀吉討伐の烽火をあげた家康は、信雄らがみじめに秀吉の前に屈伏してからも、なお、旗を巻こうとはしなかった。

駿遠三の領内に腰をおちつけ、じっくりと方策を練っていた。

秀吉にしてみれば、こんな始末の悪い男はいない。格から言えば信長の義弟だけに、秀吉には主筋に近い。

家康が家臣に慕われ、領民の絶対の信頼と尊敬を受けているのを知ると、現在の秀吉の勢威でしても東海地方に遠征して叩き潰すことはできないと見きわめたのであろうか。

北畠信雄や滝川雄利らを動かして、家康を懐柔にかかったのであった。

去秋の北国平定以来、秀吉の心労は半ばこれへむけられていた。

家康は秀吉の意を知ると、かえって、駿府城を修築し、貝の口を固く閉じて、しきりに武備を増やした。

焦らすこと数カ月、書面の上では和睦を承知しながら、家康は小田原の北条氏と盟約するという抜け目のなさだった。

秀吉は、和睦の実をあげるために妹の朝日姫を家康に遣ることにした。

先に、信雄を介して家康の次男於義丸（後の結城秀康）を養子に貰いうけているから相互関係になる。

朝日姫はすでに四十余歳である。もとより夫がある。これに因果を含めて離別させ、家康のもとへ送ったのだ。

秀吉の容貌を見てもわかるように、朝日姫も容貌が醜い。色黒で枯れ木のようにごつごつしたからだで、花嫁として東海へ下ったのだから、哀れというほかはない。

お市ノ方のように、何歳になっても、引く手あまたに望まれ、文字通り傾城傾国の美で悲劇の女性として死んだのは、見かたによっては倖せといえないこともない。いつの世でも、人間は外見の美醜が運命を左右するらしい。

泣く泣く東海へ下った朝日姫は、終生、家康の愛を得ることができなかったようである。

三

しかし、家康は用心深い。

妹聟になっても、上洛しようとしない。むろん招きの使者に対して、父の法要とか、病気とか、理由をつけて腰をあげぬ。

家康一流の柔らかさで拒まれては、喧嘩が出来ない。

秀吉は焦立った。家康が上洛しないのは、かれの熱望にも関与することだった。秀吉はおのれの勢威を張ることに腐心している。京の大内裏跡に、豪華壮麗な聚楽第建設を目論んだのも、

そのあらわれである。

妹だけでは、

「三河狸め、まだ心が許せぬかなあ」

秀吉は思い余って、ついに、実母を送り込んだ。朝日姫が、水馴れぬためか病臥したとの報を利用して、母の大政所を見舞いという名目をたてた。

これは当時の常識で、人質にとるがよい、という意味である。

秀吉には子はない。もとより父も歿っている。肉身の幸うすい秀吉が、実妹と実母を送ったのだ。家康の抵抗もこれまでだった。

こうしたかけひきが一年近くつづいたのである。家康がいかに慎重で、かけ引きが巧みかがわかる。

大政所が三河岡崎城に着いたのが十月十八日。家康が対面し、その労をねぎらったのが翌日。次の日には岡崎を発足している。

むろん上洛には土産物や支度が大変だから前々から支度は整えていたのだろう。大政所下向を告げたのは八月下旬のことだから、朝日姫の病気見舞いという口実も、全く宙に浮いている。

莫迦莫迦しいほどのかけ引きだが、大まじめなのだ、瞞したつもり瞞されたつもり。天下を賭けてのかけ引きはスケールが大きい。

さて、京へ着いた家康は、前田玄以らの出迎えを受け、設けられた旅舎で休息をとっていた

のである。

秀吉の引見は明日。

湯からあがって室へ戻るとすでに褥の用意がある。小肥りのからだをそこへ横たえたときである。

「――殿……」

声がした。

家康は身を起こそうとした。

「殿。これに……」

声が遠去かる。木枕に頭をつけると、声は下から聞こえてくる。

「半蔵か」

と、家康は頭を枕につけて言った。

「何を致しておる。関白はまだか」

殺せという命令を出して、久しい。

「は、狙うておりまするが、何分ともに」

「いつも同じじゃ、いつになったら、関白を討てるぞ」

「関白を守る忍ノ者、なかなかに手強くござれば」

「ふうむ。そちより上か」

「これはお言葉、耳に痛うございます」
「痛ければ、殺れ。何のために飼うてある。忍びが忍ノ者の用に立たいでは、くそ虫同然ではないか」
「お言葉を返し恐れ入り奉りますが、関白を弑する以外のことは、十二分にお役つとめております」
むっとしたように半蔵はこたえる。
家康も不興げに、
「たわけが、その大事をなしとげずば、余事など何ぼうやりとげても自慢にはならぬものを」
「御意」
「とわかっておるなれば、殺れ。これまでにも随分と銭をくれてやったぞ」
「……」
「関白めに頭を下げねばなるまい。そちが役目をやりおおせなかったがゆえじゃ」
「わざの拙なさ、つくづく感じ入りまする。したが、相手あってのこと、なかなかに思うにまかせませぬが、関白を守る輩ども、徐々に消してゆきますれば」
「どちらが早いかな、わしの寿命と」
「おたわむれを」
「たわむれではない。たわむれを申すひまがあるか」

「……」
「じゃが……もう遅い」
「と、仰せられますと」
「余が当地に在る間は、手を出してはならぬ」
「は――」
「それより、関白が余を亡きものにせんと画策するやもしれぬ。余の身辺を常時守っていてくれい」
「かしこまりました」
「よし」
去れ、というふうに聞こえて、半蔵ちょっと沈思したが、
「殿」
「――なんじゃ、まだ居たのか」
「かような折りに申し上げるのも異なれども、われらを御家臣の端なりともにお召し抱え給りたく……」
「わかっておる」
「では」
「考えている」

「……」

「そちの働き次第ではないか」

家康の声はうるさ気にひびいた。半蔵は引き退る時を感じた。

四

その夜のことである。

この旅舎をひそかに訪れた者があった。十人足らずの供をつれた関白秀吉だったのである。まさか、と取次の者の言葉を聞いたときも信じられないほどだった。天下の関白というだけでない。いまの立場では、秀吉に分がある。如何なことがあろうとも関白のほうから、家康の旅舎を尋ねるとは夢想だにできぬことだった。

ところが、関白秀吉にまぎれもなかったのである。

「これは何となされて」

と、驚き恐懼する家康を、

「突然の訪問、許されよ」

飄々乎として、上座へ通る。

天衣無縫というか、こういったところが秀吉の身上だ。鬼柴田に与して、自害せんとした前田利家を単身訪れて、翻心悔悟させたのも、この気取りのなさのたまものだ。

しかし、これも天性の横着者で、人心の機微に通じた秀吉のテクニックでないともいえぬ。相手の意表を衝く効果も充分計算してのことと思われるふしもある。

この夜の会見もかなり劇的なものであった。

上座に据えられた秀吉は、わざわざ座をすべって、家康の手をとり、

「この度は、病いをおしての御上洛、まことに忝けなく存ずる」

再三おし戴いたものだ。

第三者の目がないと、秀吉はどんなにしてでも御機嫌をとり結ぶのは藤吉郎の昔から変わらない。

「お蔭をもって天下統一の宿願の果たせる日もずんと間近くなりましたぞ、すべては貴殿の度量のたまもの。われら決して天下を握りたいのではござらん、六十余州戦火熄むことなき地獄の相より、一日も早く、万民豊楽の国に戻し、安んじて家業に精出せる世の中となしたいがためでござる」

こんなときの秀吉の殊勝な態度は、どう見ても芝居とは思えない。

家康ほどの者が、うかとこの芝居に瞞されたのだから、秀吉の厚顔無恥、巧言令色も堂に入ったものだ。

供に持たせた金貼り大瓢箪の酒を、自らまず毒味し、家康に注ぐという周到さで、献酬を

重ねた後に漸く本題に入った。

「ところで黄門どの」

と、坐りなおした。

秀吉が家康の歓心を買うため、奏して家康に権中納言に昇らしめている。

「ざっくばらんにお話しするが、実は貴殿も御承知の如く、われらが出身はまことに卑賤、故殿のお引立を蒙り人がましき身分となり、いまは関白に候えども、大名どもの多くはわれらが先輩朋輩なれば、外見はともあれ、内心は軽侮の心を払底せぬ者尠なくはござらん。

そこで折り入っての願いと申すのは、明後日大坂城で貴殿を引見の席上、諸侯への思惑もあれば、貴殿に対して、尊大にふるまい申す。まことに勝手ながら、貴殿においては、われらに対して威服のさまをあらわし、慇懃丁重に辞儀してたもらぬか」

全く、勝手な熱を吹いたものだ。

これには家康は暫し、返事ができない。

「くりかえし申すが、天下が欲しいのではない」と、秀吉はきっぱりと言った、「六十余州平和となれば、われらより貴殿のほうが世を治めるにふさわしい、天下は譲り申そう。されば、このたびの願いかなえてたもらぬか。貴殿は故殿とは義兄弟たりし人、その身がわれらに丁重に礼儀あれば、大名どもも心を改めるであろうと存ずる」

縷々として口説いた。

唐突に関白の身が訪問してきて、意外な告白と、これまた思いがけない頼みである。天下平定のあかつきは吝しみなく、政権を譲るという言葉も家康をして承諾させる要素になったようである。

家康はとうとう承知してしまった。

「御安堵あれ、関白殿を拝する権中納言の礼にかのうたふるまいを仕りますほどに」

「おうおう、さすがは黄門どのじゃ」

また手を押しいただく秀吉であった。

秀吉を送りだしてから、家康は暫く、庭をさまよい歩いた。幽邃の林泉の気に深く呼吸しているうちに、頭がはっきりしてくると、

——はてな、関白猿にだまされたかな……

と、疑いがこみあげてくる。

——好機だったな、胸ぐら捕えて一刺しすれば……

「天下は、この手で握れたものを」

思わずつぶやいたのへ、

「いや、そうはまいりませぬ」

誰か、答えた。

見ると、いつ来たのか、竹むらの病葉に膝を突いた男——服部半蔵がうずくまっていた。

「なに、何と申した？」
きっと、睨みつけると、
「――好機、とお考えになりましたな」
「む……」
「関白の胸ぐらつかんで一刺し、と」
「……」
家康はうす気味悪くなった。こやつ、心の呟きまで、見るのか。
「駄目でございました」と、半蔵は命令を受けていたかのように、「関白の守護、忍ノ者およそ二十名が周辺にひそんでいましたゆえに」
家康は声を失って、立ち竦んでいた。

梟の山河

一

大和宇陀郷の室生寺は新義真言宗豊山派で白鳳九年の草創というから、寺の多い大和にあっても有数の古刹である。天長年間空海これを再興し、霊異を高野山に比せしをもって女人高野の称がある。
開基は役ノ小角。いわゆる役ノ行者として知られる小角は後に神変大菩薩の諡号を賜わったほどの神仙である。三十余年の穴居に常に木食して孔雀明王の神咒を唱え、奇異の験術を得た。地を走り空を翔け、その通力は、人知でもっては計り難い。

瑜伽経によれば仙に十種あり、すなわち、地行仙、飛行仙、遊行仙、空行仙、天行仙、通行仙、照行仙、精行仙、絶行仙その他である。

この仙ノ術が俗塵を離れて入山する修業者すなわち山伏によって練磨大成され、思想の面に於ては山岳宗教の母胎となり、超人的秘術の面が乱世の生活便法としての忍法を生んだのである。

役ノ小角の神仙と空海の仏教が結びついたところに、真言秘密の教義が生成された。秘呪による加持祈禱の効験も、体力人知の陶冶鍛練によってしかもたらされない。

忍法とは無縁となし得ないこの仙ノ術を今少し述べるならば、すでにして万葉集にも詠まれているのである。

巻二に、

——燃ゆる火も、取りてつつみて、袋には、入ると言わずやも、知ると言わなくに——

とある。

もとより恋歌だが、役ノ小角などにより燃えさかる火を袋に入れたりした術が行なわれていたことの証拠である。その意は、そうした不可能なはずのことすら出来るのに、死んだあなたに会う術がないとは、哀しい——というなげきの表現だ。

さて、仙術幻術に就いて詳述していては、キリがないから、忍法にもどる。

おそらく、術以前のものであるが、後世の忍者のしごとの一つである、ひそかな聞きこみを

指示したのは聖徳太子といわれる。一度に二十人の訴願を聞いて適確に裁判を下し、庶民の尊崇を集めたが、これは術者を忍びに用い、事前に二十件の訴訟を調査ずみだったからにほかならない。その発想は舶載の兵法書「孫子」の〝用間篇〟にあるといわれる。

乱波、細作の面での志能便は、天武天皇が命じている。放火、暗殺の役目を遂行した大和宇陀の多胡也が居る。

戦乱に於ける忍者の用法が史上に多少なりともあらわれた最初は、荘園形成期に於ける将門ノ乱である。伊賀の豪族である藤原千方が将門に呼応し、反間苦肉乱波によって官兵を散々に愚弄恐怖させている。いうまでもなくこの乱は平定されたが、大和伊賀の忍法が戦術たり得ることが世間に認識されたのである。

忍ノ術の基本が鍛練にあることは言うをまたないが、ために、各地の習俗、山岳の形状の差異によっても、秘術に違いが出てくることも否めない。各地各流派があるが、淵源は一つである。

神仙が宗教の母胎となって密教を生み、その鍛練が修験者なる者に通力をもたらし、その通力秘術のみを、もっとも現世的な意味で応用したのが忍ノ術、忍法——忍者ということがいえよう。

忍は、忍耐の忍に発する。宗教界にあっては神仏への尊崇と帰依のために、いやしくも忍耐という言葉はない。

これは人間が生きるための、やむを得ない〝忍耐〟に発している。

忍ノ術が後世、伊賀に於て大成した事実もその間の事情をあまりにも、適確に証明している。

というのは、由来、伊賀ノ国は海を知らず四面山に囲まれている。重畳たる山岳の間の盆地も地味は痩せ天候は不順、五穀の実りうすい。国としても貧しく発展性がない。

その上——前に述べたように飛鳥時代、奈良時代の仏教文化盛んなりしころの形態を残して、寺領社領の争いが尠なくなく、さらにその間隙を縫って、群雄起こり小豪族の乱立を見た。朝廷の勢力に関与して豪族の興廃と分裂は当然の現象だ。奈良京、平城京へも十数里という近さと、めったに外部の窺い知るを得ない天嶮の要害。住民の貧困——

忍法の発達する条件が揃いすぎているほどだ。ことに生活のためという理由が拍車をかけた。

忍ノ者として熟練することは生活の場を得ることだ。そのために、難行苦行も敢て辞さぬ。かくして〝忍耐〟の忍は、人目をしのぶ、忍びと混用され、ひいては、隠微の用法に堕ちたのである。

群雄の乱立した戦国中期には、この狭隘の地に五、六十を数えたという。したがって家人も二、三百人を有する豪族から、小は二、三十人の野武士めいた者までが、猫の額の土地を争い、金品財宝を奪い合うという、戦国乱世の縮図を展開した。

これが忍者の需要を増加し、その大量育成の結果を見たことはいうまでもない。

伊賀の忍ノ流れ四十九という、おびただしい数は、しかし、国内の需要のゆえではない。縮図を六十余州に拡大してみるがよい。応仁の大乱以来の治安行政の乱れが、群雄割拠の戦国時代を現出したのは、周知のことだが、忍ノ術への需要が盛んになり、遠近を問わず依頼主が増え、伊賀の山岳はその供給源となった。

二

需要があれば、盛んとなり、発展発達するのは流通の原則である。

伊賀四十九流の確立は、しかし、かなり後世のようである。戦国中期以降と思われる。

その血統と権勢によって、伊賀の忍者は、上忍、中忍、下忍にわかれた。下忍は上忍の家に使われ走狗たり、中忍は主を持たず走狗もない。自由な立場で、時に上忍に乞われて合力することもあった。

四十九流すなわち上忍四十九家ではない。中忍がこれを継いだ者もある。上忍の正確な名が判明しているのは十家を出ない。

楯岡ノ道順や服部半蔵が上忍の家で、石川文吾が中忍であることは前に述べた。往々間違えられることだが、上忍とは必ずしもその流派の師匠を意味しない。あくまでも家格である。

世襲ではあるが、養嗣子として忍法練達の者に家名を継がせるために、上忍すなわちその流れの達人にして、下忍を訓育教導する立場が多い。

服部半蔵が、単純な忍者なかまにあって、傑出した才気の持ち主であったことは、家名名流ながら、父の家長存生なればとて、楯岡ノ道順の秘術を併せ得んものとして入門したことにある。

忍者なかまは常人の社会とちがい、連帯感や協立を極度に嫌う。もっとも排他的である。

服部家中興の祖は、平家時代の平内左衛門で、中納言知盛に仕え、あたかも伊賀一国を領したかのような勢威を張ったことがある。

後に平家没落により翼をもがれた名鳥と化したが、新興勢力の育たない山国だけに、服部家へ対する郷人の尊崇は厚く、四十九流の総頭、ふれ頭の地位にある。

その服部半蔵が、伊賀を離れ異郷に流寓するに至ったのは、理由があったのである。これは、ただに服部家だけの問題ではなく、伊賀忍者全体に降りかかった災難でもあった。

また、そのことが、服部半蔵の気持をある方向にねじむけることになったのである。

伊賀忍者にふりかかった災難とは——

天正九年の、いわゆる伊賀ノ乱がそれである。

先に織田信長は次子で伊勢の国司北畠家を継いだ信雄に命じて伊賀を掃討させたことに始まる。

単なる地豪の寄り集まりと、多寡をくくった北畠の軍勢は、惨澹たる敗北を喫した。それまでの伊賀四郡四十九流それぞれの確執を捨て横の連携をとり、重畳たる山岳渓谷の難関を利用しての得意のゲリラ戦でもって、散々に討ち破った。

北畠軍は五千を越えたが、地理不案内の上に、夜昼なしの忍者たちの奇襲を受けて士気が沮喪し、算を乱して逃げ出した。

信長は激昂した。

「不甲斐なし、山犬どもに追い払われてか」

もともと信雄は父に似ず凡庸、むしろ暗愚である。

そのせいとしか感じられなかった。そのまま、折り返し信長が出馬していたら、かれの死は五年早く来たかもしれない。

伊賀者の犠牲は、おのれの殻に閉じこもりそれを犯されねば、集団的動きを見せることがないのを知っている。

「暫く、打ち捨てておけ」

当時、この尾張の驕児信長の進出を阻む敵は周辺にあふれている。右を撃ち左を焼き、前方を叩き潰し、鬼畜の働きで中央征覇に驀進していた信長にとって、栗の中に閉じこもった伊賀は早急に手をうつ必要はない。

その間、二年。中央を掌握し、軍を中国路に向けんとした信長はその前に漸く伊賀を討っ

て後顧の憂いをなくさんとしたのである。

天正九年三月。

織田信長は麾下の大軍、伊勢、大和、美濃、近江、若狭など近国から動員した合算六万をもって伊賀を取り囲んだ。

三

伊賀忍者はたかだか五百を出ない。この六万という数は伊賀一国の女子供、赤児から九十の老人まで含めた全人口に匹敵する。いかに北畠三介信雄が恐怖して報告したか、いかに信長が激怒し残忍な復讐心でもって臨んだかがわかる。

やや煩瑣にわたるが、信長公記の示す軍の威容と殺戮のさまは左の如くである。

九月三日、（北畠）三介信雄伊賀ノ国へ発向。

御先手次第。

甲賀口。甲賀衆、滝川左近、蒲生忠三郎（氏郷）、惟住（丹羽）五郎左衛門（尉長秀）、京極小法師、多賀新左衛門、山崎源太左衛門、阿閉淡路守、阿閉孫五郎、（北畠）三介信雄。

信楽口。堀久太郎、永田刑部少輔、進藤山城守、池田孫次郎、山岡孫太郎、青地千代寿、

山岡対馬守、不破彦三、丸岡民部少輔、青木玄蕃允、多羅尾彦一。

加太口。滝川三郎兵衛（一益）大将と為す。伊勢衆、織田上野守信包。

大和口。筒井順慶、同国衆――以上。

如此諸口より御乱入、柘植の福地被成御赦免人質執固其上不破彦三郎御警固当城に被入置。

河合の田屋と申者、名誉の山桜の真壺並にきんこうの壺致進上降参仕候、即きんこう返し被遣、山桜の御壺被止置、滝川左近被下候也。

九月六日、信楽口甲賀口、手を合一手に罷成御敵城壬生野之城さなご嶺おろし是等へ差向、三介信雄みだい河原に御陣を張られ、滝川左近、惟住五郎左衛門、堀久太郎、江州衆、若狭衆、受つづき御陣を懸られ候。

（略）

九月十日。伊賀ノ国さなご嶺おろしへ諸手相働国中の伽藍一宮の社頭初めとして悉放火候之処にさなごより足軽を出し候、滝川左近、堀久太郎両人見計馬を乗入屈強の侍十余騎討捕其日は陣所々々之本陣へ打帰し。

九月十一日。さなご可攻破之処、夜中に退散也、さなごへ三介信雄入置申諸勢奥郡へ相働諸国之軍兵入合候間爰に而郡々を請取手前切に御成敗、其上城々破却被申付候也。

阿加郡、三介信雄御請取に而御成敗。山田郡、上野守信包御成敗。名張郡。惟住五郎左衛門、

筒井順慶、蒲生兵衛大輔、多賀新左衛門、京極小法師、若州衆、右之衆として所々に而討捕頸之注文。小波多父子兄弟三人、東田原の高畠四郎兄弟二人、西田原之城主、よしはらの城主吉原次郎、以上。

阿閉郡、滝川左近、堀久太郎、永田刑部少輔、阿閉淡路守、不破河内守、山岡美作守、池田孫次郎、多羅尾、青木、青地千代寿、甲賀衆、右之衆として所々に而討捕頸之注文。河合の城主、田屋、岡本、国府の高屋父子三人、糟屋蔵人、壬生野の城主、荒木の竹野屋左近、木興の城攻千撫切、上服部党、下服部党、以上。此外数多切捨訖。

右之外一揆共大和境春日山へ逃散候を、筒井順慶山々へ分入尋捜而大将分七十五人其外数を不知切捨候キ。

算を乱して逃げまどう地侍、農民老若男女を、勝ちに乗じて捕えては斬り、追っては斬り、さながら猪狩りでもするように殺戮を楽しんださまがわかる。

いかに伊賀の忍者が剽悍で夜襲奇襲に巧みでも、四カ国へ通じる七ツ峠を封鎖し、これほどの大軍で席巻されては、歯が立たぬ。

この信長公記は、信長の右筆だった太田和泉（牛一）の記述になるものだから、信長の暴状は控え目にしか書かれていない。

六万の大軍の馬蹄に蹂躙され、城砦を破壊され寺社に放火され、（文化財はことごとく烏有に帰した）その悲惨は正視できないほどだ。

ここに至って、忍法練冶の地伊賀は壊滅したのである。比叡山を焼き高野を焼き、僧侶を数万も殺戮して恬然たる信長にしてみれば、夜鳥か犬の類いでしかない忍者とその国を、死の山、血の河とするくらい朝飯前であったろう。

だが、殺戮を受けたのは、皮肉にも忍者以外の男女にとどまっている。

忍びを生業とし、せぬまでもその心得のあった者は殺戮の牙を逃れて他国へおちた。

とはいえ、伊賀忍者にしてみれば、信長は八つ裂きにしても飽きたらぬ。

残敵掃討のきびしい国内にとどまって、勇敢にもこれを襲った者がある。

十月九日、伊賀見物を思いたった信長は、岐阜中将信忠、織田七兵衛信澄らを引具して安土を発足。

翌日、一之宮に至る。緒戦に頑強な抵抗を示したさなご（佐那郡）砦の近傍である。柘植を前衛にして甲賀口からの大軍をおし返したところだ。

信長は意気軒昂、一之宮で休息もせず、裏山へのぼった。里人は国見山と呼んでいる。標高三百五十メートル。このあたりは盆地だからその半分近くはある。信長は気軽に馬をとばした。途中で、馬を捨てて昇ってゆく。健脚である。

さした高みではないが、山容突兀として、西に上野盆地がひらけてその涯て西南に大和ざかいの山波が連なり、北は近江甲賀郡に接し、足下には服部川と柘植川が挟むように流れている。

「国見山とは口幅ったいが、なるほど、こうして見れば一望だの」
「御意」
「せまい国じゃ、ひと握りもないの」
侮蔑をあらわに吐きだすように言い、
「くされ梟めらのおかげで手間どったわい」
一之宮近傍には諸将の仮屋が建てられている。御座所は滝川左近が建てて迎えるばかりになっている。
山を下りかけたときであった。
突然、杉林に火が奔った。鉄砲であった。信長の襟を灼いて火の玉が掠めた。

四

「狼藉者だ」
「残党だ」
「逃がすな、鉄砲鉄砲」
君側の将士は仰天狼狽した。
狙撃は梢からなされたのである。夕刻には半刻ばかり間があったし、残敵がこの近辺にいようとは思えなかった。麓には数万の軍勢が屯しているのだ。
いや、かえってそれが忍者のつけ目だったかもしれない。
仰天して信長の人楯になった森蘭丸が、
「あそこに！」
と扇子で指した。
杉の梢にぱっと火が散ったのである。
轟然と銃声がした。が、銃弾は飛んでこない。狼狽の目にはそれを、偽装の空砲だと知るに時間がかかった。
狙撃者は、最初の一発が失敗したと知ると、銃を梢に向けたまま、一丁も先を走っていた。竹藪から沼地へ——裏山へ走った。尾花の原を一条の突風が東へ走るのを、裏山見張りの鉄砲足軽が見とがめている。
足軽にしては少々気が利いていた。その風渡りを不審と感じた。
火縄の煙を見た。煙は北へ吹いている。種ケ島を無花果の股に預け、狙った。尾花にむかって灼熱した鉛玉が飛んだ刹那、突風はぴたりと熄んだ。
「撃ちとめましたぞ」
銃声と歓喜の声に、雑兵らが駆けつけた。
尾花の野に踏みこんでみたが、すでに動く影はない。ただ、尾花の美しい穂に鮮血が匂った。

さすがにこそぎとった痕跡があるが、あわてていたのであろう。

「忍者は傷ついているぞ、このあたり一帯を虱つぶしにせえ」

薄暮が迫ったなかに松明の火が群れて、国見山全体がぼうっと燃えあがるような壮観であった。

裏山には大小古沼が二十余もある。捜索隊は舟を浮かべ長槍を突っこんだり、分捕りの薙刀でひっかきまわしたりした。

「忍者はかようなところに、よく潜むという。念入りにやれ」

だが、水中をいくらかきまわしても、刃にかかるのは枯れ葦や藻草ばかり。

夜が白々と明けるころには、捜索隊は、すっかり疲れてしまった。

「これだけ捜してもいないのだ。とっくに大和へ突っ走ったのであろう」

「何しろ、忍者ではのう」

赤い眼の腫れぼったい顔を見あわせて欠伸をしながら二人の雑兵が通りすぎた。

沼の一つである。方一丁ばかりの古沼の一隅が泥地になっている。葭が生えているが、底無し沼のような感じだ。

捜索のために担ぎ運んできたベカ船が泥に乗り上げないように、気づかっていたあたりである。

二人が通りすぎたあと、枯れ葭のあいだに突っ立っていた細竹が、風にゆらぐように揺れた。

泥が、坊主地獄のようにぷかりと盛りあがった。

海坊主のような頭。細竹を咥えて仰臥していたのである。

五体すっぽりと泥に埋まって、細竹で呼吸していたのだ。這うようにして水の深みに入ると、泥を洗い流した。

荒削りの、ひなびた黒い顔が出た。助かった思いがおのずから緊張を解いたのであろう、あたりを見回して、にやっと笑う。

愛嬌のあるひねた顔——能面の猿べしみそっくりの表情になった。

年はよっているが、がっしりした体軀である。これは、文吾の下僕の火吹きノ黒兵衛にほかならなかった。

歩きだして、左肩を一寸、気にした。大きな血の痂が出来ていた。昨日の鉄砲傷である。幸い弾は皮膚を裂いて走ったのだ。

骨さえ痛めておらなかったら、たいていの傷は平気だった。

黒兵衛は暁の冷気の中を、裏山伝いに半道ほど行った。漸くあたりが明るくなって乳色の濃密な霧が渦巻き流れるころ、集落が見えた。

炊村であった。ここもほとんど無人になっている。劫掠と暴行を恐れて村民は山中へ隠れているのであろう。

黒兵衛は一軒の家へ入ったが、暫くして出てきたのは、腰のまがった老婆であった。

弓の折れを杖突きながら、服部川の岸を遡ってゆく老婆を振りむく者はいない。残敵掃討に名を借りて、財宝荒らしと婦女の暴行を楽しんでいる雑兵らさえも、見むきもしなかった。

五

伊賀に生まれ伊賀に育ち、伊賀の山河を愛した者たちが、国を捨てて異郷に流浪せざるを得なくなった理由は以上の次第である。

忍者と豪族が潰滅した伊賀には、信長の被官、筒井定次が来て統治することになった。

筒井の落武者狩りは峻烈で苛酷をきわめた。

はじめ、領民安堵の触れを出して避難の男女を帰宅させてから、あらためて、忍者取り締まりをはじめた。

いささかでも忍法心得ある者は捕えて、焼殺したのである。

「人外の変化じゃ、まともにはたもの（磔刑）にもかけられぬわ」

信長の意を体した筒井は、まこと、伊賀忍法の絶滅を期すには適任であったろう。

信長はおのれの力を信じている。

幼時から「大たわけ者」と世人を驚かし、若輩にして寡兵もって東海の太守今川義元を斃して以来、かれには、何物も恐るるものはなかった。破竹の勢いでもって、天下統一の野望をおし進めて来た男である。

おのれの力を信じるがゆえに、伊賀者の忍法を役立てる必要もないし、その存在が逆に敵になって内懐ろで跳梁されることのほうを懸念したのである。

忍者を用いて利があるのは、寡兵弱少の大名である。信長のこうした判断によれば忍者はすべて敵と見て間違いない。殊に、威服せぬ伊賀者は、生かして置けぬ。

国を逃散した伊賀者が、織田信長の暗殺をはかったのはいうまでもない。

が、その前にかれらは、散り散りになったなかまを集め、組織することに力を注がねばならなかった。

中忍ならば、ありふれた牢人として、仕官することもできるが、上忍下忍はそれもならぬ。たとえ流浪しても、伊賀者の伝統と掟は生きている。

服部半蔵が下忍らと別れ別れになった禍を福に転じるべく楯岡ノ道順に弟子入りしたのも一つにはこの流寓の故もあったのである。それは石川文吾も同じといえた。

南伊賀から一歩出たところの、大和伊勢さかいの倶留尊山中、亀沼畔に棲みついていた。

半蔵は並の弟子とは違うから、炊事や薪割りなどの奉仕はせぬ。道順の持つ秘術だけを会得するべく励みながら、一方で、昔の下忍を集め組織づくりに腐心していた。

かれが、父祖からの因縁で徳川家康との関係を深くしたのも、おのれの土地を持たぬ伊賀者の窮迫と悲哀を痛感したからである。

特定の主君を持たぬという伊賀者の掟をしかし破るだけの気骨と用意が、まだなかった。家康のほうでも伊賀者の名流たるかれを士分として召し抱えることを躊躇していたのである。

いうまでもなく、信長の逆鱗に触れることを恐れたのだ。

半蔵はそのころ、亀沼へ半里余の曾爾川流域「葛」という寒村に住んでいた。かれが伊賀を追われて京へ行っていたのはひと月あまりであるが、そのときお志貴を得た。葛村へともない来て、身のまわりの世話をさせていたのである。

楯岡ノ道順が、徳川家康と半蔵との関係を、

「臣従」

と見、

「伊賀の忍びたる身が掟を破るとは何ごと」

と、叱責して破門を申し渡し、お志貴を奪ったのは、少し意味が通らない。服部家が徳川家と因縁浅からざることはなかまうちで知らぬ者はない。

今に始まったことではない。多少、家康の仕事が増えたくらいだ。

殊更に、それを騒ぎ立てたのは、道順ともあろうものが、お志貴の色香に迷った故としか思えない。

半蔵が道順の術に破れたのは事実である。葛村を退散するにも、しかし半蔵はいさぎよかった。

お志貴を得ると、道順も亀沼を去り伊賀へ入り香落渓に庵を結んだ。

残党詮議も幾分ゆるやかになっていたし、国ざかいに近く、峻嶮の地だから、筒井の手ものびてこない。

あれほど伊賀者たちが憎み怨んだ織田信長が忍者の手ではなしに明智光秀によって本能寺に殺されたのはその年天正十年六月二日の払暁である。

その時、家康は穴山梅雪、本多忠勝らを伴い、堺見物をしていた。人間の運不運はわからない。もしも家康が国にいたなら、秀吉の天下は来なかったかもしれぬ。

家康の供回りは僅か二、三十人を出ない。急遽帰国して光秀討伐の軍を起こさねばならぬ。さらには土地不案内で腹背皆敵。家康の生涯を通じて三大難の一つに数えられているほどの苦境に陥ったのである。

このとき、半蔵は偉大な働きを示している。

下忍の早走りで、危機を知ると、すぐさま知れるかぎりのなかまに呼集をかけ、手づかみで労銀を与え、家康の警護を命じたのだ。

忍びが生業であり、目下の困苦には何よりも現銀が利くことを知悉していた。

集まった忍び、二百余名。その集合の場所は伊賀甲賀のさかいのおとぎ峠。甲賀の多羅尾四郎兵衛も輩下百を率いて駆けつけた。

この忍者の集団が、家康の山駕籠を守って昼夜兼行、大和から伊賀をぬけて伊勢へ出、白子から船を仕立てて三河へ安着するを得た。

家康自身、「伊賀越えの難」と称してこの時のことを、

「実に危い時であった」

と、述懐しているほどで、服部半蔵の功は抜群。

恩賞は少なくなかった。が、家康はなお、士分としての召し抱えを肯んじなかったのである。

そうして五年——

天下は全く秀吉の手中に帰していた。

秀吉があの伊賀攻めのとき、山陰攻略に遠征していたことも、幸運といえる。

伊賀者の憎しみを受けていたら、天下取りの野望も挫折していたろう。服部半蔵が利己的な画策とはいえ、秀吉を敢て暗殺しようとしないのも、直接的な怨恨がないせいもある。他の伊賀者に就いてもそれはいえる。

徳川家康を大芝居によって臣屈せしめることに成功した秀吉は、関白よりさらに太政大臣となり、豊臣の姓を賜わり、三十七カ国に令して九州征伐の兵を起こした。

九州の強豪もしかし、秀吉のこの勢威には敵対の無駄を悟らされた。最後まで抵抗した豪傑大名として著聞な薩摩の島津義弘も降り、赫々の武勲を抱いて京へ凱旋してきた秀吉を迎えるに、親王、公卿百官の色とりどりの輿が聚楽第までの沿道を埋めて、その壮観は平安の昔もかくやと思われるばかりであったという。

その噂を、石川文吾は宇陀の室生寺で聞いた。

野点て忍法

一

「――見たか」

「見てまいりましたわい」

黒兵衛は言った。そのからだに埃りが匂った。

二十里の道を半日で駆けもどってきたのである。脚絆や足はひどく汚れていたが、常に変わらぬ足どりで境内へ入ってきて、五介を見てにこりとして笠を脱いだところは、寺の用足しにそこらに行ってきたというくらいの表情だった。

五十代も半ば過ぎているが、黒兵衛は衰えを知らぬ。

「京雀と言いますがの、何と騒ぎの好きなことでござりまする。馬鹿馬鹿しいほどで。牛車がずらりと並びましての、唐庇、糸毛、檳榔毛……よくまあ、猿関白にあそこまで堂上衆がおべっかつかいが出来るものと」

「感心したか」

「呆れましたわい」

「堂上衆とて、権門には弱い。この正月、いや二月七日には聚楽第にぞろぞろと集まって祝辞を述べるざまは、歎かわしい限りであったわ」

「金銀を手づかみで与えなさるとの」

「関白の術じゃ」

吐き出すように文吾は言った。

「おのれが下賤に生まれたがゆえに、金銀の有難味を心得ておるのじゃな」

「そら、誰でも喜びますわいの」

「殿上の長袖衆は人一倍、見得っぱりじゃ、金銀はほしいが、口に出せぬ。その心を関白は見ぬいているのだ。無駄に残飯あさりはせぬやつ」

「……」

「紅蜥蜴さえいなんだら、関白などには……」

この手でとっくに永眠らしたものを、と思う。お牧の哀れな顔が、泛んだ。

秀吉への憎悪がこみあげると、文吾の顔は眉尻がはね上がり、目がするどくなる。

「よしなされ、腹たててもはじまらぬ、じぶんの寿命をちぢめるだけのことじゃで」

「長生きせずともよい。この手で秀吉の猿首を……」

「長生きせずば、若の行末を見届けられませぬぞ」

「む……」

と、文吾の顔は、和んでくる。

五介がしきりに砂遊びしている。まだ四歳だが、かなりなことを饒舌る。黒兵衛の男手ながら、実の父たる文吾そこのけの可愛がりようだ。年齢からいっても、孫のようなつもりになれる。

文吾よりは、お牧に似ていた。女の子のように、優しく整った目鼻立ちである。

「若、この若は、十年もたったら、えろう女泣かせになるこっちゃろで。若も小さいときは……」

「若はよせ。親父になったおれを若でもあるまい、第一まぎらわしい。五介が怒るぞ」

そう言いながら、文吾の目は慈愛にみちた光りで、くるむように眺めている。

——もうそろそろ、忍法の手ほどき始めてよいかもしれぬ……

よちよち歩きの足を見ても、文吾はそう思うのだった。

忍法という特殊な仕事がいつまで需要があるか、文吾にはとても先見の明はない。乱世の溷濁した世相では一年先、半年先を予測することも難しい。

誰が、天下の足利将軍が、京を落ち、流寓するなど考えたろう。

この春、九州征伐の途次、備後赤坂で秀吉は前将軍足利義昭と逢っている。信長によって将軍の座に就き、後には信長を討とうとして二度も失敗し、遂に政権の座を追われ、いまでは哀れな食客の身上だった。

それはいいとして、この五介だけは、

——一国一城の主にしたい……が、所詮、夢か。せめては忍ノ術だけでも、誰にも負けぬ秘伝を……

忍法を教えるにも順序がある。年齢的な限度もある。

親の欲目でなしに、五介には素質があった。四、五歳から基本的訓練をほどこせば、伊賀随一にもなれよう。

からだが柔らかいうちなら猫と同じで、高いところから飛びおりても骨にガタがこない。

柔軟さは忍者にとって必須のものである。

軽捷さ、腕の強さ、指の強さ——それらも努力と練磨によってもたらされるにしても、生来の稟質の如何によって、並の忍者で終わるかぬきんでるかが自ら違ってくる。

他行した文吾が室生寺へもどってくるとき、五介はまだその姿の見えぬうちから、

「父、父……」

と、まわらぬ口で呼び、喜びの情をあらわにしているという。

時間にすれば、文吾が半里ほど先に在るときからになる。幼児の本能的な六感が、父の気配を聞きわけるのであろう。

無垢の童心には、天性の感覚がある。俗塵にまみれて、それが失せるのが普通である。

「十で神童、十五で天才、廿歳すぎればタダの人」という唄はそれを物語っている。動物的本能の退化というべきか。一般的資質をも磨き育てることで、異状なまでに六感を鋭敏になし得る。稟質にめぐまれていれば、道は近く、早い。

「おれの子じゃな、やはり」

と、文吾は満足だった。

育てるに名伯楽たる火吹きノ黒兵衛が居る。

文吾は他行するにも安心してまかせることができた。すでに四歳。五介は水に潜るをおぼえ、蔓につかまって樹から樹へ渡るを好んだ。

二

――やるか……

うす鼠の投げ頭巾に鶯茶の道服、小さ刀を前半に差しただけの、茶人か富商の隠居というていの男が、濠ばたをそぞろ歩いていた。

笑みを湛えた柔和な顔は、知人でも気のつかぬ、文吾の化性姿。でっぷりと肥った、いわゆる「腹腫れ商人」の経済的余裕を示す寛濶たる風体は、人をして何がなし安心させるものである。

見物の群集も少なからずいた。

京の聚楽第。

年余にして、竣工した豪壮華麗な聚楽第に秀吉が大坂から移ってきたのは昨日のことである。

南北七丁、東西四丁、回らすに三千歩の石垣をもってし、高楼、鉄門をもうけ、二重の郭、殿舎そのうちにありて殿閣には七宝を釦し、屋根には雌雄の金鯱が魔をはらい、瓦は金箔を塗り、門には鳥獣草木を刻して、荘麗たるただ衆目を奪い――云々。

古書にある形容は誇張のきらいがあるが、秀吉の気宇から察しても、大差はなかったろうと思われる。天皇の行幸二度に及んだほどである。

遠近からこれを見物の男女が、行厨や破籠（弁当）持参で連日蝟集し、またこれをあてこんで、物売りが来、大道芸人がくる。物哀しげな唄や、破れ琵琶の音が流れて、逝く秋の霜知らぬ浮かれ騒ぎに京の往来ははげしかった。

——諸国では飢餓にあえぐ者が尠なからぬのに、おのれ一身の栄華をむさぼる関白、ねたみそねむ者も多々あろう。焼き払うてくれようか……

文吾は行きつ戻りつしながら、群集の表情を窺っている。

秀吉を殺すことができぬ以上、この新第を焼けば、お牧の怨みも万分の一くらい霽らせるような気がした。

「秀吉の身に万一のことあれば、おふりは生きていまい」

強力な組織を持つ紅蜥蜴の宣告は、文吾を手も足も出なくしている。

復讐心が、秀吉の寵妃に向けられているうちはまだよかった。

お茶々の処女を奪い、加賀ノ局となったお万阿を十蔵に化身して近づき、結果として、やはりこれも奪ったことになったのだが、復讐の快感というには、あまりにも遠く、虚しかった。

そんなことがお牧の霊を安じさせず、おふりもとり戻せないと知ったとき、文吾は寵妾を犯すことをやめた。

——おふりはまだ生きていようか……

それを見きわめる手段もない。

お牧の仇を報じたい思いと、おふりまで殺したくない——ジレンマに文吾は悩まされつづけた。

聚楽第の炎上は、文吾の所為とわからぬようにやれるならば、のことだ。

そりかえった破風の高みの金鯱に燦然と眩ゆく映えていた陽が、丹波の山なみに沈むと、宵闇が待ちかまえたように、うす墨を流してきた。文字通り、つるべ落としの入り日であった。

千本通りの辻に高札が立っている。その前にも人だかりがしていた。

濠ばたを歩いていた文吾は、足をとめて高札を人々のうしろからのぞきこんだ。別段の不審も感じさせぬ風采姿勢である。

が、そのうしろ姿に、凝っと目をむけていた者があった。

柳の陰にふりわけ荷をおろした白酒売りであった。

垂れ下った胡麻塩の長眉のかげに、半眼にひらいた眼が、文吾の背を刺すようにとらえている。

「売れぬかな、おやじ」

そばに人が来た、手にこきりこを持った放下師だ。大道芸人である。

「売れぬわ。人ばかりごちゃごちゃ出よって」

「銭出すやつは居らんか」

げたげたと、下司に笑って、ふいと唇をすぼめた。

〈やはり、お言葉の通り……〉

〈彼奴か〉

〈左様……〉

〈眼を離すまいぞ〉

忍び声が命じる。白酒売りのしょぼついた眼は、一瞬、服部半蔵の獲物を狙ったときの隼の眼になった。

三

――執ねっこいやつ……

文吾の背を睨んで心に呟きながら、半蔵の思いは複雑なものがある。

ある意味では忍者を理解するに、異常さの点から入るほうが容易である。人間の見るに悪の面を分析するほうが早いように。

お志貴を奪われた（間接的ではあるが）憎悪を露らすとともに、お牧を秀吉に提供してきっかけをつかみ、栄達の具としたことも、その異常の証左と見ていいのではないか。

秀吉の機嫌をとり結ぶためではない。忍法練達の不埒な夜盗を上回るおのれの組織力を高く売り込んだのだ。忍者ぎらいの秀吉がこの〝紅蜥蜴〟を高く評価せざるを得なかったのは、彼の弱気とばかりいえない。

かれが徳川家康の〝陰の臣〟となりながら秀吉におのれを売りこんだことを不思議に思う人が多いだろう。況や後の徳川の勢力、十五代の長きにわたった徳川幕府を知っているわれわれには、半蔵の行動は不審きわまる。

だが、時代の流れは予測を許さない。その渦中にあるとき、常に混沌としている。社会は多勢の人間の運命が動かすものである。透徹した眼で先を見ることは、きわめて稀だ。時の勢いというものは、不可能を可能にし、正を邪にもする。

秀吉が天下をとるかもしれないという見方は、光秀の滅亡のときから衆目の半ば以上を占めてはいたが、その秀吉の家系が一代限りで滅亡し、東海に勢力を扶養している徳川家康がこれにとって代わり二百六十年の繁栄を築くであろうことなど、ただの一人も予断した者はあるまい。家康本人ですら、この時、それだけの抱負と自信はなかったはずだ。

半蔵が二股かけたのは、そのゆえである。

――秀吉を殺るのは容易じゃ、が……

半蔵はおのれだけの闇の世界で北叟笑む。

――おれは、それほど愚かではないて……

かれは、多くの忍者が、その役目ゆえに自ら死を招いた事実を知っている。

忍者を指嗾する者は、誰によらず利己的で残忍である。走狗いかに功を樹てればとて、感謝することはない。もとより銀銭で結ばれただけの関係にちがいないが、始めから人間と見ていないのだ。

目的のために使う犬――人外の化性の者がある以上、この侮蔑にさからえぬ。家康とは父祖

の代からの深い関係にありながら、その三大難の一つを助けた大功あって、なお、半蔵は〝陰ノ臣〟でしかなかった。

陰ノ臣は、その利用度がうすれたとき、陰の死を与えられぬと、誰が保証するか。

半蔵は一人身ではない。伊賀上忍の名家名流にして、二百余の輩下を擁している。その生業たる忍ノ術が、使い捨てにされることを恐れた。

――陰ノ臣ではなしに、表ノ臣にならねばならぬ……

犬の境遇から、人間に、武士になるのだ。その価値を何としてでもみとめさせるのだ。

秀吉を殺すことが、その真価をみとめさせることにはなる。が、そうすれば、家康は楽々と天下を握るだろう。天下を握れば、秀吉暗殺の指令を全うした半蔵が邪魔になる。暗殺依頼者が家康と洩れたら、秀吉の朋輩とその恩顧を受けた大小名を手なずけるのは容易ではない。半蔵もまた、秀吉のあとから三途ノ川を渡らねばならぬことになるのは火を見るより明らかだ。

この両刃の危い立場にある半蔵が、おのれとおのれの輩下のために、二股かけたのは、やはり聡明だったようである。狡猾というべきか。

一方に家康の命に従いながら、秀吉の暗殺を手びかえ、かえっておのれを売りこんでいる。秀吉の暗殺だけは難事と家康に奏する一方、秀吉の安全を計った。秀吉を討ちたい大名は尠なくない。それらの乱破から守ったのである。

秀吉が他の手で暗殺されたら元も子もなくなる。おのれの未熟を証拠だてるか、二股膏薬を

暴露することになる。何としてでも秀吉を守らねばならぬ。

家康が暗殺されないまでも病死ということもあり得る。秀忠は凡庸だから天下はとれぬ。そうなれば秀吉に忠実な臣になるしかない。

こうした立場にある半蔵が、石川文吾を敢て抹殺しない理由も分明である。

時々、秀吉を脅かしてくれる、まことに重宝な存在ではないか。

おふりという、足枷があるのだ。

もしも、文吾という執念深い人間がいなかったら、服部一党下忍をして、脅かす役目をさせたであろう。半蔵はそれくらいやりかねない。

いまも――

高札の前に佇む文吾を見まもりながら、

――あの様子では、彼奴……

いま、文吾が何を考えているかまで、見ぬこうとしていた。

四

その高札には、左の文言が達筆にしたためられていた。

一、北野の森に於て十月朔日より十日の間に天気次第に御茶湯を成さるべく、御沙汰に付而、

御名物ども残らず仰せにより相揃え、数奇執心の者に拝見させらるべきために、此の如く仰せられ相催し候事。

一、茶ノ湯熱心の者は、若党、町人、百姓以下によらず、釜一つ、つるべ一つ、のみ物一つ、茶なき者は、麦焦しにても苦しからず候間、ひっさげ来たり申すべき事。

一、座敷の儀は、松原にて候条、畳二じょう、但しわび者は、とじ付にても、いなはきにても苦しからず候事。

秀吉の茶好きは知られている。戦国武将の大きな思索的趣味的特徴として、禅と茶がよくあげられるが、この両者は表裏一体で東洋哲学の日本的昇華という面で見ると非常に興味深い。それはさておき、九州遠征の戦塵を洗うに聚楽第の宴と、盛大な茶ノ湯の会は、かれの懸案だった。

常に秀吉は規模の大きいことが好きである。

北野の茶会の支度にも大勢を動員した。

聚楽第への移転のさまも一つ話であるが、金銀調度を満載した船三百艘、淀に着し淀より車五百輌、人足五千人という仰々しさで京雀を驚かしたものである。

それからすぐに、これだ。

北野茶会の小屋を建てるに奉行は前田玄以に命じた。夥しい材木を北野に運ばせて、数百人の大工屋根葺きを督励して十日の間に無慮八百有余の茶屋小屋を作らしめたのである。

その当日……。

北野天神の社を中心に方一里にくりひろげられた茶会の盛況は、「豊臣秀吉記」に、こうある。

秀吉公、北野の松原に於て茶湯を催さる。これ都鄙の茶湯者の風情、道具の好悪を見んが為なり、先ず所々に札を立て、茶湯者を招かるる。京並に泉境（堺）遠近すべて茶をたしなむ者、大いに喜び集まる。（前田）徳善院玄以、千宗易（利休）をもって、茶湯者三百五十余人を北野に会わしめらる。

おのおの北野右近馬場の左右、松のもと、梅のかげ、岩のはざまに茶店をかこう。萱ぶきに柴の垣、苫ぶきに蘆の垣、篠ぶきに竹の垣、心々にしつらい、茶の具、懸け物以下、思い思いに飾る。秀吉公も小店のかこいをしつらい、茶具色々をつらねて、諸人に見せしめらる。秀吉公みずから茶を点じて、諸大名に給う云々。

秋晴れの美しい日だった。

秀吉は上機嫌だった。拝殿の近くに葭垣を設け、東から西へ通い路があり、関白の席は四つ。天下の名器を飾りたてて、人々が感歎するのが楽しいらしい。

この日、秀吉は紫のひたい頭巾、萌黄の小紋小袖に五三の桐の金紋を縫い取った緋の袖無し、

綾綿の袴に脇差――という軽やかな姿で、終始にこにこしていたが、

「どりゃ、客人も来尽したようじゃ、席めぐりなどいたそう」

と、腰をあげたのは申の下刻。秋の陽が黄ばみ初めたころおい。

上下貴賤それぞれに趣向をこらして席を張る起伏をめぐった。お気に入りの利休や石田治部少輔、前田玄以など宗匠武将に公家衆など数十人がつきしたがう。

前記のように、めいめいが趣好をこらしているので、あちこちに立ち寄って一服する。

一巡してもどりかけたときだ、

「お、あれに誰ぞ、わびた奴がいると見ゆる」

小高い丘に風趣ある梅樹が見え、何やら朱いろがちらちらしている。傘らしい。

北の斜面の窪地にわたし一間半あまりの朱塗りの大唐傘をひろげ、七尺もある柄をずいと立て、風炉にくべられているのは松ぼくり。

亭主は精悍な風采の牢人者で、緋毛氈に大あぐらをかき、鍔つきの尺余の陶煙管を咥え鼻からもうもうと煙を吹きだしている。

煙草は当時南蛮渡来で珍しい。

秀吉とその一行を見ても、恐懼するふうもなく、わずかに膝をあらため、かるく一揖しただけである。

「ほう、これは数奇者じゃ、気に入ったぞ」

秀吉は、気軽く立ち寄ろうとする。

大勢の群れから少し離れて警戒に当たっていた服部半蔵が、はっとしたのは、その亭主の顔を一見したときである。

――彼奴！　こんなところに……

五

文吾だ。

ひそかに丘の起伏、木の梢などに隠れることか、人目に立つ朱塗り大唐傘を張って、悠然と秀吉の近づくのを待っていたふてぶてしさ。明らかに、紅蜥蜴らの目のあることを知って、裏をかいたのだ。

ひゅう！　細く低く、するどい口笛が流れた。

茶人に扮した半蔵が、下忍らに知らせたのである。

――見つかったな……

文吾は奥歯を噛んだ。一瞬の差。秀吉が近づけば手裡剣を飛ばすつもりだった。

口笛と、そして、ざざざっと、音なき音を立てて周囲に紅蜥蜴一党下忍らが馳せ集まってきた気配がした。

文吾は、供の侍女の中に、ふっと、おふりの顔を見たように思った。
——紅蜥蜴の目くらましだ……
おふりを髣髴させた陽炎のようなゆらめき。
そして、それに気づいた文吾の耳に、忍ノ者同士の、あの声が、
〈手を出すな〉
〈……〉
〈おふりを死なせる気か？〉
文吾の顔は一瞬、苦渋に歪んだ。かれは、秀吉を拝謁し、忍び声で、「影」へ応えた。
〈殺すな〉
秀吉にも手出しをせぬ、との意を伝えたのである。
そうした忍者同士の火花を散らす葛藤があっているとは知らぬ関白秀吉。
気軽くもうけの席へ坐って、
「亭主どのは、いずれの仁じゃ」
「は……」
と、口ごもったのを、傍から石田三成が、
「直答を許される」
文吾は目をあげた。

不敵な光りが双眸にきらめいた。
「伊賀ノ産、石川……石川五右衛門と申しまする」
「ほう、石川五右衛門とな」
秀吉は他意なく聞いて、
「一服所望じゃ」
「御免候え、茶の葉を需め難き身分にござれば」
梅ケ枝にかけた一瓢をとりおろした。冷ましの器へとった白湯を茶碗に移し、瓢からひとつまみの焦椒（麦こがし）をぱっと浮かして奉った。
「ふうむ」
半ば呆れながら喫しおえた秀吉。
さっきから凝った濃茶薄茶の飲みつづけで茶好きでも食傷気味だ。そこへ麦茶の淡薄さ。
「——湯加減もみごと、味も格別、さびの極致じゃの」
「恐れ入ります」
「これにすぎたる風流はない」
文吾は、そのとき見た。うすら笑いを浮かべて凝っと見まもっている老茶人の目。闇の大坂城で対した紅蜥蜴の目にほかならない。
——あの目は……

記憶があった紅蜥蜴以前に――

――服部半蔵か？……

そのようでもあり、違うようでもあった。いまはしかし、秀吉を眼前五尺に見ながら、手を出せぬ無念だけが、脳にうずいている。

秀吉のほうはそれと知らず上機嫌で、

「――褒美に何をとらそうか」

「何もいりませぬ」

「ほ、ほう、これはまた淡白な性じゃ。ほしいものはないか」

「関白太政大臣の御威勢でもかなわぬこと」

「なんと！」

秀吉も驚いたが、側近がさっと気色ばんだ。

「こやつ！　頭が高い」

「まあよい」

と、秀吉は押しとめて、

「余の力でかなわぬことがあろうや！　申してみよ」

「歿った妻を生き返してたもるか」

文吾の眼は真摯な光りを帯びていた。秀吉の肺腑を貫くようであった。このとき、さすがに、

秀吉は不審を感じている。茶の席に死人の話など不興になるのを、さすがに圧えて、

「そうじゃ、この太刀をくれよう、国綱じゃ」

小姓の捧げた鞘巻き鮫皮の太刀を手ずから渡した。

「忝けなき倖せ」

「受くるか」からからと笑って、「焦椒の返礼には不相応すぎるが」

「いな、相応なところ」

「何！」

重ね重ね不遜な言葉に、三成らは眉をぴくぴくさせて、睨みつけている。

文吾は捧げたまま平然と見かえして、

「重い……国綱にしては重うございますな」

「何を申すことか、こやつが」

秀吉のおもてが、朱に染まった。その面前にがたりと投げだした名刀？　転がった拍子に鯉口がきれ、名刀とは似もつかぬ黒ずんだ鉛の刀身が、一同の目を射た。

「あ!?……」

「粟田口国綱はこれにおさまっておる」

文吾は不敵に嘲りを湛えて、かたわらのおのれの太刀、うるみ朱鞘の刀をすらりと抜き放った。

「いかにも名刀、たしかに頂戴仕る」

「や、いつの間に……」

騒然とうろたえ立つ側近たちを尻目に叩きつけるような一喝を浴びせた。

「この刀がいつの日か汝の首を掻くぞ」

語尾はぱっと舞い上がった灰神楽の中に消えた。文吾が釜を風炉へ蹴込んだのだ。

「殿下を！」

半蔵と下忍らの手から十字手裡剣が、亭主の席へしゅしゅしゅしゅッと放たれた。手ごたえはなかった。朱塗り大唐傘がぱっと火を噴いた。みごとな形ぶりの老梅に火竜が走り、馬のたてがみのように燃え立ったのは、火薬が引かれていたのであろうか。一点の疎漏もない——伊賀忍法火術「火馬翔天」。

静寂閑雅の茶会が一瞬にして、恐怖と狼狽、喧騒の坩堝と化したなかに、文吾の姿は忽然と消えていた。

忍者の血

一

その名が天下に喧伝されるようになったのはその日以来である。天下人関白秀吉を面罵し仰天させた不敵の男の名は、恐れとともにある種の爽快感で京雀の口を軽やかにし、凄じい早さで、五畿内にひろがった。

「おやりなされたの」

ぼそりと黒兵衛が言った。

「幾らか腹の足しになりなされてか」

「皮肉はよせ」
「ほい、皮肉ではござりませぬて、てまえは石川文吾さまに仕える身じゃで、五右衛門なんどというお方は知りませぬ」
「まだ申す」
「申しませいでか」
黒兵衛はいつになく強面だった。
「あなたさまは、お一人身ではない。五介という可愛い、和子がお出でじゃ、軽はずみをなされて、二つない生命をなくされては。和子を孤児になさりたいか」
「わかっておる。ただ……一太刀なりとも怨みを霽らしたかっただけだ」
文吾のお牧への愛を思うと、妻というものをついぞ持ったことのなかった黒兵衛はあとの言葉がつづかなくなるのだったが、
「和子のことを思うて下され。和子がいねばこの黒兵衛もお供して関白の生肝を摑み出して禿鷹に食わせもしよう、和子を不憫と思うたら、無駄な腹癒せはおやめ下され」
「……」
「おふりさまとやらのこともある」
文吾は黙った。黒兵衛の論理が一々正しいだけに、返す言葉がなかった。お牧への愛が深ければ、五介を愛することによって、菩提をとむらうことができるのではないか。理屈では、わ

かる。
が、男の意地が、なまじ忍法の覚えがあるだけに、一矢報いたい気持を圧えることができなかったのである。
「わかった」
ややあって、文吾は言った。
「五介はおれの子だ。お牧の分身だ、おれは五介におれの覚えた術を残らずそそぎこもう」
「その儀なら及ばずながら黒兵衛も仕込みますて、仕込みますて」
くしゃくしゃにべしみ面を涙で汚して嬉し泣きする黒兵衛であった。
本格的に修業するとなれば、室生寺に寄宿しているわけにもゆかない。文吾は五介をともない、伊賀へ戻った。戻るといっても、室生寺の北方一里余、大和伊賀さかいの長坂山に居を定めた。
ここは伊賀ノ乱の折り、最後の砦となった柏原まで一里、滝口まで半里という地点で、れいの香落渓も東方一里にある。
香落渓も唐土の赤壁を思わす渓谷美であるが、長坂山の東麓には赤目四十八滝がある。ここも奇勝である。
山頂は千年の老杉鬱々として生い天日を蔽い、幽棲の趣き深く仙境に入るの観がある。尖った肩をそびやかすような断崖には奇怪な巌石が乱れ、数丈の屏風岩は恰も六枚折りの屏風を列

したように削り立ち、数千丈の飛泉が、囂々と鳴りひびいて飛沫散乱して熄むことがない。高さ凡そ十五丈、豪雨にも似た瀑布は、三伏の候といえども人をして忽ち冷然たらしめる。

数十条の滝は四十八あるという。冬季、その北端の数条が結氷して石柱を立てたようになるので寒水石の称がある。断崖の中腹に岩窟があって長さ二十間、広さ七間、天井は水石の如しというが、まだ誰も奥を突きとめた者はいない。

文吾は、この断崖の上、四辺を見透せる巌松の陰に庵を結んだ。

もとより黒兵衛も寺男の暇をとり、主人父子の世話をする。

「関白のことは忘れよう。おふりのことも忘れよう。五介だけに生き甲斐を見出すのだ」

忍者たる稟質を備えているだけに、育成は楽しみだった。

忍者たるに必須の条件は、身、軽捷にして克く耐え克く忍ぶ——それだけである。

色々鍛練の方法がある。流派によって違い、素質の差異、男女の別によっても違う。

高所を恐れず、水中を楽しむ五介である。忍ノ術の可否も、世間も何も知らぬうちから、五介はしなやかで強靱なからだと、忍耐を養われていった。

水に潜ることを楽しむ五介は、素手で岩魚を摑むことを覚えた。二間の高さから飛びおりて片足で立てるようになると、背を向けており、次には目隠ししておりた。

地上までの高さがわからない場合、三尺でも十尺でも恐怖は同じである。が、闇に敢行せざるを得ぬ場合もある。目で降りず、全身の感覚を働かすことをおぼえた。地上の重いひろがりが肌に五尺の近くに迫ったとき、始めて五体は地上へおり立つための用意を整える。

その習練であった。

五尺の高さから翻転して猫のように軽やかに降りたてば、その上は、一丈も二丈も変わらない。とぎ澄ました感覚の練磨であった。飽くことなき、跳躍のくりかえし、習得する方よりも、指導するほうが疲労する。根気と努力は、全身の感受性を鋭敏にし、目耳と同じ働きをするようになる。

一年たったとき、無心に遊ぶ五介の背後から、礫を投げた。

礫の大きさだけ、空気が背を圧す。鋭敏な感覚は、それを適確に知る。蚊が耳のそばに来たとき、ただ羽唸りをうるさいと思うだけでなく、刺される不安で、思わず手で払う。

あれにひとしい。礫が五尺の近くに迫ったとき、蚊を手で払うように、自然と、五介は上半身をねじって、礫をよけた。そのまま、蛙と遊んでいる。無意識の「躰身転影」であった。

「おれの子だ」

文吾は満足げにうなずくのだった。

二

跳躍力を養うために、麻を蒔くことはすでに大方の読者が知っていよう。

他の植物と違い、麻の芽の成長はきわめて早い。一日一日目立って伸長する。二列に麻を蒔き、毎日これを飛ぶ練習をする。

練習はすべて適確に無駄なく行なえば、思いがけない力を得るものである。

走り来たって飛ぶ力を得たあとは、常住坐臥、転瞬にその坐った位置から飛ぶ力を養う。

次に、忍びの忍びたる、「忍び歩き」。これは熟練すれば、撒き菱の上でも渡り得るし、茅葺き、柿板葺きの屋上を走って、ひび割れ一つ入れぬ。濡れた瓦を走って、傾斜になお滑らぬほどになる。

濡れ紙渡りから初める。和紙の引きの弱いのを濡らして並べ、この上を渡る。体重がかかれば濡れ紙は破れる。息をとめ、身心を軽く、軽くと心懸けて、精神統一して雲上を行くにも似た足遣いになったとき、濡れ紙は破れることなく、その身は、渡り終える。始めに歩き、次いで走る。

忍者の達者は一日四十里を行き、その速さは笠を胸に当てて落ちないほどというが、右の濡れ紙渡りを会得したとき、この速度で走るを得て、疲れることがないという。

一つ一つを理にかなった習練で会得してゆくわけだが、いずれも鎖のように関連したもので、一つの術に半年かかっても六つの術を会得するに三年を要することはない。

忍法はすべて、体力気力を基盤とした俊敏さ持久力に加えて、各種忍具火器などを適確有効に使用することによって、隠形遁甲をなし得るのである。

十字や八方、六方などの特殊な手裡剣の速射を覚えることによって、またそれをさける道もひらけるし、捕縄術を知り、縄ぬけを知る。

人間の五体には、関節が驚くほど多いが、肩や顎から、手の指の関節まではずしたりはめたりが容易に出来るようになると、いかにきびしい絡み縄もほどけるし、頭部大の穴で出入り自在となる。

鼻先に猫の毛をつけて、これを微動もさせず呼吸をする〝静息術〟。水音を立てずに泳ぐ〝無波〟いわゆる忍び泳ぎ、忍び流れともいう泳法なども、水練をある線まで上達した後の段階になる。

そうして、五体の熟練が目ざすところは、無声、無音、無形、無影、無臭——この五無の境地である、これは役ノ行者によって到達された仙に近い。これをなし得たとき、他に目くらましをかけずとも、目前を通って、気づかれることがない。

これらは、いずれも基本である。いうならば忍者たるの最低の条件といえよう。

これらを会得した後に、はじめて対外的、対人的な〝術〟を学ぶ。「変幻仮姿」や「始計」や「聴音窮視」——変装、観相、惻隠などの百般に渡る術法は少年の域を出た後のことになる。

忍具は普通六具と称されるが、これは六天（天上に青赤白黒黄の五帝あり、これに天帝を加え六つある）兵家権謀の書と称される六韜三略の六と語呂をあわせたもので、七ツ道具などというのと同じ類いである。

忍具の数は流派によって違い、時代によっても甚しく増減を見る。常に改良改廃されていたのだ。

ちょっとあげても、忍び熊手、大小かすがい、苦無、打竹、水蛛蜘、しころ、坪錐、菱、忍び刀、手裡剣、打カギ――多種多様にある。浮沓と水蛛蜘どちらを使用するかも、忍者によって、その場によっても違う。

知恵才覚教養の上に立つ術法は、年輪を重ねる以外にないから、五介には専ら、体術と忍具の迅速な使用法だけを教えた。

これら忍具は子供にとっては玩具にひとしい。興味を持つことは、覚えも早い。ただ、幼児の手足に合わせる必要があった。

黒兵衛は、兎や鹿を討ちとめ、皮を剝ぎなめして浮沓を作ったり、鉄板をまるめ、二つ牙を切り出して手カギを打ったりすることに、かぎりない喜びを感じていた。

火吹きノ黒兵衛と渾名されるほど、黒兵衛のもっとも得意とするところは火術にあった。

「もう少し大きゅうなられたら、知れるかぎりをお教えしますでの」

その時がくるまでは、死んでも死ねぬと、眼をほそめる黒兵衛であった。

こうして赤目四十八滝の男ばかり三人の庵は、五介を中心にして、春秋を過ごしていったが、その間に、京と諸国の世情は、大きく動いていたのである。

天正十八年には、秀吉は懸案の小田原征伐を行ない、関東を奪い、東北を鎮圧した。

徳川家康が関東百万石に封ぜられたのは、その野望を見ぬいた秀吉が、少しでも京より遠隔の地に封じ込めようとしたためである。

完全に六十余州の実権を握った秀吉は、先に一子鶴松丸の夭折にあって、非歎のあげく、甥の秀次を継嗣となし、関白を譲り、おのれは太閤と称した。

それから一旬も経ぬうちに、征明令を発して、まず朝鮮遠征の軍を動員したのである。

三

晩年の秀吉を称して、史家の説は大体二つに別れるようだ。

卑賤に生まれて、位人臣をきわめ太閤と称えるに至った秀吉は、このころすでに狂疾の気味であり、成算のない大明遠征を令したと。

また言う。

六十余州を平定することに半生を費やした秀吉は、それが成ったとき、おのれに政治家としての手腕が何一つないことに気づいた。むやみと官位に手を伸ばし、最高の太閤に至ると、あとは天皇しかいない。おのれのボロを隠すためには、〝戦争〟がなければならなかった。かれは、四百余州に目をむけた。六十余州の戡定に半生を要したのだ。四百余州と闘えば終生ボロが出ないであろうから、と。

前者は従来の見方であり、後者は唯物論証的だが、的を射ている。

朝鮮遠征は周知のように、当初破竹の勢いで進撃、半島のほとんど全土を席捲したが、講和を重ねるうちに士気が沮喪し、在鮮軍に脱走が出たり、膠着状態となり、泥沼の様相を呈し始めていた。

秀吉は政治的手腕のなさを露呈し、この進退両難の戦さに嫌気がさしていた。

秀吉の心はこのころ、お茶々の生んだ子、お拾い——後の秀頼に没入していた。

狂気とはいえないまでも、晩年に至って、暗愚となった秀吉は、淀どのに若君が生まれたと早馬で知るや、戦さもおっぽり出して大坂に戻っている。

赤い皺だらけの子猿のようなわが子の顔を見たとき、秀吉は一介の凡愚になり下がった。

その瞬間にかれの胸に沸いたのは、

(しまった。早まった!)

という思いではなかったろうか。

関白を譲り左大臣にまで昇らせた秀次の継嗣の件である。

わが血すじに天下を譲り渡したいと思ったとき、かれの明晰だった頭脳は曇った。

いかに太閤の権威をもってしても、そうそう、自分の都合でやったりとったりはできぬ。

秀吉は、秀次の娘を、この生まれたばかりの赤児に娶らしめることによって、三代目に据えるという馬鹿げた案を考えた。

その子ぼんのうぶりは、大坂から淀の城へもたらした自筆書簡に見えるように、

返々、御ゆかしく候まま、やかてやかて参候て、くち(口を)すい(吸)可申候、又われわれるす(留守)に、人にくち(口)を御すわせ候わんとおもいまいらせ候——云々、

と、あるのを見てもわかる。

さらに、年が明けると、文禄三年春、秀吉はこの子のために、伏見に築城することにした。

城作りは好きな男である。

秀吉はいつかお伽衆の曾呂利伴内に洩らしたことがある。

「城作りは、出来るまでが楽しみじゃ、出来上がってしもうては、また不満が出てな……戦さも城攻めをしているうちが花じゃな」

この伏見城はしかし、従来の城がまえとかなり違ったものになるはずであった。秀吉の御殿が本丸の奥に新しい趣向で造作されると口さがない工事の者たちの噂にのぼったころ、伊賀から黒兵衛と連れ立って文吾は城見物に来た。

木幡山の丘陵を利用して四郭からなる壮大な城郭は、一見の価値がある。

二人は大工に変じて侵入した。土を削り、濠をつなぎ、土居をめぐらし、郭ざかいの石垣を築く——心得のある者が見れば配置の詳細と価値が判別できる。

「——これはよい城になる」

「淀城など、これに比べれば木小屋じゃナ」

「五介を連れてくればよかった。工築半ばを見るのも為になる」

五介はもう十一歳になっている。今日は留守番にしたが、忍びのわざは文吾も舌をまくほどの進捗ぶりを示している。

「左様でございますな、近日、また日をあらためて」

「参ろう」

夕暮。二人は城外に雨後の筍のように輩出した居酒屋に入った。

工事の者たちが肘がぶつかるほど混んで、安酒に口を軽くしている。こんな場所ほど意外な秘密を手にすることもできるものである。

「おれっちはよう、太閤さまのお城を作っているのじゃ、城作りじゃ、故郷へ去んだら自慢できるわいの」

「左様ともよ。われらがお手伝いのお城じゃ、乱波透波に荒らさせたくないものじゃがの」

「石川五右衛門というやつだろう」隣の席から同じような中年の男が、へべれけになって怒鳴った。「五右衛門の前には名城も破れ砦もないとよ」

「おうおう、わしも聞いた京の聚楽ノ邸が、石川五右衛門に散々荒らされたとなあ、何せ五右衛門というやつは、大した知恵者だというからの……」

こちらでは眉をひそめて目を見合わしていたのである。

噂というものは、当事者の思わぬ羽の拡がりかたをするものか。ところが、たんに噂にとどまらないことは、目のあたりにしてからである。

四

大規模な城郭作りにともない、郭北には城下街を附属するべく、縄張りが行なわれていた。むろん秀吉の指示による重臣らの控え屋敷である。大名重臣の屋敷の均衡と配置の妙は、後年徳川家康が江戸城街衢の参考にしたといわれるものであった。譜代、外様の別を巧みに分散配置して、万一の謀叛にそなえてある。秀吉を今日に導いた魅力の一つであった明けっぴろげな性格が、陰惨な狂疾じみたものになってゆく過程の一つとも見られよう。

屋敷作りのほうはしかし、大名の多くが出兵在鮮中であるし、したがって縄張り内でてんでんばらばらに建っていた。

城郭に先だちすでに完成したものもあれば縄張りだけで草芒々のなかに、たとえば小西摂津守拝領地と、立札がぽつんとあるだけのものも尠なくない。

すでに竣工した屋敷は蒲生、細川などの大名たちで大坂から移転してきた。

その細川忠興の邸に使者が来たのは夕景だった。

夜陰に馬を乗りつけてきた者が、

「開門！　開門！」

大音声に呼び立てた。門番が飛びだすと、

「それがしは石田治部少が家臣太田彦七。火急の主命にて罷り越した」

革羽織を着た立派な侍が五六人の供を連れて立っていた。

火急とあれば夜も昼もない。使者の間へ招じて留守居が応対する。忠興はあいにくと京の聚楽第へ出向いていて留守のことである。聚楽第には関白左大臣秀次がいる。先ごろ秀吉から譲られてこの豪華な御殿の主になっている。使者は留守居役にこう告げた。

「殿下よりの至急のお召しでござる。急ぎ有馬へ出向あられたいと」

秀吉は一昨日大坂を発し有馬温泉に赴いている。

留守居役は狼狽して、「主は京へ赴いてござれば直ちに御用向きの段早馬を以って申し送りますほどに、御前にはよしなに」と、倉皇と立った。

使い番三人が早馬を連らねて屋敷を飛び出したのはその直後である。そろそろ京へ着いたかと思われるころに、使い番の一人が血まみれになって馳せ戻ってきた。

「出合え候え、出合え候え、大事でござる。伏見街道は深草の辺りにて群盗あらわれ行手を阻んでおりますぞ。敵は多勢なり、早や早やと加勢に罷り越されたし」

屋敷中が湧いた。留守番の侍ども周章狼狽、押っとり刀で走り出す。だが、深草ノ里に来てみると、争闘の痕跡はあるが、誰もいない。すでに斬られたか、拉致されたか、或は虎口を脱して入洛し得たか。一同は狐につままれたような心持で、人数の半ばは、その辺の山中を捜

索し、残りは聚楽第に急いだ。

そのころ、がらあきになった伏見屋敷には鉢金頭巾におもてを隠し、小具足に身を包んだくせ者十数騎が闖入して女どもを縛り上げ、鎧櫃や長持ち唐櫃などから金銀三万余両、玻璃琅玕瑪瑙などの宝玉、太刀、絹などを強奪していた。

あざやかな手ぎわであった。いうまでもなく、石田治部少の使者など真っ赤な嘘であった。まんまと一杯くわされたのだ。

使い番二人は深草の山中で半死半生で発見された。群盗らの私語を聞いたので、首領の名がわかったと、言った。

「石川とか五右衛門とか囁いておりましたぞ」

「またか！　彼奴か」

細川家中は、奥歯を鳴らして口惜しがった。

この事件は、文吾が五介を伴って、また伏見城を訪れた前夜に起こったのである。これまでにも怪盗の横行があるとすべて石川五右衛門の所為とされた。あの北野の茶会での派手な一幕のためでもあった。

「――瞞り者が」

文吾は呻いた。

被害者や無責任な世間の当て推量なら仕方がないが、盗賊らが堂々と石川五右衛門と称して

いるとすると、これは由々しいことだ。すべての罪は文吾にかかってくる。

「故意に噂を利用しての目くらましでござろう」と、黒兵衛もいった。「用心なされませ。詮議がきびしゅうなりましょうほどに」

北野では、白昼はっきりと顔をさらしたのだ。

牢人風の作りは、生地に近い。いまさらのように浅慮を後悔した。

「したが、一体どやつが……」

「一人二人の盗人ならば、そこらに掃いて捨てるほど居りまする。少なくとも四十人がほどはいた勘定——ということになると、そこらの食い詰め者どもとは違いましょうな」

「二人三人も集まれば四十人くらいは」

「さ、それにしては手際があざやかすぎる、よほどに馴れた……左様、啄木斬孔ノ術を知り統率力ある輩……」

「彼奴か！　紅蜥蜴」

「多分……」

三条河原

一

怪盗の跳梁が頻繁になった。連夜のように大名、富豪の屋敷が襲われた。風のように現われ風のように消える。一人や二人でないことは確かなのだが、姿は見せぬ。その出没の幻妖ぶりはただの盗人のなし得るところではない。

忍法を心得た盗賊。石川五右衛門の名がその度に、なんらかの形で残された。それはふり撒かれた、といったほうがいいかもしれない。

聚楽第も、そして大坂城も襲われた。宝蔵から千枚分銅（いわゆる天正小判一両金を千枚溶

かした金塊）三本とギヤマンの水差し、ポルトガル商人より献上の黄金宝玉を鏤めた短剣などを掠められた。

秀吉は嚇怒して、

「憎き盗賊め、捕えた者には恩賞望み次第とするぞ」

だが、魔風にも似た変幻出没の賊なのだ。恩賞では埒があかぬ。秀吉は、紅蜥蜴を呼んだ。

この異端の忍者を呼ぶには、天守閣上で燭を点滅する。袖でかこって三度。それだけで充分だった。どこの闇に目があるのか。紅蜥蜴は呼吸百を数えぬうちに来た。

忍者なかまのいう〝白〟常人には忍者の投げる〝簇ノ声〟はどれも同じにしか聞こえない。紅蜥蜴自身か手下のものか、それを判別するだけの耳は、無い。

「石川五右衛門と申す鼠賊、是が非でも捕えい、屹度申しつくるぞ」

癇癖に頬をひきつらせ、額に青筋たてて命じた。

秀吉の激昂ぶりがかつて見ないほどのものであり、厳しい命令だと、手下のカナメから聞いたとき、服部半蔵は、

「やり過ぎたか」

と、苦笑を洩らしている。

半蔵が〝陰ノ臣〟から〝表ノ臣〟になるために——忍者という下賤の身分から、れっきとした旗本に取り立てられるために、秀吉を守るという奇妙に狡猾な操作をしてきたことを読者は

覚えていられるだろう。

紅蜥蜴の半蔵にとって、文吾の存在は必要だった。暴れ者がいなければ用心棒はいらない。執拗な刺客こそ、半蔵の存在価値に不可欠なのであった。

文吾がふっつり現われなくなったとき、半蔵は齟齬に舌打ちした。

手下を使嗾し、あるいは自身でもって、盗賊を働いたのも、石川五右衛門なる不敵な男のことを秀吉に忘れさせぬためであった。

半蔵は爪を噛みながら、呟くように、言った。

「文の字の、居所はまだわからぬか」

「はあ、伊賀うちには違いないと思いまするが……」

半蔵は無言で腰をあげた。

ここは甲賀多羅尾の盆地。服部一党は五、六年前からここを根拠地としていた。甲賀忍びの多羅尾四郎兵衛は本能寺ノ変の時以来、半蔵とつながりを持っている。多羅尾の西ノ山、大和に接するあたり土俗〝太夫ガ館〟と称える古い屋形がある。由緒あるものながら詳しくは誰も、その名の由来を知らぬ。濠を周囲に穿ち、土居を築き、物見台の址も残っている古館。建武のころの城砦と見てもよいであろう。半蔵一党の拠点となっている。

もとより古のままではない。内外ともに装いを改めてあるが、外観は質実で威しや衒いが毛ほどもない。忍者には虚飾は要らぬ。訪なう客もない。仕事の依頼は特殊な方法で行なわれ

る。ここ数年来の服部一党は他の仕事は一切断わってきた。大きな目的のために。

半蔵が入って行ったその書院は、しかし、瞠目するばかりの華麗な調度で飾られていたのである。

金屏風、螺鈿の飾り棚、青磁の香炉、眠燈台、二階棚、鏡台——調度にして足りぬものはなかった。蒔絵、梨子地、螺鈿などの凝った上乗物ばかりである。これだけ見れば大名か、公卿でも五摂家の官位高い姫君の居室としか思えない。

その姫にも、ふさわしい佳人が一人。

半蔵が廊下を渡ってきたのも気づかぬふうに、端然と坐っている。深い木立の庭へ目をむけているが別段、何を見ているというわけではない。

その美しい容姿はしかし、贅を尽した居室にも飽きたらぬかのように、愁いの翳を顔にも姿にもまとっていたのである。なめらかに蒼いまでの臈たけた姿であった。

半蔵は入ってきて、姫が身じろぎもせず、背をむけたままなので、ちょっと鼻白んだように唇を歪め、

「おふり」

と、呼んだ。

「おふり……」

「何の御用か」

冷たく突き刺すような声がかえってきた。

二

「きついのう、相変わらずに」

半蔵は苦笑して、膝を折った。この男が、ふと見せた気弱な顔である。鬼畜にも増して冷酷残忍な半蔵が、おふりの前に出ると、人間が変わったようになる。おのれ自身でもいまいましく感じながら、それを、どうにも扱いかねているのだった。

「いつまでも、左様に冷たくしておると、石の地蔵に化身してしまうぞ」

「——いっそ、そのほうがよい」

「情ごわな姫だの。総じて姫御前というものは、もっと生き生きとしたものじゃ。嬉しいというては笑い、哀しいというては泣き、腹が立ったというては怒る。またそれが愛らしいものじゃが、そなたは違う。笑いも泣きもせぬ」

「嬉しくも哀しくもないもの」

「これだけ調度があってもか。そなたのほしいであろうものは、すべて与えてあるではないか、何が不足か」

「おまえの顔が見たくない」

おふりはずばりと切りかえした。

「御挨拶だのう、おふり。左様な言葉をおれにむけたやつは、二度と息させぬ半蔵だぞ」

「殺すがよい」

はじめて、おふりは振りかえった。青葉の照りかえしばかりでなく、蒼白く透き通ったおもては青い炎のように、半蔵を搏った。

「またか」と、半蔵は唇を歪めた、「何かといえば、殺せ、じゃ。そう易々と殺せるくらいなら、苦労はせぬわい」

「おまえは、母さまを殺し、弟を殺し、召使いまで殺した、なぜついでにこの身も殺してはくれなかったの。十年も、このようにじりじりと、半死の日を永らえて何の生きている甲斐があろう」

十年——十年のあいだの軟禁がおふりから喜怒哀楽の情を奪ったといってよい。その美しい容姿が女の十五という花の盛りにもかかわらず、さながら、夫に先だたれた寡婦か、嫁かず後家のように臈たけて、血を冷たくしてしまっている。

半蔵は言葉を失う。しかし、一人の女をこうした目にあわせたことに、慚愧はない。目的のための犠牲者でしかない。はじめ、おふりという五歳の少女は、文吾を掣肘し秀吉を守るための〝道具〟でしかなかった。一箇の〝物〟にすぎぬ。生かして置くために、食を与え衣類を与えた。だが、年月は物であることを許さなくなった。母に似た天成の麗質は逆境にも拘らず、

美しさを増してきたからである。美しいと感じたとき半蔵はおのれを叱咤した。(囮の〝物〟に惚れるなぞと、半蔵ともあろう者が！)

仕事の間の緊張感が塒へ戻ったとき、一時に弛む。このとき忍者は人間に立ち還る。弛緩した心は安らぎをもとめ、花の匂いたつようなおとめに、心を惹かれたのである。

一昨年——おふりが十三歳のとき、半蔵は心猿に駆られて、おふりをとらえた。強い腕が、おとめを抱きすくめ、荒々しく小袖を剝ごうとしたとき、おふりは抵抗をやめた。

ふっ、と笑ったのである。蔑すみと呪いの笑み——唇から紅絹を垂らすような鮮烈な血が糸をひいた。半蔵は狼狽した。

「ばか、死ぬな！」

舌の一部が切れていた。忍者秘伝の薬餌によって慚く恢復したとき、半蔵はほっとした。人質を失うことより、かれ自身の胸にわいた哀しみをふりかえって、愕然としたのであった。

衣類はもとより、髪のもの白粉、化粧の品々から調度什器、何不足なく与えたが、おふりの心はひらかなかった。

「なぜ殺せぬ。いっそ殺してたも」

おふりの心が、そこまで固いとなると半蔵の想いはますます募った。

「殺せぬわ。いっそいまいましいのは、このおれが心じゃ」

「わたしを好きなら、わたしを自由にして下され、この館から出てゆきたいの」
「それだけは……ならぬ」
半蔵は哀しげに、だがきっぱりとはねつける。顔を合わせると、毎日のように、交される対話であった。
だが、今日は違った。凝っと沈思していた半蔵はややあって、
「出してやろう」
と、言ったのだ。
「え！　ほんとうに……」
「おれは嘘はつかぬ。だが、われらの手の内から逃げ出すことは愜わぬぞ」
それがどういう意味か、おふりが知ったのは数日経って、大坂へともなわれた後であった。
半蔵はあらかじめ手下の一人〝杉〟とよばれる印代ノ杉右衛門に大坂で具足店を開かせていた。大坂に於ける隠れ家であり、諜報機関でもある。具足店には武士が出入りするし、合戦の気配もすぐわかる。こうした店が各地にばら撒かれている。集団で財宝を担いだ群盗が忽然と消えるには、それだけの用意が出来ている。天に昇るのでも地にもぐるのでもない。地に潜るには、あらかじめ潜伏穴が掘ってなければならぬ。
さて、この具足店「きのや」が請け人となって、淀君の腰元へおふりが上がることになったのだ。淀城はすでに毀されて、淀君は大坂城へ移っている。新城の竣工を心待ちにしていた淀君は、浮き浮きして日ごろのように、きつい詮索もしない。
半蔵が次にしたことは、おふりの名を伊賀一円にひろめることだった。
「おふりとなん申す美女がな、伏見城に側女に上がったとやら」
百余人を使っての噂流しである。
乱波、透波、細作、反間——忍者の別名の多くが、人心攪乱の面を表現しているほど、この「噂流し」は巧妙に行なわれる。山で隔絶され隣国すら見たことのない者の多い時代では噂だけが唯一の報道網だった。
——かかるか？……
半蔵は、期待を抱いた。伏見の新城という舞台が魅力だった。文吾のほうでも新城の内部は調べていよう。太閤が巡見に来た夜がヤマであった。
おふりの名が、文吾をして秀吉刺殺を思いとどまらせた以上、彼女の健在がわかれば、当然、救いにくるはず、余人は知らず、忍びに一命を賭けるほどの者の根性は、二年や三年で挫折するものではない。文吾が生きているなら、当然あらわれる。おふりを救い、次に秀吉を狙う。

三

罠は仕掛けられていた。虎を捕るときには虎の習性を知り、その通る路に仕掛けるのが道理である。もとより文吾のほうでも、紅蜥蜴が張りこんでいるのは知っているはず。

半蔵は、これに処するに、二つの道をとっている。忍法でいうところの、「陽忍陰忍」ノ術である。

忍者には忍者の肚も読める。文吾の通りそうな道を「陽道」とし、迂回道を「陰道」と見立てた。陽道に張った忍者はおのれの潜みを「アラワス如クアラワサザル如ク」つまり、常人にはわからぬが、忍法達者の者には見えるように潜む。

これを見た侵入者は、おのれの目に満足し、北叟笑み、迂回する。すでに潜伏者を発見した以上別の道に安心を持つのは当然である。安心しないまでも、前度に比べて、弛みが生じるのはやむを得ない。

半蔵自身出向き、この陰道に潜んだ。

文禄三年八月十日——石川文吾にとって運命の夜であった。子ノ刻過ぎに城内本丸に忍び入った影があった。月が沈んだばかりの闇を、するすると影が這い進んだ。

動員した人夫二十五万人、東西十丁南北二十丁の総構えのうち九つの郭にわかれた起伏の多

い城内は、木幡山の山頂を包合する本丸の天守閣のわき疎林中に濠をめぐらした浮き島をもうけ御殿が建ててある。ここが太閤の常の住居となるはずであった。

新城は太閤をいたく満足させ、近臣に囲まれて酒宴のあと、寝に就いて、すでに半刻。

寝入りばなを狙うのは最も効果的である。暁は醒め易く、したがって、忍法秘巻に請う「忍入時分之事」の項目には、亥ヲ最高トス、子コレニ次ギ、タソガレマタヨシ——とある。寅（午前四時）ごろに入るのはよほど月の工合が悪いか遅い眠り（たとえば男女交媾に時間がかかりすぎた場合）のとき以外は狙うべからずとされている。

その影は、陽道にさしかかって、つと引きかえした。潜伏の呼気を察したのだ。だが、陰道にはかからぬ。陰道に行くと見せて、ふっと闇に溶けたのである。

（罠にかかった！）早合点した陽道の忍者十人、闇をすべって陰道へ——と、その裏をかいて文吾は陽道を池畔へ走った。

陰渡しをもって、池水を越えた。太閤の寝所へ忍びこんだ文吾がおふりを抱いて脱出してくるのに何ほどの時も要さなかった。太閤は乱杭歯を剝きだして眠り呆けていた。

おふりは別室に在った。半蔵にしてみれば文吾を捕えるのが本命でおふりの肌を老人に触れさせたくない。忍者に邪魔をされては天下の太閤と雖も手が出ぬ。太閤がおふりに夜伽を命じたとき、入ってきたのは淀君であった。太閤は苦虫を嚙みつぶした顔で淀君のそろそろ肥満の傾向にあるからだを抱かねばならなかった。

成長したおふりであるが、文吾にはすぐにわかった。お牧に生き写しだったからである。

池の畔まで戻ってきたとき、文吾は、左の林の中に、血に飢えたような梟のうごめきを察知した。

「声を立てぬように」

文吾は陰渡しに近づいた。池を渡るとき、懸け渡したものだ。水蜘蛛を穿いて渡るには兎の空気袋は二人の体重に耐えきれない。

梯子縄が水面以下一寸に張られている。おふりを抱いて滑るように渡りかけた。

と——

ひゅん！　夜気が哭いた。闇が唸り、ぴしっぴしっ樹木が、草が、呻いた。するどく適確な手裡剣の乱れ打ちだ。恐るべき敵。飛ぶには池は広く岸は遠い。水中に潜るには、おふりの身がきづかわれた。右に左に、忍者刀をもって払いのけるうちに、するどい牙ががっと肩に噛みついた。十方剣が食いこんだのだ。文吾はよろめいた。悲痛な声がほとばしった。

「やめろ、娘を撃つな！」

四

石川五右衛門こと伊賀者文吾は、人も知るごとく釜ゆでの極刑で波瀾にみちた生涯を終えた。

秀吉はしかし、最初からこの前代未聞の極刑をもってしたのではない。他の方法で四回行ない、四回ともあざやかに縄ぬけされている。

斬首せんとしたとき、文吾はあざやかに身を転じて、斬首人を足下に踏まえていた。その耳に、あの声が飛びこんだ。

〈おふりを殺したいか！〉

それが、文吾に刀を捨てさせた。

「おれは脱けようと思えばいつでも脱ける。が、願いを聞き届けてたもるならば、悦んで死のう」

その言葉は曳かれ者の小唄として一顧もされなかった。まだそのときまで秀吉は多寡をくくっていたのだ。車挽きの刑を宣された。荷車の轍にくくりつけて牛で曳きまわさせるのだ。牛が歩き出したとたん、固唾をのむ衆目の前であざやかに縄をぬけるや、翼を得たように大屋根に駆けのぼってしまった。

しかし、おふりを死に至らしめることは出来ぬ。文吾は縛に就いた。嚇怒した秀吉は牛裂きを命じた。二頭の逞しい黒牛に片足ずつ結びつけて股を裂こうとした。

秀吉はその姿へ冷笑を投げて、黒く笑い、

「これでは脱けられまい、いよいよ往生だの、股が裂けたあとでは、余が約束を破っても何ともできまいが」

卑劣な太閤の言葉が終わらぬうちに、文吾は憤然と手足のいましめをすり脱けて、牛の尻を切った。二頭の猛牛はおめき狂って暴走した。見物の武士女中たちに死傷数千人を出すという騒ぎになって、太閤は狼狽し、慄然とした。

「げに恐ろしい奴」

変幻妖異に打たれたのではない。この超人的な忍者が、おふりを助けるならば極刑に甘んじようという男らしさにうたれたのである。

捕われた日から半月ほど経って、文禄三年八月二十四日——霧の濃い朝であったが、三条河原には、大釜が濛々たる湯気で霧を溶かしていた。

伏見城から京都所司代の牢に移されていた文吾は洛中引き回しの上河原へ到った。河原の土手には黒山のように京雀が押しかけている。

その中に、おふりの顔があった。紙のように蒼ざめ、半ば死んだように身じろぎもせず立っている。

(哀れな娘……なまじ忍ノ者を養父に持ったばかりに……許せ)

楽しい盛りの十年間を、冷たい手に禁固されたまま、笑いを喪ってしまったような娘。哀れというにはあまりにも残酷な歳月ではないか。

(倖せになってくれい！　黒兵衛頼むぞ、五介も、姉になつくのじゃ)

群衆の中にいるであろう黒兵衛にそう呼びかけるのだった。

おふりの前後左右にそれぞれの窶し姿で佇む男たちがいずれも紅蜥蜴の一党であることは疑う余地はない。文吾の死を見きわめるまでは、おふりを自由にしないであろう。

(いまでも、脱けるつもりならば、脱けられるのだ……)と、文吾はおのれを煮る熱湯を見守りながら、会心の微笑が浮かぶのを禁じ得なかった。忍びに生き、忍びに死んでゆく者の唯一の慰めであった。

やがて、異様に烈しい臭気が漂い、そこここに感動の歔欷が起こり、それは波紋をひろげて群集を大波のように揺れさせてゆくのを、傀儡師に変装したままで服部半蔵は、解しかねるような不満でもって聞いた。

(阿呆めが、煮られてしもうたわい……太閤はこれで益々、紅蜥蜴を必要と感じるだろう。関白秀次がいるし、子まで生まれた、まだまだ三河のものにはならぬ。当分これまで通り操ることじゃ、この木偶のように、な……)

おふりを自由にするかどうか。忍ノ者の仁義を重しとするか、おのれの情念に従うか、どちらとも半蔵の心は決まっていなかったのである。

蛇足ながら、れいの沢庵禅師はその著書「玲瓏随筆」の中でこう書いている。

「昔、豊国相ノ世ニ大盗アリ名ヲ石川ト云ウ。アル人ノ曰ク、石川ヨク知仁勇アリ、彼ヲシテヨク一転セシメバ善人タルベシト。ソノ所々如何、賊ヲ以テ世ヲ久シク経ルトイエドモアラ

ワレズ、コレ知ナリ、ソノ徒ヨク従ッテ自ラ顕レナルトキハ則チ、仁愛アルナリ」
と。

解説

清原康正

本書は、早乙女貢の「忍法秘巻」シリーズの第一巻にあたる。連作形式のシリーズは全八巻にもおよぶが、その劈頭を飾る本書は、天正十一年（一五八三）春に始まり、文禄三年（一五九四）に終わる。もちろん、天正十一年以前の時代の潮流なども物語の進行と見合った形で詳細に説明されているから、時代背景そのものは、もっともっと広範囲なものとなっている。

本書のタイトルからも分かるように、このシリーズには数多くの忍者たちが登場してくる。本書での軸となる忍者は、石川文吾と服部半蔵。どちらも伊賀忍びである。忍術は甲賀と伊賀の山間部地帯に発生した、特殊で合理的な技術であることはよく知られている。その特殊で合理的な技術といったものが、この二人の伊賀忍びによって、どう具現化されていくか、これが本シリーズの楽しみな点でもある。

さて、物語は、天正十一年早春、若い男女の駆け落ちシーンから始まる。

男は、石川文吾。五年前に忍法達者の楯岡ノ道順の高名を慕ってやって来た。「目鼻だちもよく二十歳そこそこで六尺になんなんとする美丈夫」であり、「才知のきらめき」もある若者

だ。女は、もと京の桂女（遊女）だったお志貴。「加茂の流れで垢ぬけた女」だが、「貞節という言葉を母の胎内に忘れてきた女」でもある。彼女は上野服部ノ庄の名流で伊賀上忍の服部半蔵の女であった。半蔵も自分の忍びの技をさらに磨くために道順のもとに来ていたのだが、二年前に、伊賀忍びの掟を破って徳川家康に臣従した。道順はその背反を責め、半蔵を破門にすると共に、お志貴を奪ってしまったのである。

文吾とお志貴は、若い者同士、惚れ合ってしまう。そして、二人は手に手を取って、道順のもとから駆け落ちして来たというわけだ。もちろん、そのあとを、嫉妬で怒り狂った道順が追っかけてくる。老齢とはいえ、すべてにおいて文吾より術のたけた道順である。二人はついに追い詰められてしまう。道順は女を奪った若者へ憎悪を叩きつける。文吾はこの怒り狂った師の術をどうくぐり抜けるか。

それはここでは明かすまい。本篇を読んでのお楽しみである。だが、それでは本稿が先に進まないので、一瞬の技で、文吾は師を倒し、お志貴と京へ逃げることだけは明かしておこう。

京で、めくるめく恍惚の日々を送った文吾とお志貴にも、やがて倦怠の日々が訪れる。お志貴が道順のもとから持ち出してきた金も尽きてしまった。万事に派手好きなお志貴には、京の片隅でひっそりと暮らすなどという地味なことはできない。伊賀と縁を切った文吾に残された道は、忍者のもっとも戒めとされた盗人しかなかった。公卿屋敷を襲って帰ってきた文吾は、お志貴が遊女時代の顔なじみの男を引っ張り込んで戯れているのを見て、姿を消す。

文吾はその後、越前北ノ庄で柴田勝家軍の陣場借りをしたあと、大坂に出る。ここで秀吉のお召しという難題にあったお牧とおふりの母娘を助ける。

一年後、京堺を中心に跳梁する風盗となった文吾は、堺でお牧と世帯を持っていた。五歳のおふりには、五介という生まれたばかりの弟もできた。

一方、半蔵は、家康に仕えるかたわら、天下を取りつつある秀吉にも接近していた。いわば二股膏薬を狙っていたのだ。家康は秀吉の命を取れと命令してきたが、いま秀吉に死なれては困ると、半蔵は秀吉を狙う勢力から秀吉を守ってやるのだった。

伊賀忍びは、全国の大名や土豪などに雇われて報酬を得ることを生業（なりわい）とする。彼らは伊賀から外に出て、仕事が終われば、また故郷へ帰って来た。だが、そのパターンは、織田信長の伊賀攻めで崩れ去ってしまう。信長の徹底した弾圧によって、伊賀の者たちは国を捨てて異郷に流浪せざるを得なくなってしまった。半蔵はおのれの土地を持たない伊賀者の窮迫と悲哀を痛感して、家康に臣従したのだった。こうした複雑な半蔵の心情が、伊賀の里の歴史と共に語られていき、半蔵の立場というものがよく分かる。

その半蔵は、お志貴を奪われた逆うらみでお牧をさらい、秀吉に献上してしまう。お牧は舌をかんで果てる。娘のおふりは半蔵がさらっていってしまい、行方不明だ。文吾は秀吉への復讐も誓い、大坂城へ侵入する。もちろん、それに対して、半蔵が防衛に出る。こうした文吾と半蔵の忍者のプライドを賭けた闘いに並行して、秀吉と家康のポスト信長の覇権をめぐる駆け

引きのさまも描かれていく。こちらは武力なき闘いである。

この二種類の男の闘いに関連して、伊賀忍びの歴史や忍術そのものの発展史、そして信長亡きあとの政治情勢と秀吉の野望、家康の隠忍自重のさまなどが、物語進行の興味をフォローする形で語られていく。

息子五介を一人前の忍者にすることを楽しみにしていた文吾は、秀吉への復讐心から、大坂城へ侵入しては、淀はじめ秀吉の愛妾を犯し、北野の大茶会に乗り込んでは秀吉を面罵し仰天させる。文吾は大怪盗石川五右衛門として天下に喧伝される男となった。だが、半蔵の仕掛けた卑劣なワナにかかって捕われ、釜ゆでの刑となって果てる。

石川五右衛門は山科言経卿の日記（文禄三年）にも記されている盗賊で、服部半蔵は現代の東京に半蔵門という地名を残した人物である。石川五右衛門の人気は江戸時代からすでに始まっており、歌舞伎では鶴屋南北の「高麗大和皇白浪」などが知られている。その脚本は「石川五右衛門狂言集」というアンソロジーが編めるほど多く、石川五右衛門の大衆的な人気のほどが分かる。

この石川五右衛門を石川文吾として主人公格で登場させ、悩み多き青年忍者として権謀術数にたけた半蔵や天下取りの野望に燃える秀吉に刃向かわせる。文吾の反抗のもとにあるのは、お牧への愛であった。文吾と半蔵の生きざまの違い、そして秀吉と家康の武将としての、施政者としてのありようの違いなど、四人の男たちの生きざまがとらえられているところが面白い。

早乙女貢は『男――生きざまの研究』という歴史人物論の中で、次のように述べている。

「男の生き方というものは――

信念と強固な意志に尽きる。それがたとえ、PTA的良識という物差しから見た場合、ゆがんでいたとしても、万難を排して押し通すということが大切だ。

その行動が狂的であっても、そこには〝男の生きる〟姿がある。生きるということは、ただ飯を食って、日々の生を漫然とぬすむことではない」

文吾はこの「信念と強固な意志」でもって、ワナと悟りながらも、おふりを助けるために半蔵のワナにかかってしまう。それが文吾の〝生きざま〟なのである。あとの三人にも、それぞれの信念と意志があり、それが火花を散らしてぶつかり合っている。四人それぞれの個性がぶつかるさまを描いてもいるのだ。

石川文吾、いや、石川五右衛門は死んでしまったが、このあとのシリーズでは、五右衛門の子供たちに活躍の場が与えられていく。そして、時代は、関ケ原の合戦前夜の緊迫した情勢、関ケ原の役での東西両軍の激突、戦後の状況へとつながっていく。つまり、読者は、こうした時代の流れを、忍者たちの生きざまを通して眺めていくことになるわけだ。忍者たちがこの激動の時代とどう関わっていくか、どんな生きざまを見せてくれるか、楽しみなことではないか。

一九九三年六月

この作品は1985年6月双葉社より刊行されました。

徳間文庫

忍法秘巻（にんぽうひかん）

© Mitsugu Saotome 1993

ISBN4-19-577646-5（乱丁、落丁本はお取りかえいたします）

著者　早乙女貢（さおとめみつぐ）
発行者　徳間康快（とくまやすよし）
発行所　株式会社徳間書店
東京都港区新橋四―一〇五　〒一〇五
電話（〇三）三四三三・六二三一（大代）
振替　東京四―四四三九二番
印刷　凸版印刷株式会社
製本
1993年7月15日　初刷
〈編集担当　吉川和利〉

〈歴史時代小説〉

おれが天一坊《全二冊》 早乙女貢
見習い同心獄門帳 早乙女貢
残映 早乙女貢
新選組銘々伝 早乙女貢
八丈流人帖 早乙女貢
忍法かげろう斬り《全三冊》 早乙女貢
血刃街道 早乙女貢
忍法秘巻 早乙女貢
淀どの覚書 澤田ふじ子
黒染の剣 澤田ふじ子
七福盗奇伝 澤田ふじ子
夕鶴恋歌 澤田ふじ子
闇の絵巻《上下》 澤田ふじ子
けもの谷 澤田ふじ子
森蘭丸 澤田ふじ子
忠臣蔵悲恋記 澤田ふじ子
逃げ水《上下》 子母沢寛
からす組《上下》 子母沢寛
父子鷹《上下》 子母沢寛
おとこ鷹《上下》 子母沢寛
昼の月 子母沢寛
駿河遊侠伝《全三冊》 子母沢寛
花の雨 子母沢寛
河内山宗俊 子母沢寛
お坊主天狗 子母沢寛
鳴門血風記 白石一郎
黒い炎の戦士[1]～[5] 白石一郎
風来坊 白石一郎
勝海舟 高野澄
西郷隆盛 高野澄
伝宮崎滔天 高野澄
宣教師が見た織田信長 高野澄
琉球紀行 高野澄
ゆっくり雨太郎捕物控[1]～[6] 多岐川恭
柳生の剣 多岐川恭
女人用心帖《上下》 多岐川恭
闇与力おんな秘帖 多岐川恭
明暦群盗図 多岐川恭
悪の絵草紙 多岐川恭
岡っ引無宿 多岐川恭
元禄葵秘聞《上下》 多岐川恭
四方吉捕物控[1]～[3] 多岐川恭
戦国名将伝 檀一雄
真説石川五右衛門《上下》 檀一雄
新説国定忠治《上下》 檀一雄
三代将軍家光 徳永真一郎
後醍醐天皇 徳永真一郎
太閤秀吉 徳永真一郎
乱れ官女 徳永真一郎
伊賀者始末 戸部新十郎
伊賀組同心 戸部新十郎
風盗 戸部新十郎
総司はひとり 戸部新十郎
総司残英抄 戸部新十郎
安見隠岐の罪状 戸部新十郎
鳴門太平記《全三冊》 富田常雄

風雲真田軍記《上下》 富田常雄
天狗往来 富田常雄
寛永独妙剣《上下》 富田常雄
剣侠阿ノ一番《上下》 富田常雄
忍者猿飛佐助《上下》 富田常雄
柔《上下》 富田常雄
江戸無情《全三冊》 富田常雄
春色江戸巷談 富田常雄
天保美剣士録《上下》 富田常雄
山中鹿ノ介 中山義秀
塚原卜伝 中山義秀
新剣豪伝 中山義秀
戦国無双剣《上下》 中山義秀
戦国武将列伝[1]～[3] 縄田一男編
南国武道 南條範夫
元禄小源太《上下》 南條範夫
右京介巡察記 南條範夫
剣光斜めに飛べば 南條範夫
兵衛介見参 南條範夫
おれは半次郎 南條範夫
孤剣二十六万石《上下》 南條範夫
戦国若衆 南條範夫
十五代将軍《上下》 南條範夫
第三の浪士《上下》 南條範夫
鶴千之介 南條範夫
剣士流転《上下》 南條範夫
侍八方やぶれ《上下》 南條範夫
織田信長《上下》 南條範夫
豊臣秀吉 南條範夫
元禄太平記《全二冊》 南條範夫
夢幻の如く 南條範夫
伊達藩征服 南原幹雄
いろの罠 南原幹雄
箱崎別れ船 南原幹雄
江戸妻お紺 南原幹雄
廓祝言 南原幹雄
薩摩藩乗っ取り 南原幹雄
無法おんな市場 南原幹雄
女絵地獄 南原幹雄
剣聖伊藤一刀斎《われ開眼せり》 仁田義男
剣聖伊藤一刀斎《神剣払捨刀》 仁田義男
剣聖伊藤一刀斎《秘剣見山》 仁田義男
剣聖伊藤一刀斎《殺人剣修羅》 仁田義男
剣聖伊藤一刀斎《無想活人剣》 仁田義男
荒木又右衛門《上下》 長谷川伸
上杉太平記 長谷川伸
相馬大作と津軽頼母 長谷川伸
紅蝙蝠 長谷川伸
戸並長八郎 長谷川伸
殴られた石松 長谷川伸
国姓爺《上下》 長谷川伸
西郷隆盛《全一一巻》 林房雄
青年《上下》 林房雄
維新の烈風 古川薫
幕末長州藩の暗闘 古川薫
夜明けを切り開いた志士たち 古川薫
柳生十兵衛 峰隆一郎

柳生十兵衛《龍尾の剣》 峰隆一郎
柳生十兵衛《逆風の太刀》 峰隆一郎
柳生十兵衛《剣術猿飛》 峰隆一郎
柳生十兵衛《兵法八重垣》 峰隆一郎
柳生十兵衛《月影の剣》 峰隆一郎
柳生十兵衛《無刀取り、四十八人斬り》 峰隆一郎
柳生十兵衛《斬馬剣》 峰隆一郎
柳生十兵衛《極意転》 峰隆一郎
風流あじろ笠 村上元三
鎮西八郎為朝《上下》 村上元三
千姫 村上元三
天保六道銭 村上元三
千両鯉 村上元三
八丁堀同心 加田三七《上下》 村上元三
加田三七捕物そば屋 村上元三
加田三七捕物帖 村上元三
三界飛脚《全三冊》 村上元三
海を飛ぶ鷹《上下》 村上元三
天馬往来《高杉晋作》 村上元三
足利尊氏《上下》 村上元三
勝海舟《上下》 村上元三
からす天狗《上下》 村上元三
藤堂高虎 村上元三
平清盛 村上元三
風の呪殺陣 隆慶一郎
〈エンターテインメント〉
極道 青山光二
義 青山光二
仁 青山光二
任侠 青山光二
博徒 青山光二
女侠 青山光二
蝶の骨 赤江瀑
春喪祭 赤江瀑
海贄考 赤江瀑
荊冠の耀き 赤江瀑
天皇賞への走路 阿部牧郎
海の放浪者 阿部牧郎
商社崩壊 阿部牧郎
情事の追跡者 阿部牧郎
情事の目撃者 阿部牧郎
情事の脅迫者 阿部牧郎
夜の息づかい 阿部牧郎
金曜日の寝室 阿部牧郎
ニッポン野球株式会社 阿部牧郎
ビル街の官能 阿部牧郎
狼たちが笑う日 阿部牧郎
蜜月新報 阿部牧郎
白い肌の神々 阿部牧郎
抱擁カレンダー 阿部牧郎
夜の肌ざわり 阿部牧郎
天使の寝室 阿部牧郎
20時の誘惑者《上下》 阿部牧郎
娼婦の町の蜜月 阿部牧郎
ドン・キホーテ軍団 阿部牧郎
裸体家族 阿部牧郎
キャリアガールズ《上下》 阿部牧郎
熱い夜の旋律 阿部牧郎

白夜の妖精たち 阿部牧郎
½の誘惑者 阿部牧郎
オフィスガールの更衣室 阿部牧郎
ある朝の戦雲 阿部牧郎
週末の交際《上下》 阿部牧郎
快楽の製作者 阿部牧郎
昼休みの情事 阿部牧郎
虹の野望 阿部牧郎
機密漏洩 阿部牧郎
夜の調査員 阿部牧郎
自由家族《上下》 阿部牧郎
大いなる情事 阿部牧郎
甘い旅路 阿部牧郎
夜の軍団 阿部牧郎
幸福伝説 阿部牧郎
寝顔 阿部牧郎
女の冒険 阿部牧郎
夜の視線 阿部牧郎
シャワールームの女 荒木一郎
恋横丁恋暦 嵐山光三郎
走れホース紳士 石川喬司
競馬聖書 石川喬司
馬家物語 石川喬司
命 石川喬司編
紳士は競馬がお好き 石川喬司
ホース紳士奮戦す 石川喬司
空 海稲垣真美
徳川女系図《全二巻》 岩崎栄
秘本西遊記 宇能鴻一郎
金髪 宇能鴻一郎
すわっぷ団地 宇能鴻一郎
むちむちぷりん 宇能鴻一郎
むれむれ夫人 宇能鴻一郎
おんな体育教師 宇能鴻一郎
メイド日記 宇能鴻一郎
ソープランド日記 宇能鴻一郎
女医も濡れるのむっちり妻 宇能鴻一郎
女体開検 宇能鴻一郎
セクハラ大好き 宇能鴻一郎
疑惑株 江波戸哲夫
小説通産省 江波戸哲夫
小説郵政省 江波戸哲夫
受難管理職 江波戸哲夫
特命社員 江波戸哲夫
企業内棄民 青梅浩
原子力空母を阻止せよ 大石英司
戦略原潜浮上せず《上下》 大石英司
ある補充兵の戦い 大岡昇平
わが復員わが戦後 大岡昇平
小説電通 大下英治
ドキュメント三越の女帝 大下英治
修羅の群れ《上下》 大下英治
渡辺美智雄の総裁選 大下英治
社長ハンティング 大下英治
殺人株式会社 大下英治
捨身の首領 金丸信 大下英治

欲望銘柄 大下英治
悪徳株式会社 大下英治
蘇ったミスター球団 大下英治
東京外為市場25時 大下英治
小説 渡辺軍団 大下英治
流星企業 太田俊夫
骨肉決算書 太田俊夫
株主総会殺人事件 太田俊夫
虚飾の城 太田俊夫
社長失脚 太田俊夫
悲将ロンメル 岡本好古
日本海海戦 岡本好古
登龍門 岡本好古
蒼海の零戦 岡本好古
最後の艦隊 岡本好古
徐福渡来伝説《移郷の人》 岡本好古
揚州の幻伎 岡本好古
ファントム・バルーン 岡本好古
不沈戦艦 岡本好古

東京大空襲 岡本好古
総務部長憤死す 小高根二郎
会社再建腕比べ 小高根二郎
色魔《全三冊》 梶山季之
ミスターエロチスト 梶山季之
かんぷらちんき《上下》 梶山季之
みんな黙れ《全三冊》 梶山季之
どないしたろか《上下》 梶山季之
すけこまし《上下》 梶山季之
名人にて候《上下》 梶山季之
銀座遊侠伝 梶山季之
銀座ナミダ通り 梶山季之
ノンフィクション選集①日本の内幕 梶山季之
ノンフィクション選集②実力経営者伝 梶山季之
ノンフィクション選集③日本事件列島 梶山季之
ノンフィクション選集④昭和人物伝 梶山季之
ノンフィクション選集⑤ルポ戦後縦断 梶山季之
春雨物語 加堂秀三
愛の空恋の森 加堂秀三
会社卒業 加藤仁
夜より遠い闇 北方謙三
傷だらけのマセラッティ 北方謙三
馬賊戦記《上下》 朽木寒三
馬賊天鬼将軍伝《上下》 朽木寒三

札幌の女 梶山季之
博多の女 梶山季之
知能犯 梶山季之
虚栄の館 梶山季之
甘い樹液 梶山季之
白い廃液 梶山季之
彫辰捕物帖 一〜六 梶山季之
乗取りの背景 梶山季之
トップ屋戦士の記録 梶山季之
暗い花道 梶山季之
女巡拝記 梶山季之
嵯峨野の宿 加堂秀三
春雨物語 加堂秀三
愛の空恋の森 加堂秀三
会社卒業 加藤仁
夜より遠い闇 北方謙三
馬賊戦記《上下》 朽木寒三
馬賊天鬼将軍伝《上下》 朽木寒三

救世主第4号 胡桃沢耕史
六十年目の密使 胡桃沢耕史
旅人よ 胡桃沢耕史
太陽の祭り 胡桃沢耕史
危険な旅 胡桃沢耕史
新宿裏町流し唄 胡桃沢耕史
天山・絲綢之路行 胡桃沢耕史 正木信之
動乱の曠野 胡桃沢耕史
ぼくの小さな祖国 胡桃沢耕史
天山を越えて 胡桃沢耕史
情炎つきるまで 胡桃沢耕史
ヒネモス・のたり氏は名探偵 胡桃沢耕史
ごきぶり商事痛快譚《全五冊》 胡桃沢耕史
タイム・アフター・タイム 軒上泊
小説 天皇裕仁 小泉譲
河内カルメン 今東光
河内ぞろ 今東光
愛染地獄《上下》 今東光
弓削道鏡 今東光

武蔵坊弁慶《全四冊》 今東光
北斎秘画 今東光
太平記《全四冊》 今東光
蒼き蝦夷の血《全四冊》 今東光
左遷 咲村観
人事課長の憂鬱 咲村観
三等管理職 咲村観
鉄騎兵、跳んだ 佐々木譲
死の色の封印 佐々木譲
白い殺戮者 佐々木譲
頭取を罠にかけろ 笹子勝哉
目標、砲戦距離四万！ 佐藤大輔
赤い絨毯 清水一行
巨大企業 清水一行
ふてえ奴《上下》 清水一行
札束時代《赤たん褌》 清水一行
一億円の死角 清水一行
すげえ奴 清水一行
女相場師 清水一行

不敵な男《上下》 清水一行
派閥渦紋 清水一行
サラリーマン直訴 清水一行
太く短かく《上下》 清水一行
取締役候補 清水一行
擬制資本 清水一行
問題重役 清水一行
事件屋悠介 清水一行
ダイヤモンドの兄弟 清水一行
証券恐慌 清水一行
天から声あり《上下》 清水一行
投機地帯 清水一行
毒煙都市 清水一行
寄生虫 清水一行
最高機密 清水一行
匿名商社 清水一行
大物《全二冊》 清水一行
燃え盡きる 清水一行
砂防会館3F 清水一行

社命 清水一行
株の罠 清水一行
逃亡者 清水一行
時効成立 清水一行
天国野郎 清水一行
地銀支店長 清水一行
株価操作 清水一行
頭取の権力 清水一行
蟻の奈落 清水一行
会社の女 清水一行
風の骨 清水一行
殺人念書 清水一行
銀行取付 清水一行
イエスタデイ 清水義範
新黙示録北辰の秘宝 志茂田景樹
新黙示録飛龍の秘図 志茂田景樹
新黙示録銅鐸の秘曲 志茂田景樹
新黙示録龍宮の秘画 志茂田景樹
新黙示録北海の秘祭 志茂田景樹
新黙示録安曇野の秘宮 志茂田景樹
冷血の罠 志茂田景樹
拳銃と報復 志茂田景樹
制覇 志茂田景樹
邪馬台国の神符 志茂田景樹
悪魔の棲む館 志茂田景樹
桜桃忌殺人事件 志茂田景樹
聖徳太子の神歌 志茂田景樹
戸隠霊峰の神魚 志茂田景樹
悪魔の宿る森 志茂田景樹
黄金の葉茶壺 志茂田景樹
熱き魂の復活 志茂田景樹
首狩りの海上路 志茂田景樹
復活の盟約 志茂田景樹
魔黙示録魔界の裁き 志茂田景樹
魔黙示録魔界の逆襲 志茂田景樹
魔黙示録魔界の慟哭 志茂田景樹
新黙示録卍篇魔修羅、怒る 志茂田景樹
新黙示録卍篇魔修羅、燃える 志茂田景樹
新黙示録卍篇魔修羅、哭く 志茂田景樹
首領を継ぐのは俺だ 志茂田景樹
拳銃と命 志茂田景樹
拳銃と報復 志茂田景樹
双子姉妹の事件簿[1][2] 志茂田景樹
ふくろう警視 志茂田景樹
隠密ジャイアンツ 新宮正春
殺しのラフロード 新宮正春
信玄狙撃 新宮正春
小説日米自動車戦争 宗田理
ガラスの靴 宗田理
地下鉄殺人ゲーム 宗田理
隠れ商売繁盛記 宗田理
愛言葉 高階方子
破滅への疾走 高杉良
欲望産業《上下》 高杉良
銀行人事部 高杉良
社長解任 高杉良
商社審査部25時 高任和夫
ライン河の白い霧笛 高柳芳夫